

身体障害者補助犬のトイレに関する基礎調査 報告書

2026 年 3 月

身体障害者補助犬のトイレに関する基礎調査報告書

目次

第1章 事業概要

1.1 事業目的	5
1.2 事業概要	5

第2章 実施内容

2.1 補助犬専用トイレの事例収集	7
2.1.1 国内外主要空港の補助犬トイレの実態調査	7
2.1.2 国内外における補助犬専用トイレの設置状況調査 － Google マイマップによる可視化の試み	18
2.2 アンケート調査及びインタビュー調査	21
2.2.1 国内外の補助犬訓練事業者へのアンケート調査	21
2.2.2 補助犬ユーザーに対する補助犬排泄方法に関するインタビュー調査	26
2.2.3 一般市民に対する補助犬の排泄に関する意識調査（単純集計編）	44
2.2.4 一般市民に対する補助犬の排泄に関する意識調査（分析編）	55

第3章 課題整理と補助犬整備方針の検討

3.1 そのトイレ、補助犬は使えますか？ 犬の行動と心理から読み解く排泄環境の課題	74
3.2 補助犬トイレ整備方針の検討（案）	77
おわりに	80

参考資料

参考資料 1 第1回 WG 議事概要	81
参考資料 2 国内外の補助犬訓練事業者のアンケート調査票（日本語 / 英語）	83
参考資料 3 補助犬ユーザーに対する補助犬排泄方法に関するインタビュー調査票	86
参考資料 4 補助犬の排泄に関するアンケート調査票（WEB 調査）	88
参考資料 5 国内外主要空港の補助犬トイレ実態調査対象空港一覧	95

※本報告書では、補助犬使用者、補助犬ユーザーは同義語とします。

バリアフリートイレ、多機能トイレ、多目的トイレ、だれでもトイレは同義語とします。

マナーベルトとワンツートベルトは同義語とします。

ペットシートとトイレシートは同義語とします。

第 1 章 事業概要

1.1 事業目的

2002年の身体障害者補助犬法（以下、補助犬法）施行により、国内では2025年10月時点で盲導犬（768頭）、介助犬（56頭）、聴導犬（52頭）が身体障害者補助犬（以下、補助犬）として認定され活動している。補助犬ユーザーにとって、外出時の困難のひとつに「補助犬の排泄」があり、補助犬ユーザーと補助犬が安心して利用できる排泄環境が求められる。そして、そこには補助犬ユーザーと補助犬、補助犬の排泄に対する一般市民の理解も必要不可欠である。現在までに国内の様々な施設において補助犬トイレの設置が進められてきた一方で、訓練を受けた補助犬はバリアフリートイレや屋外空間での排泄が可能であり、補助犬トイレの利用実態が把握されていない現状で、補助犬トイレ整備の有効性が不透明な状況にある。また、社会で共生する一般市民の補助犬の排泄に関する認識も不明である。

補助犬トイレは空港、ショッピングモール、競技場、観光施設など多様な人が利用する場所で設置がすすめられているが、バリアフリートイレも様々な施設に設置されており実際に補助犬の排泄に利用されている。これまで補助犬の排泄環境について調査した事例はなく、補助犬ユーザーが利用しやすく、施設管理者が管理しやすい環境整備につなげられるよう補助犬の排泄環境の方針を検討する一助となる基礎調査の実施を目的とする。

1.2 事業概要

この事業は、公益財団法人交通エコロジー・モビリティ財団（以下、エコモ財団）の2025年度自主事業として、特定非営利活動法人日本補助犬情報センターに委託し実施した。

1.2.1 「補助犬のトイレに関する設備方針の検討ワーキンググループ（以下、WG）」の設置

本事業では、エコモ財団がワーキンググループを設置し、委託先である日本補助犬情報センターが資料の作成等を行った。

・WG委員名簿（2026年3月時点、敬称略、五十音順）

委員	入交真巳	東京農工大学ワンウェルフェア高等研究所 特任准教授
委員	川内美彦	東洋大学人間科学総合研究所 客員研究員
委員	日野晶子	株式会社 LIXIL LWTJ 営業本部セールス&マーケティング部スペースプランニング G ユニバーサルデザインチーム
委員	山本真理子	帝京科学大学生命環境学部アニマルサイエンス学科 准教授
委員	吉田文	日本補助犬情報センター 理事長／大阪大保健医療大学作業療法学専攻 教授
事務局	橋爪智子	日本補助犬情報センター 専務理事兼事務局長
事務局	竹島恵子	エコモ財団企画調査部バリアフリー推進グループ 参事

・ワーキングの実施状況

ワーキングは、以下の1回を開催した。

2025年9月2日（火）10:00～12:30 エコモ会議室およびオンライン

議題：事業概要、基礎調査内容、その他

1.2.2 事業項目の役割分担（敬称略）

- ・2.1.1 国内外主要空港の補助犬トイレの実態調査：山本真理子（WG委員）、福原知謹（帝京科学大大学院）、倉澤悠維（神戸大学大学院）、三浦靖史（神戸大学大学院）
- ・2.1.2 国内外における補助犬専用トイレの設置状況調査：日本補助犬情報センター
- ・2.2.1 国内外における補助犬の排泄訓練調査：山本真理子（WG委員）、福原知謹（帝京科学大大学院）、倉澤悠維（神戸大学大学院）、三浦靖史（神戸大学大学院）
- ・2.2.2 補助犬ユーザーに対する補助犬排泄方法方法に関するインタビュー調査：日本補助犬情報センター
- ・2.2.3 補助犬の排泄に関する意識調査（単純集計編）：日野晶子（WG委員）、川内美彦（WG委員）、日本補助犬情報センター
- ・2.2.4 補助犬の排泄に関する意識調査（分析編）：日野晶子（WG委員）、川内美彦（WG委員）、日本補助犬情報センター
- ・3.1 そのトイレ、補助犬は使えますか？：入交真巳（WG委員）

第 2 章 実施内容

2.1 補助犬専用トイレの事例収集

国内における公共交通機関（高速道路含む）、公共施設、観光施設等における補助犬トイレの整備事例をインターネット等で収集し、必要に応じて現地視察を実施した。あわせて、海外における施設内におけるアシスタンスドック等のトイレの整備事例をインターネット等で収集した。

また、上記の情報等をもとに、Google の提供する Google マップサービスを利用して、日本や国外にある補助犬トイレ（国外の場合は、Pet Relief Area や Animal Relief Area）をまとめた。空港等にある補助犬または犬用トイレについてどのような意見を持っているかなどを聞いた。

2.1.1 国内外主要空港の補助犬トイレの実態調査

2.1.1.1 はじめに

身体障害者補助犬（以下、補助犬）は身体障害者の社会参加を目的に身体障害者補助犬法に基づき、訓練および認定された犬である。補助犬は国家公安委員会の指定法人である盲導犬訓練事業者、または、第二種社会福祉事業の届け出をした介助犬・聴導犬訓練事業者により訓練されている。盲導犬については、社会福祉法人日本盲人社会福祉施設協議会自立支援施設部会・盲導犬委員会により策定された「盲導犬訓練 3 計画」において、最低 80 日の訓練を行わなければならないと定められている。また、介助犬と聴導犬は、補助犬法に附帯する「介助犬訓練基準」および「聴導犬訓練基準」において、訓練日数が定められており、基本訓練は介助犬・聴導犬ともに概ね 60 日以上、動作訓練は介助犬が概ね 120 日以上、聴導犬が概ね 100 日以上、合同訓練は介助犬が概ね 40 日以上、聴導犬が概ね 10 日以上とされている。この過程において、補助犬は補助犬使用者の指示で排泄するよう訓練を受けており、補助犬の排泄（時間や場所）は補助犬使用者によって適切に管理されている。これにより補助犬は補助犬使用者に同伴して社会参加することが可能となっている。

ただし、補助犬の排泄場所（環境）についての細かな訓練方法は訓練事業者や補助犬の種類により異なっている。例えば、日本では盲導犬の場合、排泄物の回収をしやすいようにマナーベルト（写真 1）を使用した排泄訓練を受けている場合も多い。また、介助犬の場合、使用者が排泄物を処理しやすいように、台の上に敷いたトイレシートの上で排泄する訓練を受けていることもある。特に、屋外の排泄に適した場所（土や植え込みの脇など）にアクセスできない環境では、上記のような地面を汚さずに排泄する方法を補助犬が身に付けておくことは重要となる。



写真 1. マナーベルトを着用している盲導犬（左：排便時、右：排尿時（オスの場合））

日本では各地に補助犬トイレを設置する動きがあるが、その設置場所やトイレ内の設備は施設によって異なる。補助犬使用者の障害特性は多様であることから、補助犬トイレに対するニーズが必ずしも同様とは言えない。なお、補助犬やサービスアニマル（便宜上、以下補助犬）の実働数が多いアメリカでは、米国運輸省が定めた障害者差別禁止にかかわる行政規則（49 CFR § 27.71）により、年間搭乗者数が 1 万人以上の空港は乗客が同伴する補助犬のために、車椅子で利用可能な補助犬トイレ（Service Animal Relief Area）を設置することが求められている。補助犬トイレの設置にあたっては、表 1 のように要件が詳しく決められている。

空港やショッピングモールなど多様な人が利用する場所において、補助犬使用者が利用しやすく、かつ施設管理者が管理しやすい排泄環境の整備に資する基礎資料を得ることを目的とする。国内外空港施設における補助犬トイレの実態調査である。北米を中心に空港では補助犬トイレの設置が進んでいることから、日本より補助犬の実働数の多い諸外国の補助犬トイレの設置状況やトイレの環境を把握することを目的に調査をする。

なお、本章において、「補助犬トイレ」とは補助犬が利用することを目的に設置された犬用トイレのことと定義する。なお、国外空港施設では必ずしも補助犬に限定した使用を見込んでいない場合もある。それらは Pet Relief Area や Animal Relief Area と記載され、ペットの犬や猫、空港で働く使役犬やセラピードッグの使用も想定している。そのため、今回の調査では、補助犬の使用に

限定されたトイレだけではなく、補助犬が排泄場所として使用できる犬用トイレとして、どのような施設が設置されているか調査した。そのため、報告書内では「補助犬トイレ」ではなく、「犬用トイレ」と記載している。

表 1. アメリカの行政規則（49 CFR § 27.71）で求められている補助犬トイレ設置に関する要件

(1) 空港は、補助犬トイレの設計、寸法、使用材料、維持管理について、1 つ以上の補助犬訓練団体と協議しなければならない。
(2) 空港は、ターミナルごとに少なくとも 1 箇所の補助犬トイレを設置しなければならない。
(3)(2) で求められる補助犬トイレは、原則として各ターミナルの制限区域（保安検査後エリア）内に設置しなければならない。ただし、以下の場合を除く：
(i) 運輸保安庁（TSA）が、制限区域内への設置を禁止している場合、または
(ii) 補助犬訓練団体、空港、および当該補助犬トイレが設置されるターミナル内の航空会社が協議し、制限区域外に設置する方が適切であると合意した場合。この場合、空港は、制限区域外に設置すべきであるとの勧告を示す文書記録を保管しなければならない。
(4) 本項の施行日前にすでに補助犬トイレを設置している空港については、以下を適用する：
(i) 補助犬訓練団体と協議していない空港は、既存のすべての補助犬トイレの適切性について、1 つ以上の当該団体と協議しなければならない。
(ii) 空港は、2016 年 8 月 4 日までに本条の要件を満たさなければならない。

2.1.1.2 方法

空港のウェブサイト情報をもとに必要な情報を抽出し整理した。調査対象は、Kurasawa-Okamoto と Miura（2024）の先行研究で対象とした世界の主要空港 824 施設（ヨーロッパ 380 施設、北米 167 施設、アジア 97 施設、中南米 67 施設、アフリカ 59 施設、オセアニア 28 施設、中東 26 施設）のうち、情報を収集できた 323 施設の空港（ヨーロッパ 130 施設、北米 116 施設、アジア 36 施設、中南米 28 施設、オセアニア 10 施設、中東 2 施設、アフリカ 1 施設）の中で、さらに犬用トイレの設置が確認された 132 施設の空港とした。なお、Kurasawa-Okamoto と Miura（2024）の調査で補助犬トイレの設置が確認された空港は、ヨーロッパ 12 施設（調査対象の 9.2%）、北米 107 施設（92.2%）、アジア 6 施設（16.7%）、中南米 1 施設（3.6%）、オセアニア 4 施設（40.0%）、中東 1 施設（50.0%）、アフリカ 1 施設（100.0%）であった。

対象とした 132 箇所の空港の公式ホームページ、さらに犬用トイレを案内しているウェブサイトより、犬用トイレの設置場所（屋内外、保安検査場内外など）、トイレ内の設備（床面の種類、排水設備の有無、ゴミ箱の有無、水飲み場の有無）、写真の情報等を収集した。

さらに補助情報（現地調査）として、調査者もしくは調査者の関係者が調査期間中に利用した国外の空港について、実際に犬用トイレに足を運び設備の詳細をまとめた。

2.1.1.3 結果

(1) インターネット調査

Kurasawa-Okamoto と Miura（2024）の調査で犬用トイレの設置が確認された空港 132 施設を対象に犬用トイレの情報を集めた。空港によって公式ホームページ（以下、公式 HP）に記載されている情報量は異なっていた。公式 HP だけでなくインターネット検索でも犬用トイレの設置について情報を得られなかった空港は 9 施設あった。また、設置されていることは記載されているものの、設置場所や犬用トイレの数などの情報を得られなかった空港は 5 施設確認された。その他の空港（118 箇所）については、1 ～ 16 箇所の犬用トイレが設置されており、空港あたり平均 4.1 箇所の犬用トイレが設置されていた。犬用トイレの設置場所については、屋外が平均 1.7 箇所、屋内（保安検査場前）が平均 0.1 箇所、屋内（保安検査場内）が平均 2.3 箇所であった。

屋内に設置されている犬用トイレのうち、大半は個室形式であったが（写真 2）、カナダを中心に通路に犬用トイレが設置されている空港もあった（写真 3, 4）。保安検査場後の犬用トイレに関しては、基本的に屋内に設置されているが、稀にデッキ（屋外）に設置されている場合もあった（写真 5, 6）。

犬用トイレの床面（排泄場所）はほとんどが人工芝になっていた。一部、コンクリートのみの施設もあったが、ごく少数であった（写真 7, 8）。日本の空港のようにステンレスの台が設置されていたり（写真 9）、トイレシートの持参を求めている空港は、他国にはなかった（一部、工事中の空港を除く）。

排水設備のあるなしは HP 上で確認できない空港も多かったが、排水設備のある犬用トイレでは、使用者がホースで水を撒いて排水するタイプ（写真 2）、ボタンを押して排水するタイプ（写真 10）、定期的に自動排水されるタイプ（写真 11）があった。多くの犬用トイレは排泄物を回収するゴミ袋を設置しており（写真 4, 7, 8）、ゴミ箱を設置している空港も多かった（写真 2）。日本の空港のように排泄物を流すタイプ（写真 12）の案内は外国では見かけなかった。

犬用トイレのサイズの情報を記載している空港は限られていたが、大型犬が排泄時に体を回転させることが困難と思われる小規模なものから（写真 3, 10）、複数頭で同時に使用しても十分な広さのあるサイズ（写真 11）までバリエーションがあった。一方、犬用トイレのスペースに関しては、車椅子で入るには不十分な犬用トイレも見受けられた（写真 13-15）。また、床に猫用のトイレボックス

スや餌・水入れが置かれている空港もあり（写真 14, 15）、特に視覚障害者にとっては扱いづらい印象を受ける犬用トイレもあった。

屋外の犬用トイレに関しては、人工芝（写真 16, 17）、芝（写真 18, 19）、ウッドチップ（写真 20）、砂利（写真 21）など多様な素材であったが、人工芝が多かった。また、犬用トイレとして特別に設置しているわけではないが、屋外で排泄させられるスペースを案内する空港もあった。また、屋外の犬用トイレに関しては、フェンスで囲まれている場合もあれば、そうでない場所、さらには散歩道が整備されている場合もあった。フェンスで囲まれている場合は、ドッグパークという名前を付けている場合もあり、そのような空間では犬を放して運動させる目的の利用も認められた（写真 17）。

空港公式 HP 上の犬用トイレの案内については、マップ情報とともに設置場所を詳しく説明している場合もあれば、設置していることだけ記載している場合、必要であればスタッフに声をかけるようにと説明するだけの場合も見られた。ただし、マップ情報を踏まえて設置場所を詳しく説明している空港であっても、犬用トイレの具体的な設備までは説明していることは少ないため、自身の補助犬が使用できるサイズ、設備であるかどうかは、実際に行ってみないと分からないという状況が多いようである。また、犬用トイレが施錠されており、スタッフに開錠してもらう必要があることを案内しているのは、日本の空港の犬用トイレのみであった。



写真 2. シドニー国際空港（オーストラリア）



写真 3. カルガリー国際空港（カナダ）

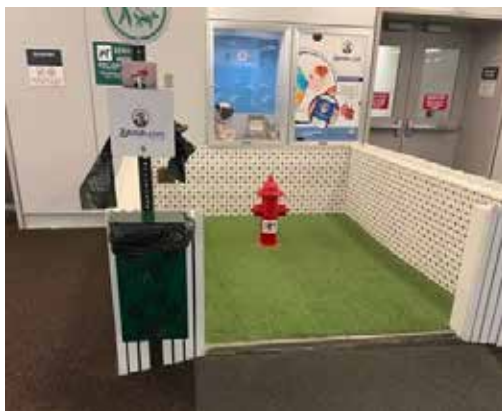


写真 4. バッファロー・ナイアガラ国際空港（アメリカ）



写真 5. ヘルシンキ・ヴァンター国際空港（フィンランド）



写真 6. デンバー国際空港（アメリカ）



写真 7. ルイ・アームストロング・ニューオーリンズ国際空港（アメリカ）



写真 8. ピッツバーグ国際空港（アメリカ）



写真 9. 東京国際空港（羽田空港）（日本）



写真 10. オーランド国際空港（アメリカ）



写真 11. ジャクソンビル国際空港（アメリカ）



写真 12. 成田空港（日本）

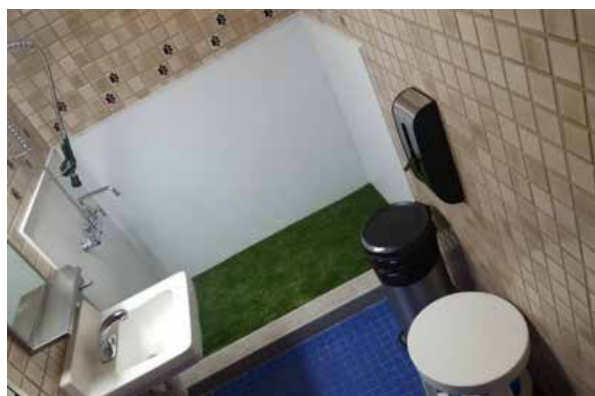


写真 13. マッカレン・ミラー国際空港（アメリカ）

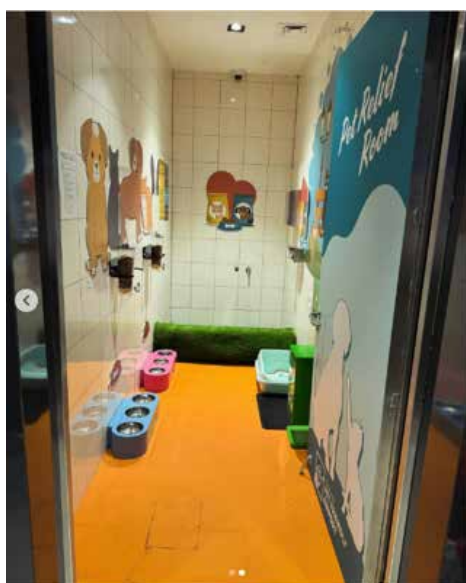


写真 14. ロンドン・ヒースロー空港（イギリス）



写真 15. イスタンブール・アタテュルク国際空港（イスタンブール）



写真 16. ミネアポリス・セントポール国際空港（アメリカ）



写真 17. ニューアーク国際空港（アメリカ）



写真 18. ダラス・フォートワース国際空港
大きな犬用トイレ（アメリカ）a



写真 19. ダニエル・K・イノウエ国際空港 / ホノルル空港
芝生（アメリカ）a



写真 20. ダラス・フォートワース国際空港
小さな犬用トイレ（アメリカ）b



写真 21. ダニエル・K・イノウエ国際空港 / ホノルル空港
砂利（アメリカ）b

写真 2 : <https://www.facebook.com/photo/?fbid=2844457235592925&set=pcb.2844457538926228>

写真 3 : https://petfriendlytravel.com/pft_airports/calgary-international-airport-yyc-pet-relief-areas/

写真 4 : <https://wyrk.com/buffalo-airport-pet-hydrant/>

写真 5 : <https://www.finavia.fi/en/airports/helsinki-airport/airport/services-facilities/pet-relief-area-1?navref=serviceSearch>

写真 6 : Pet-Friendly Travel: Convenient Relief Areas at DEN Airport

写真 7 : https://petfriendlytravel.com/pft_airports/louis-armstrong-new-orleans-international-airport-msy-pet-relief-areas/

写真 8 : <https://flypittsburgh.com/pittsburgh-international-airport/accessibility/#pet-relief>

写真 9 : https://tokyo-haneda.com/en/service/facilities/restrooms_for_assistance_dogs.html

写真 10 : https://petfriendlytravel.com/pft_airports/orlando-international-airport-mco-pet-relief-areas/

写真 11 : https://petfriendlytravel.com/pft_airports/jacksonville-international-airport-jax-pet-relief-areas/

写真 12 : https://www.narita-airport.jp/en/service/ud/assistance_dog/

写真 13 : https://petfriendlytravel.com/pft_airports/mcallen-international-airport-mfe-pet-relief-areas/

写真 14 : https://www.instagram.com/p/C3fv1NjR-FC/?img_index=2

写真 15 : <https://www.istairport.com/en/announcements/pet-relief-rooms-are-now-available?locale=en>

写真 16 : <https://www.mspairport.com/airport/accessibility/service-animal-information-0>

写真 17 : https://petfriendlytravel.com/pft_airports/newark-liberty-international-airport-ewr-pet-relief-areas/

写真 18a : <https://www.dogsonplanes.com/airports/dfw/pet-relief-areas/>

写真 19a : <https://airports.hawaii.gov/hnl/flights/traveling-with-pets/>

写真 20b : <https://www.dogsonplanes.com/airports/dfw/pet-relief-areas/>

写真 21b : <https://airports.hawaii.gov/hnl/flights/traveling-with-pets/>

(2) 現地調査

調査者もしくは調査者の関係者が現地で確認した空港は、バンクーバー国際空港（カナダ）、サスカトゥーン・ジョン・G・ディーフェンバカー国際空港（カナダ）、サンフランシスコ国際空港（アメリカ）、ダラス・フォートワース国際空港（アメリカ）、ナッシュビル国際空港（アメリカ）の 5 箇所である。

① バンクーバー国際空港

バンクーバー国際空港では、国内線コンコース A&B、および国内線コンコース C、国際線コンコース D に設置されている犬用トイレを調査した（写真 22 ～ 24）。国際線コンコース D の写真は載せていないが、写真 22,24 とほぼ同じサイズおよびレイアウトであった。いずれも保安検査場内のトイレである。トイレには人工芝が敷かれており、その上にミニチュアの消火栓が置かれていた。排泄スペースの周り(三方)はパネルで覆われていた。各犬用トイレには排泄物を回収する小さなゴミ袋と排泄物を捨てるゴミ箱が設置されていた(写真 25)。

犬用トイレの案内は、人用トイレと同様に表記されており、遠くからでも容易に犬用トイレにアクセスすることが可能であった（写真 26, 27）。また、図 1 のとおり、同じフロアに複数の犬用トイレが設置されており、徒歩 5 分ほどの間隔で犬用トイレが設置されている場所もあり、搭乗の直前や直後に利用できるアクセスの良い場所であった。犬用トイレの向かいや並びには、カフェや子ども用の遊戯スペースもあり、空港にあるその他の施設と同じように一般的な設備として設置されている印象を受けた。一方で、犬用トイレは植栽で簡単な目隠しがあるのみで、人の往来は犬からも視認できる環境であった。また、犬用トイレのそばに近づくると臭いがわずかに感じられた。

調査中に清掃スタッフに清掃状況について話を伺い、実際の清掃の様子を観察させてもらうことができた。バンクーバー国際空港での清掃は 1 日 2 回行われており、各回の清掃は人工芝の下に敷いてあるトイレシーツの交換、トイレスペースのふき取り、ゴミ箱内の排泄物の回収であった。夕方には人工芝が取り替えられ、毎日洗っているとのことであった。

調査中に犬用トイレを使用した犬は 2 頭おり、いずれも小型のペット犬であった。うち 1 頭は排泄を失敗(人工芝外で排泄)していた。排泄スペースの下は絨毯であり、排泄空間の臭いの原因の一つになっていることが伺われた。



写真 22. コンコース C の犬用トイレ



写真 23. コンコース C の犬用トイレ



写真 24. コンコース A & B の犬用トイレ



写真 25. コンコース C のごみ箱



写真 26. 犬用トイレの表示



写真 27. コンコース C の犬用トイレ概観の案内

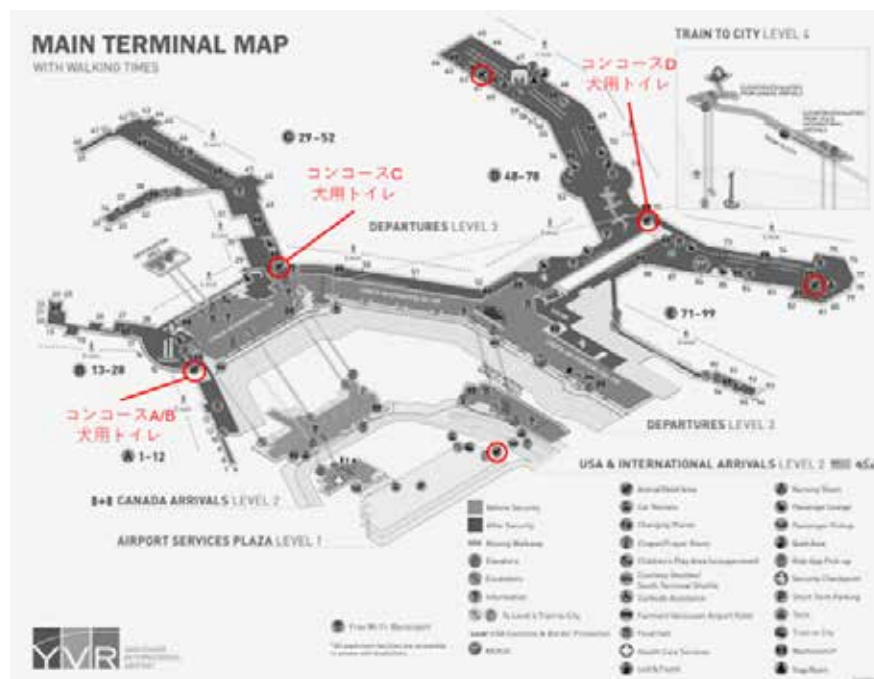


図 1. 調査したトイレの設置場所

<https://www.yvr.ca/-/media/yvr/images/terminal-maps/terminal-map-en-01-2025.pdf>

②サスカトゥーン・ジョン・G・ディーフェンバーク国際空港

サスカトゥーン・ジョン・G・ディーフェンバーク国際空港では保安検査場内と屋外の犬用トイレを1つずつ調査した。保安検査場内の犬用トイレ（写真28）は、人用トイレと同じ場所に設置されており、周辺にはカフェが並び、エスカレーターがすぐそばにある人通りの多い場所であった（写真29）。犬用トイレは人工芝で覆われており、水をかけて排泄物を流せるような排水設備が整っていた。犬用トイレの三方は金属パネルで覆われており、横にはゴミ袋とゴミ箱が設置されていた（写真30）。犬用トイレの案内は人用トイレやタクシー乗車場の案内と同じサイズで表示されており（写真31）、遠くからでも視認できるものであった。犬用トイレのすぐ隣は吹き抜けの解放空間であること、排水設備があること、排泄スペースの下はふき取り可能なフロアであるためか、臭いが気になることはなかった。屋外の犬用トイレ（写真32）は、バスの停留所のそばに設置されていた。人工芝で覆われており、中央には消火栓、ゴミ袋、ゴミ箱が設定されていた。なお、この場所はフェンスで覆われておらず、両脇は道路になっていた。屋外の犬用トイレも遠くからも分かりやすく案内されていた（写真33）。



写真 28. 保安検査場内トイレ概観 1



写真 29. 保安検査場内トイレ概観 2

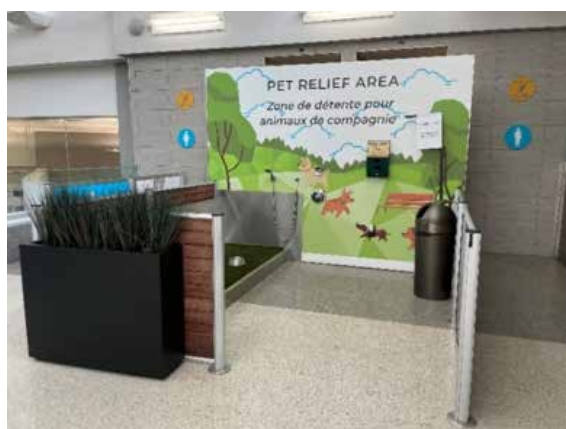


写真 30. 屋内トイレ



写真 31. 保安検査場内トイレ案内



写真 32. 屋外トイレ



写真 33. 屋外トイレ案内

③ サンフランシスコ国際空港

サンフランシスコ国際空港では、国際線ターミナル（保安検査場内）の犬用トイレを調査した。搭乗ゲートが並ぶコンコース通路に、ドアで仕切られた個室形式で設置されていた。近くを通れば犬用トイレがあることを認識できるよう案内はあるが（写真 34）、壁に掲示されているゲート全体のマップ上には犬用トイレの表記はなく、また、遠くから表示をたどって行くことができるような案内はなかった。そのため、あらかじめインターネット等で犬用トイレの場所について情報を収集してから利用する必要がある。

トイレ入り口とトイレ内には、トイレのレイアウトを記した案内板（点字付き）が設置されていた（写真 35）。犬用トイレは人工芝で覆われており、サイズは大型犬が上に乗って向きを変えるには不十分なスペースであった（写真 36）。芝生の下はメッシュパネルが敷かれ、その下はコンクリート状になっており、排水できるような作りになっていた（写真 37）。トイレ内にはゴミ袋、ゴミ箱、手洗い場が設置されていた。なお、犬用トイレの扉は重厚な作りになっているが、ドア横にある縦長の作ボタンにて自動で開閉される仕組みになっている（写真 34）。



写真 34. 犬用トイレ概観



写真 35. 犬用トイレ案内（点字）



写真 36. 犬用トイレ内



写真 37. トイレの下部

④ ダラス・フォートワース国際空港

ダラス・フォートワース国際空港では、国内線ターミナル A、B、D、E の保安検査場内の犬用トイレを調査した（写真 38 ～ 40）。ターミナル B の犬用トイレの写真は掲載していないが、ターミナル D とほぼ同じのサイズ、レイアウトであった。いずれの犬用トイレもドアで仕切られた個室形式のトイレであった。部屋の一角に人工芝が敷かれており、水を流せる排水設備が整っていた。排泄スペースの外はふき取りが可能なフロアとなっていた。部屋にはベンチ、手洗い場、ゴミ袋、ゴミ箱が設置されており、一番スペースが広がったターミナル C の犬用トイレには猫用トイレも床に置かれていた。犬用トイレの案内も人用トイレと同じサイズのもので設置されていた（写真 41）。また、犬用トイレから離れた場所にも案内があり、犬用トイレまでアクセスしやすい案内となっていた。



写真 38. ターミナル A の犬用トイレ



写真 39. ターミナル C の犬用トイレ



写真 40. ターミナル D の犬用トイレ



写真 41. ターミナル D の犬用トイレ案内

⑤ ナッシュビル国際空港

ナッシュビル国際空港では、国内線ターミナルのコンコース D（保安検査場内）の犬用トイレを調査した（写真 42）。コンコース D の犬用トイレも個室形式のトイレであり、個室の一部に人工芝が敷かれ、その上に模型の消火栓が設置されていた。ホースで散水できる排水設備が整っていた。また、水飲み場、手洗い場、ゴミ袋、ゴミ箱も設置されていた。調査した際は、清掃直後であり臭いは気にならなかった。犬用トイレの外には案内がなされており（写真 43、44）、搭乗ゲートのそばのためアクセスも容易であった。

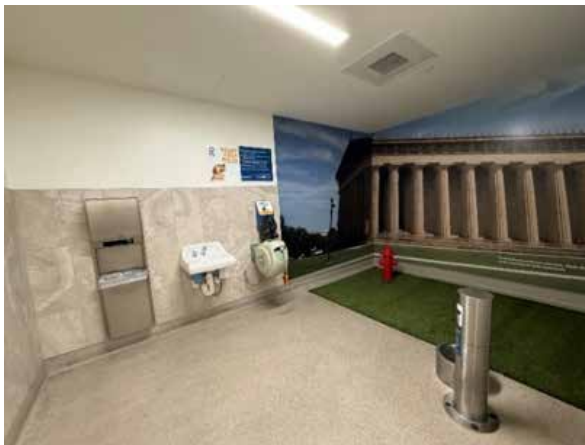


写真 42. コンコース D の犬用トイレ



写真 43. 犬用トイレの表示



写真 44. 犬用トイレの入リ口

2.1.1.4 考察

本調査より、犬用トイレを設置している空港には、複数（平均 4.2 箇所）の犬用トイレが設置されていることが明らかとなった。現地調査のできたアメリカとカナダの空港に関しては、犬用トイレがカフェの並ぶ人通りの多い場所に設置されており、アクセスが容易であった。一方、日本の空港に設置されている犬用トイレはあまり人が利用しない場所に設置されている傾向がある。調査 2 の空港の補助犬トイレに対する意見のうち、「使い勝手」で指摘されていた“施錠されており利用しづらい”といった意見は、日本の訓練事業者のみが指摘した内容であった。日本の空港の補助犬トイレは、利用頻度の低さに加えて、人気の少ない場所に設置されていることによる安全面への配慮から、通常は施錠されていると考えられる。そのため、日本の空港の補助犬トイレは、遠さと利用に手間がかかるという、二重の利用のしづらさを抱えていることが分かった。

国内外の空港の犬用トイレ内のスペースや設備は多様であり、理想的な犬用トイレは未だ確立されていないことが示唆された。また、公式 HP で得られる情報は法律で犬用トイレの設置が求められているアメリカであっても限定的であり、補助犬使用者にとって使いやすい犬用トイレという点では、情報提供、設備（使い勝手）の両面から改善の余地があることも同様に示唆された。最後に、インターネット調査では十分に確認することはできなかったが、犬用トイレの設備だけではなく、犬用トイレのドアなども含めてユニバーサルデザインが取り入れられているかも重要なポイントであろう。

※ 引用文献：Kurasawa-Okamoto, Y., Miura, Y. (2024). Acceptance of service dogs for people with disabilities at airports around the world. *Journal of Service Dog Research*, 18(1), 64-69. (<https://doi.org/10.3373/jssdr.18.64>)

2.1.2 国内外における補助犬専用トイレの設置状況調査 ―Google マイマップによる可視化の試み

2.1.1 の調査等をふまえ、判明した国内外の補助犬トイレ設置地点を Google マイマップに集約した。これにより、従来は散逸しており、把握しづらかった「補助犬専用トイレ」が一目で確認可能となった。また、国内施設においては、詳細の場所や設備の内容をインターネットまたは現地調査により確認し、合わせて掲載した。

マップへのアクセスは以下の通りとする。

＊ 閲覧環境：本マップの閲覧にはインターネット環境が必要となる。

＊ 掲載情報は 2026 年 3 月時点の調査に基づくものであり、最新の情報は各施設へ確認が必要となる。

※本報告書に掲載している「国内外補助犬トイレマップ」は、Google が提供する「Google マイマップ」サービスを利用して作成したものとなる。地図データの著作権は Google および各データ提供者に帰属する。

■ URL：

<https://www.google.com/maps/d/u/4/edit?mid=1-14zHRwMPIMnhbKQf0QNI-Kfh0Ql5eY&usp=sharing>

■ QR コード

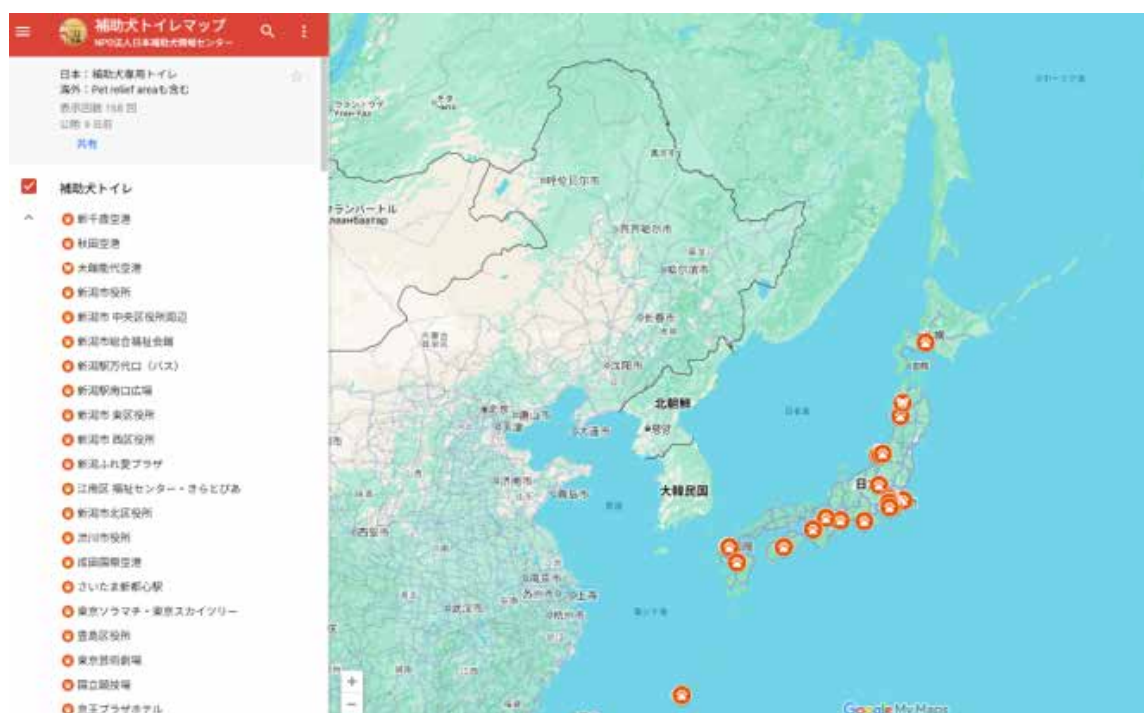


図 2：日本国内：ターミナル駅や空港を中心にマッピング

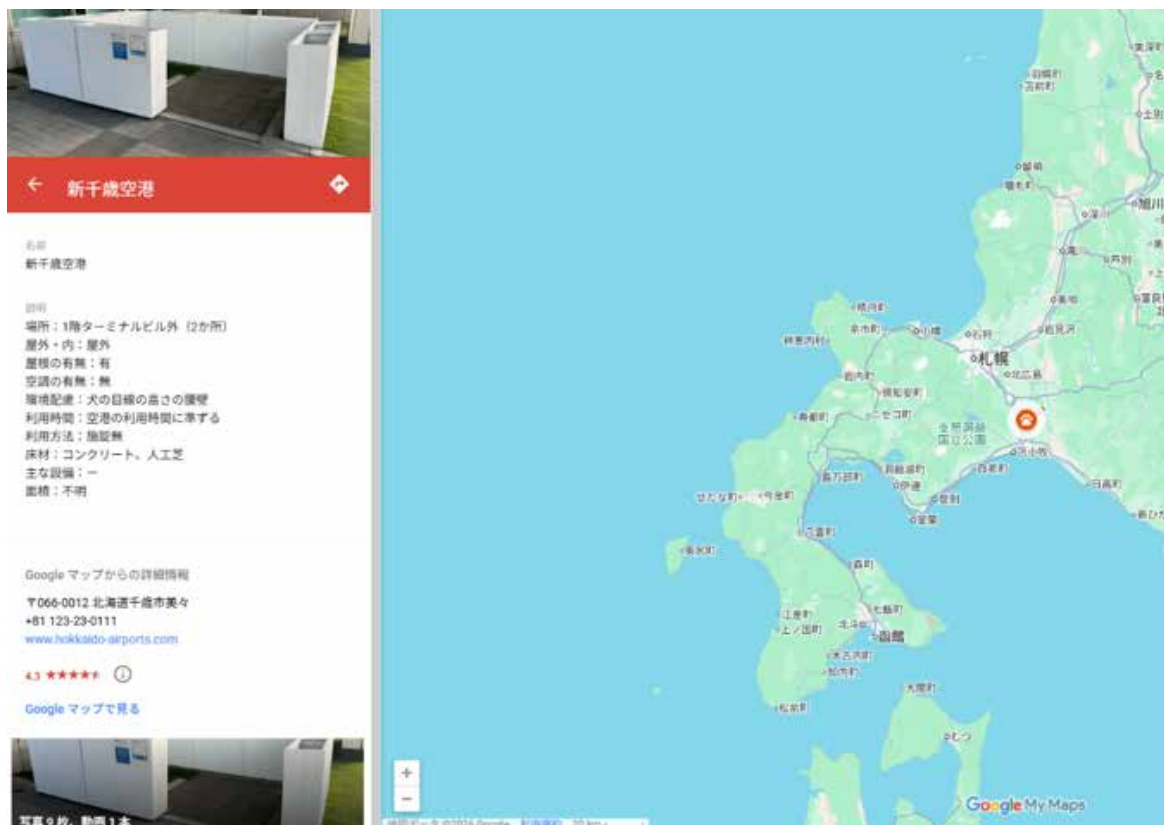


図 3：各施設について、詳細の場所や設備内容などをまとめた

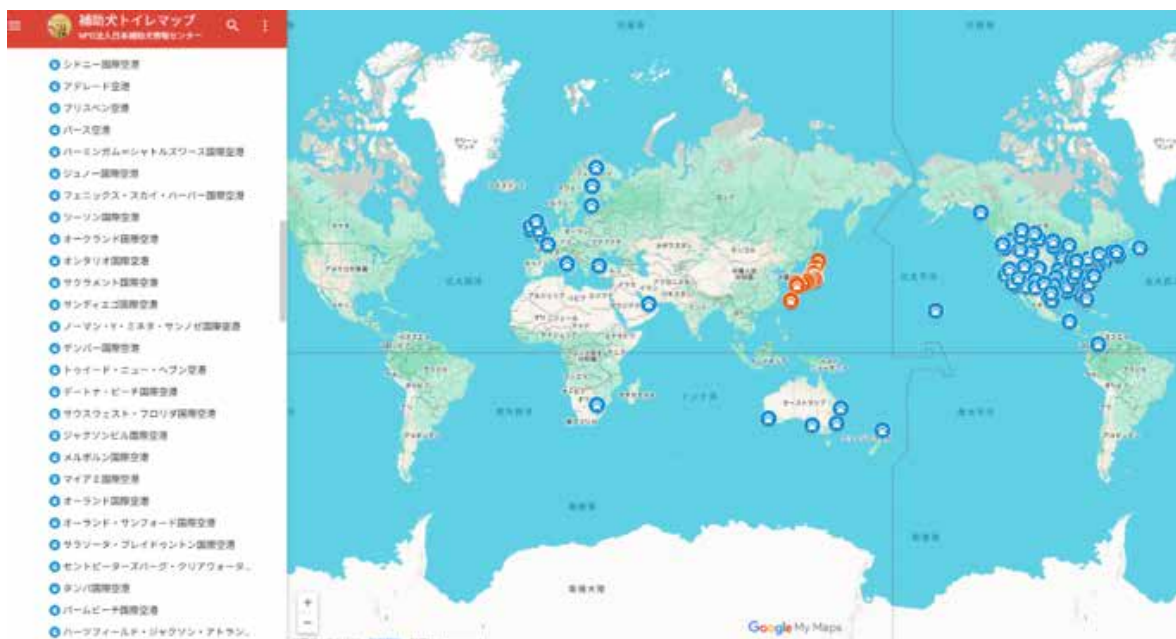


図 4：国外事例：米国や英国の空港を主としてマッピング

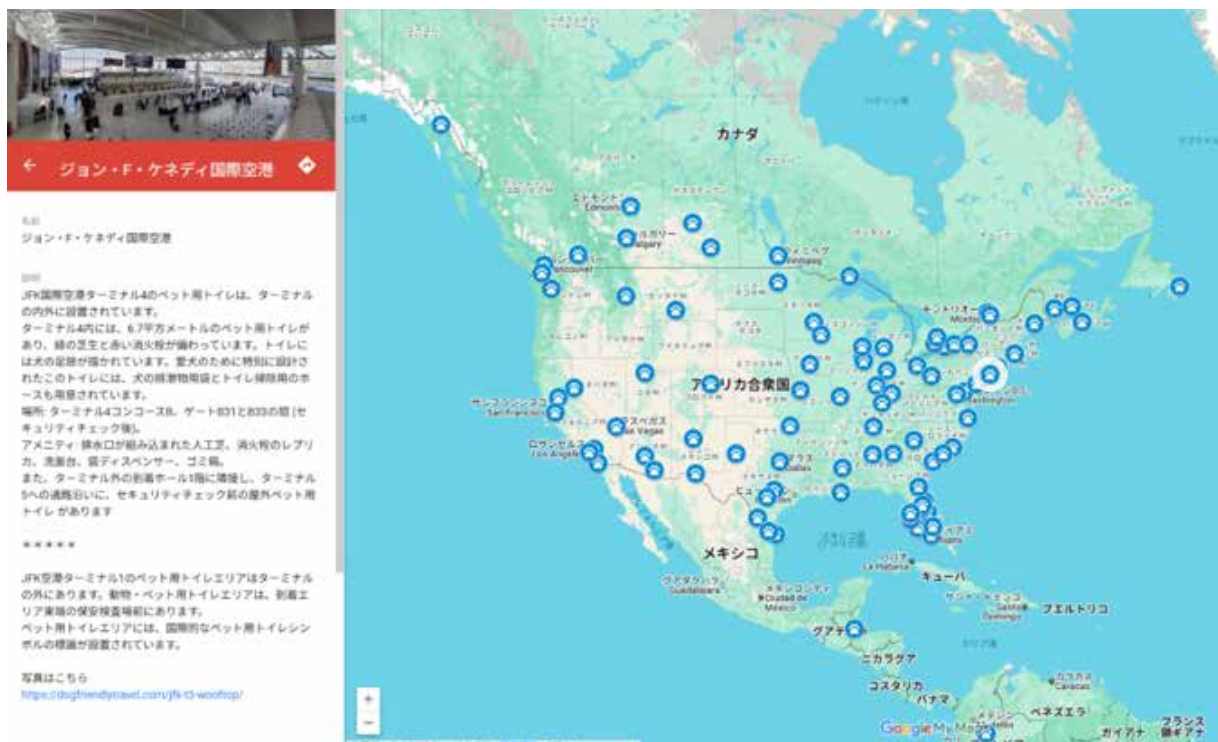


図5：国外の場合は、Pet Relief Area や Animal Relief Area

2.2 アンケート調査・インタビュー調査

2.2.1 国内外の補助犬訓練事業者へのアンケート調査

2.2.1.1 はじめに

空港やショッピングモールなど多様な人が利用する場所において、補助犬使用者が利用しやすく、かつ施設管理者が管理しやすい排泄環境の整備に資する基礎資料を得ることを目的とする。国内外の補助犬訓練事業者は、補助犬使用者の社会参加を想定して補助犬にどのような排泄訓練を行っているのか、また、既存の補助犬トイレに対してどのような意見を持っているか把握することを目的にアンケート調査を実施する。

2.2.1.2 調査方法

補助犬もしくはサービスドッグを育成する訓練事業者を対象にアンケート調査を実施した。国外の訓練事業者は、Assistance Dogs International (ADI)、もしくは、International Guide Dog Federation (IGDF) の認可団体とした。国内の訓練事業者は、過去3年度（2022～2024年度（令和4～6年度））内に認定を受けた補助犬を育成した団体とした。重複を省き、対象とした訓練事業者は254団体である。うち21団体は日本の訓練事業者である。

アンケートには団体で育成する補助犬（サービスドッグ）の種類、排泄訓練をする場所（環境）、空港等の補助犬用トイレで補助犬が排泄できるよう特別な訓練をしているか、空港の犬用トイレについてどのような意見を持っているか、国外の訓練事業者には地域を質問した。調査は2026（令和8年）年1月13日～2月28日に実施した。

2.2.1.3 調査結果

アンケートは65団体より回答を得た（回収率25.6%、国内の訓練事業者のみに限ると回収率66.7%）。訓練事業者の設置されている地域の内訳は図57の通りである。北米26団体、ヨーロッパ18団体、日本14団体、オセアニア3団体、アジア（日本以外）3団体、南米1団体であった。

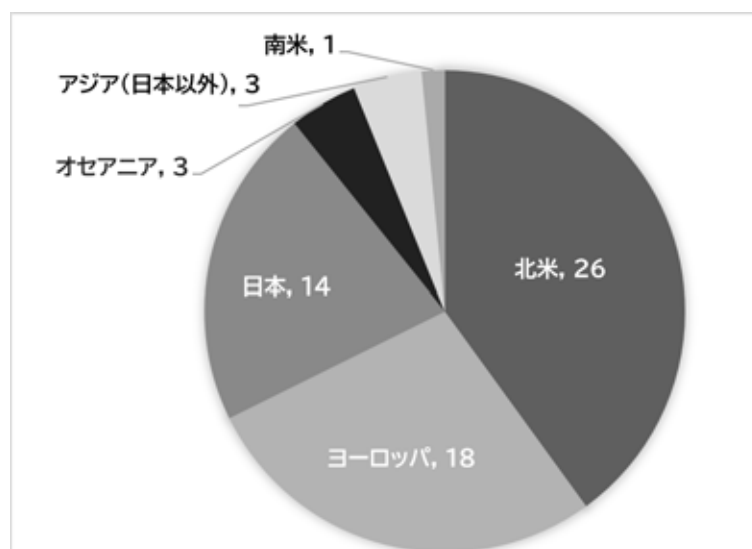


図6. 訓練事業者の設置されている地域（団体数）

図7は、訓練事業者が育成する補助犬／サービスドッグの種類である。複数種類の補助犬を育成する団体もあり、複数回答の結果である。回答した訓練事業者の58.5%（38団体）が肢体不自由者のための介助犬を育成しており、続いて52.3%（34団体）が盲導犬、35.4%（23団体）が聴導犬を育成していた。

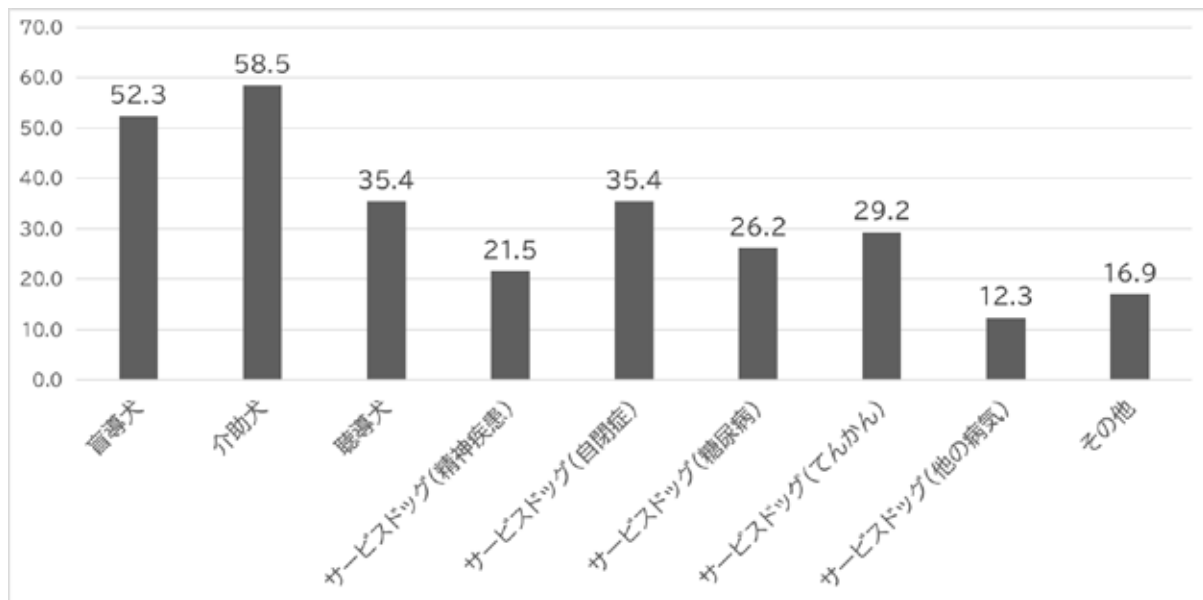


図 7. 育成する補助犬／サービスドッグの種類（%、複数回答可）

補助犬に排泄訓練をしている環境は、芝生が最も多く 89.2%（58 団体）、続いて土 64.6%（42 団体）、砂利 58.5%（38 団体）であった（図 59）。地域別で見ると北米の訓練事業者は様々な地面（芝生、コンクリート／アスファルト、土、砂利、ウッドチップ、人工芝）で排泄訓練をしているが、トイレシートやワンツールベルトの使用は限定的であった。一方、日本の訓練事業者はトイレシートやワンツールベルトを使用した排泄訓練が他の地域よりも特に多いことが示された。

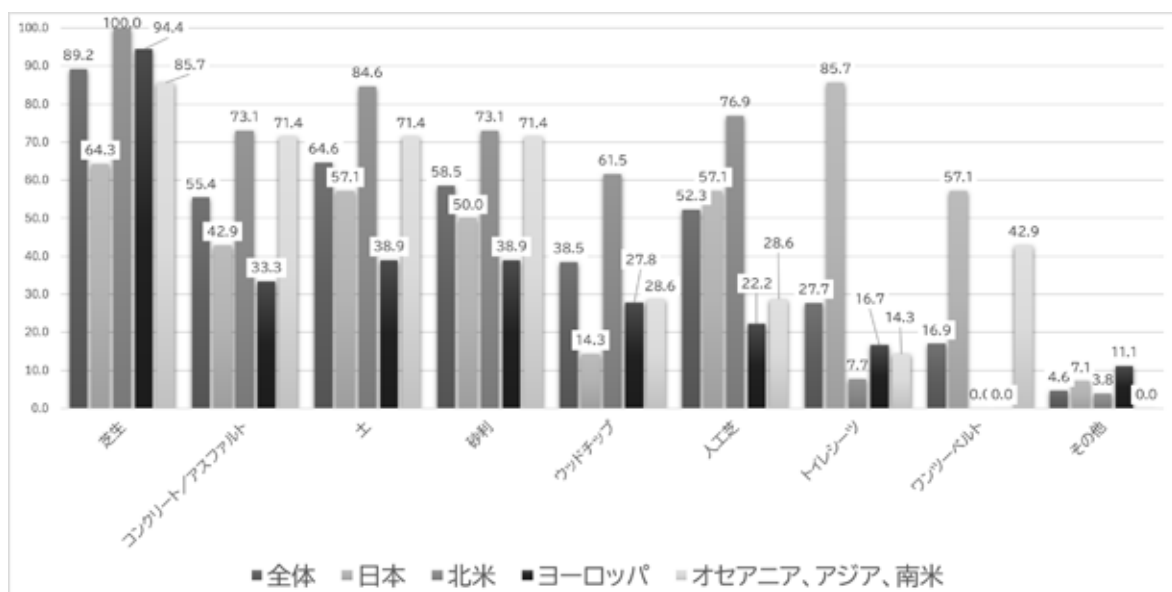


図 8. 排泄訓練をする環境（%、全体、地域別）

空港等の補助犬用トイレで排泄できるよう補助犬に特別な訓練をしているか調べたところ、日本と北米は約半数の訓練事業者が「はい」と答えた。一方、ヨーロッパやその他の地域（オセアニア、アジア、南米）の訓練事業者は「はい」と答えたのは 3 割に満たなかった（図 9）。

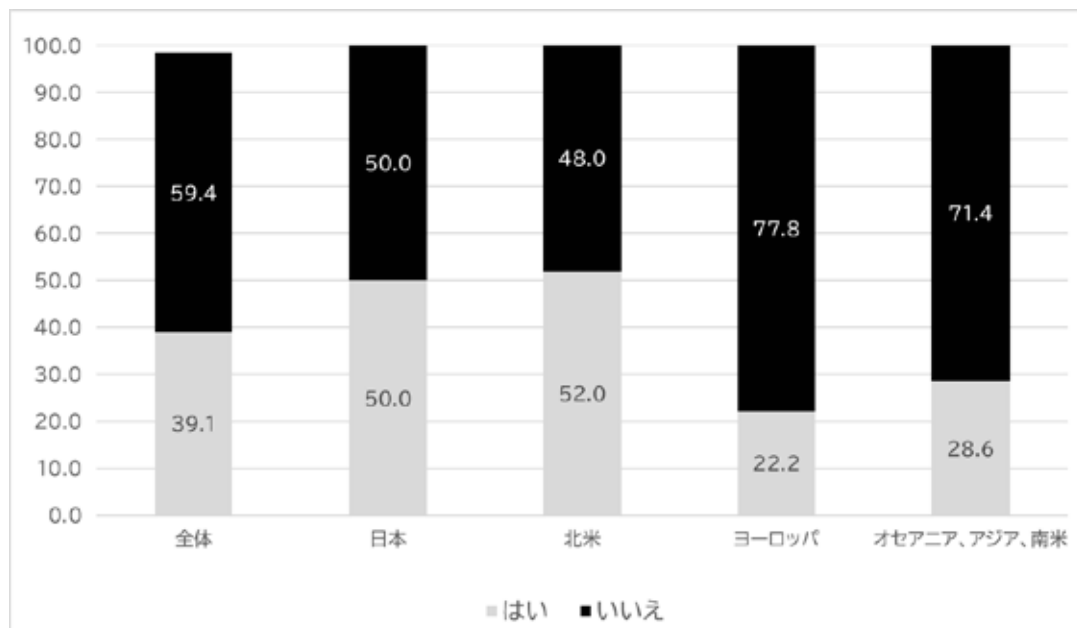


図 9. 補助犬トイレでの訓練を実施しているか（％、全体、地域別）

空港の犬用トイレに対する意見を自由記述で尋ねたところ、62 団体より複数の意見が得られた。多く指摘された項目順に回答の要約を表 2 に記す。最も多く示された意見は、トイレ環境の衛生面（汚い、臭い、清掃が不十分、換気設備が不適切など）についてであり、特に空港での犬用トイレの設置が広く普及している北米でそのような意見が目立った。また、排泄スペースの狭さへの指摘もあった。そのような犬用トイレの問題から犬が犬用トイレで排泄したがるらないという意見も見られた。次に多くみられたのは補助犬トイレに肯定的な意見であった。特に北米ほど補助犬トイレの設置が進んでいないヨーロッパやアジア（日本以外）を中心に、補助犬トイレが有用、良いアイデアであり、より多くの空港で設置されるべきであると考えられていた。設置場所に関する意見では、そもそも犬用トイレを設置している空港がない（少ない）といった意見の他に、アクセスのしやすさとして保安検査場内、すべてのコンコースへの設置、近さを求める声がある一方で、屋内で排泄しない犬のためにアクセスしやすい屋外の排泄スペースの設置を望む声もあった。

日本の訓練事業者を中心に、補助犬トイレは不要であるという意見が散見された。特に日本の訓練事業者は欧米の訓練事業者と比べて、より高い割合で補助犬にトイレシートやワンツールベルトでの排泄訓練をしていることから、多目的トイレでの排泄が可能である。そのため、補助犬トイレの設置を不要と考える意見が多く見られた。また、補助犬トイレの設置を進める代わりに、広く普及している多目的トイレを補助犬使用者が使い易くする普及啓発を望む声が見られた。具体的には、多目的トイレに補助犬マークを付ける事により、補助犬を多目的トイレを私用することを知ってもらう等である。また、既存の補助犬トイレに関しては、施錠されている、障害によっては操作が困難であるなど、使い勝手の問題が指摘された。これに関連して、補助犬トイレの案内が適切になされていることの必要性を示す声もあった。

2.2.1.4 考察

今回は、国内外の補助犬／サービスドッグ訓練事業者は、補助犬使用者の社会参加を想定して補助犬にどのような排泄訓練を行っているのか、また、既存の補助犬トイレに対してどのような意見を持っているかを調査した。排泄訓練について、日本と他国で大きな違いがあった。日本ではトイレシートやワンツールベルトを使用した排泄訓練を行っている訓練事業者が多かったことから、多目的トイレを使用すると答えた訓練事業者も多かった。日本では小型犬の飼育率の高さ、共同住宅や庭のない戸建てなど、屋内での排泄が基本の飼育形態や、屋外の排泄場所にアクセスしづらい環境など、欧米とは異なる犬の排泄事情が存在する。そのため補助犬に限らずペット犬の飼育においても屋内で犬に排泄させるケースが欧米よりも一般的であると考えられる。そのような文化・環境的差異から日本の補助犬は屋内で完結できる排泄訓練がより多く取り入れられており、結果として補助犬トイレの設置を不要と考える意見が多く見られたと考えられる。そのため、日本の訓練事業者からは、補助犬トイレの設置は必ずしも必要ではなく、多目的トイレを補助犬使用者が使うことを周知すること、使いやすくすることに注力することを求める意見があがった。また、日本の訓練事業者からは、設置されていたとしても施錠されている、障害のある人にとっては使い勝手の悪いシステム（タッチパネルの操作や電話での連絡）であるなど、有効に活用されていない一面も見られた。

補助犬やサービスドッグの実働数が多く、主要空港での補助犬トイレの設置が普及している北米の訓練事業者からは、補助犬トイレの衛生面の問題を指摘する声が多く見られた。特に北米では補助犬やサービスドッグの多さに加えて、ペットでも小型犬であれば機内に搭乗することもできることから、必然的に犬用トイレの利用頻度が高まる。このために、清掃頻度が不十分となり、衛生上の問題が生じていると考えられる。

ヨーロッパやその他の国（オセアニア、アジア、南米）では、北米や日本ほど補助犬トイレが一般的ではないことから、補助犬トイレを設置する声が複数見られた。このようにそれぞれの国における補助犬やサービスドッグの実働数、補助犬の排泄訓練の違い、補助犬トイレの普及の度合いなどから、補助犬トイレに対する意見は異なっており、地域差が認められた。特筆すべき点として、補助犬トイレが多くの空港に設置されている北米であってもスペースや設備に対する指摘が複数あがっていたことから、補助犬使用者の利便性に叶った補助犬トイレの理想形は十分に見出されていないことが示唆された。

2.1.1 と合わせて、補助犬トイレに対する課題は、各国の補助犬（サービスドッグ）の実働数、補助犬の排泄訓練の違い、補助犬トイレの普及の度合いなどにより異なっていた。補助犬使用者の利便性に叶えた補助犬トイレの理想形は未だに見出されていないことが示唆された。

表2 空港の補助犬トイレに対する意見

		空港数
トイレの環境	・不衛生である(汚い、臭いがきつい、十分な清掃が行われていない、適切な換気設備がない)(北米12、オセアニア、南米) ・排泄スペースが狭い(北米6) ・衛生面、狭さ、設備の問題から、犬が排泄したがない(北米10、日本、ヨーロッパ、オセアニア) ・より自然に近い設備が良い(低木、植物など)(北米、ヨーロッパ) ・視覚障害者が利用する場合、出入り口・水栓・ホース・排水場所などの場所が統一規格でないと単独で利用するには不自由である(日本) ・床が排尿便で汚れた際、処理しやすい材質や設備(排水できるなど)があると良い(日本)	37
肯定論	・有用、良いアイデアである(ヨーロッパ10、北米7、アジア2、日本、オセアニア) ・そのような施設は必要である、もっとあった方が良い(ヨーロッパ3、北米、オセアニア、アジア) ・補助犬使用者も安心してトイレの場所確保ができ移動もスムーズになる。特に空港という出発時刻が正確に決められているような状況では、排泄場所を探す手間がないことは時間だけでなく、心にもゆとりを持つことができる(日本) ・他国からの補助犬同伴での入国者にとっても大変良い印象を受け、障害者への配慮として適切な方法であると考えている(日本) ・インクルーシブな施設だと思う(オセアニア)	30
設置場所	・設置されている空港が少ない、設置されてない(ヨーロッパ3、アジア) ・保安検査場内にあることが好ましい(北米、日本、ヨーロッパ) ・補助犬トイレで排泄しない犬、土や芝が必要な犬のために、簡単にアクセスしやすい屋外の排泄スペースの方が望ましい(北米、日本) ・保安検査場内に屋外の排泄スペースがあるのが好ましい(北米) ・一部の補助犬トイレは、保安検査場の外に設置されており不便である(北米) ・混雑した場所に設置されていて不便である(北米) ・大きな空港でもすべてのコンコースにトイレが設置されているわけではないので不便である(北米) ・アクセスしにくく、遠い場所に設置されていることが多い(ヨーロッパ)	14
バリアフリートイレの使用	・ペットシート(ワンツーベルト)で排泄訓練しており、多目的トイレを使うことが多い(日本4) ・空港に限らず全ての多目的トイレに、補助犬OKのステッカーが貼ってあると有難い(日本) ・補助犬トイレ設置により補助犬への理解が高まる効果があれば嬉しいが、補助犬トイレ以外の環境(多目的トイレなど)を使うことに制限が生まれるようなことがないか危惧する(日本2)	7
不要論	・補助犬トイレを使用するより多目的トイレで排泄させるため、補助犬トイレの実用性は乏しい(日本2) ・補助犬トイレが十分普及していない現状で、補助犬トイレでしか排泄できない場合、使用者が担う排泄管理の負担がかえって大きくなる。また、使用者の行動範囲が狭まる(日本) ・既に普及している多目的トイレを補助犬も利用していることを認知してもらう広報の方が有用である(日本) ・補助犬トイレを設置する予算とスペースがあるなら、多目的トイレを設置した方が補助犬使用者だけでなくより多くの人に活用される(日本) ・利用頻度を考えると無駄だと思う(日本)	6
使い勝手	・施設されており利用しづらい(日本4) ・補助犬トイレの入り口にタッチパネルの操作が必要な場合がある。視覚障害者には操作困難である(日本) ・電話で係員を呼び形式の場合、聴導犬使用者は利用できない(日本)	6
トイレに関する情報アクセス	・補助犬トイレがあることの情報へのアクセスが容易であることは重要(日本) ・案内表示が不十分である(ヨーロッパ)	2
その他	・普段使用している空港の屋外トイレはサイズも設備も適切である(北米2) ・施設によっては良いところもある(北米) ・解決策にはならない。空港によって状況が異なる(ヨーロッパ) ・(補助犬トイレについて)考えたことがなく、特に使用者から問題として指摘されたことはない(北米) ・このようなエリアはリードをつけたまま排泄させる場所であり、犬を自由に走らせる場所であるべきではない(ヨーロッパ) ・最も重要なのは、空港滞在時間とフライト時間である。犬の健康と福祉が保たれ、適切に排泄できる機会が確保されるよう、使用者にこれらの点を十分考慮するよう求めている(ヨーロッパ) ・(補助犬トイレを設置することが)単なる「配慮していますアピール」のように感じる(日本) ・排泄させるタイミング自体を外出に合わせてコントロールしている(場所、餌や水の量)(日本) ・日本では補助犬のトイレを非常に気にするが、見えない人と動物である犬が行うことなので、時には失敗もあるよね、というくらいのおおらかさで接してもらいたい(日本) ・訓練しなければ専用トイレでの排泄は難しいだろう(アジア)	11

2.2.2 補助犬ユーザーに対する補助犬の排泄方法に関するインタビュー調査

補助犬と共に生活をしている補助犬ユーザーに対して、補助犬の排泄環境について、その実態やニーズについてインタビュー調査を実施した。

2.2.2.1 はじめに

2026年3月1日～21日に実施した「補助犬ユーザーに対する補助犬の排泄方法に関するインタビュー調査」の結果概要をまとめた。事業で実施したインタビュー調査結果について、ユーザーおよび補助犬の基本情報、排泄訓練の内容、外出先の排泄場所、補助犬専用トイレについて補助犬の種類ごとに結果を示す。また、補助犬ユーザーの補助犬の排泄に対する考え方や周囲への配慮、補助犬の種類による特性について考察を加え報告する。

2.2.2.2 目的

本事業がめざす、「補助犬ユーザーと補助犬が安心して利用でき、施設管理者が管理しやすい環境整備」には、補助犬ユーザーが外出時に行っている補助犬の排泄方法の現状と課題についての情報が不可欠である。そこでこの調査では、補助犬ユーザーが現在行っている補助犬の排泄方法（場所、方法）、その際の困りごと、そして補助犬専用トイレの利用状況と困りごとについて把握し、補助犬ユーザーと補助犬、一般市民やペットとの共生社会の構築のために、補助犬の排泄環境をどのように整えることが必要か、また補助犬の排泄に関してどのように啓発することが必要かを明らかにすることを目的に実施した。

※東洋大学大学院ライフデザイン学研究科研究等倫理委員会の承認を受けて実施した。（承認番号：2025-A20S）

※本調査は、協力団体または特定非営利活動法人日本補助犬情報センターがもつ補助犬ユーザーの情報をもとに依頼し、同意を得たものを対象者として選定し実施した。そのため、調査結果は国内の状況を一般化するものではない。

2.2.2.3 調査方法・対象等

①調査方法：オンライン（Zoom）でのインタビュー調査（参考資料3 インタビューガイドを用いた半構造化面接）、対象者1名に対し研究者1～2名で実施。

- ・質問項目：(1) 対象者と補助犬の基本情報：対象者氏名、年齢、障害名（障害者手帳等級）、ユーザー歴（年数）、これまで使用した補助犬の頭数、（補助犬以外の）ユーザーの移動手段（ガイドヘルパー、杖歩行、車椅子（手動・電動）他）、補助犬の種類、名前、性別、年齢、使用年数
- (2) 補助犬の排泄方法に関する情報：訓練事業者における補助犬の排泄に関する訓練指導内容、現在の補助犬の排泄管理（排泄の間隔、方法（自宅・外出先）、使用する道具、工夫、（補助犬との）外出頻度、外出先、外出時の補助犬の排泄（場所、ユーザーご自身の排泄との兼ね合い、困りごと、希望）、補助犬専用トイレについて（使用状況、困りごと、希望、理想の補助犬トイレ）、補助犬の排泄に関して社会に求める理解

②調査地域：指定なし

③調査対象：調査時点で補助犬を使用している補助犬ユーザー、研究同意説明書を用いて本研究の説明を行い、同意が得られた者を対象とする。協力団体：日本介助犬使用者の会、全日本盲導犬使用者の会、日本聴導犬パートナーの会、日本介助犬協会、日本盲導犬協会、兵庫介助犬協会、Dog for Life Japan

④調査時間：30～60分程度

⑤調査期間：2026年3月1日（日）～3月21日（土）21日間

2.2.2.4 調査結果の要約

（1）対象者と補助犬の基本情報

①盲導犬ユーザー

表3 盲導犬ユーザーおよび盲導犬基本情報

	年齢	性別	犬年齢	犬性別	これまでに使用した補助犬の頭数
1	60代	男性	7歳	メス	1
2	60代	女性	3歳	メス	3
3	70代	女性	9歳	メス	1
4	60代	女性	9歳	オス	1
5	80代	女性	9歳	メス	3
6	60代	女性	2歳	メス	2
7	60代	男性	8歳	オス	3

②聴導犬ユーザー

表 4 聴導犬ユーザーおよび聴導犬基本情報

	年齢	性別	犬年齢	犬性別	これまでに使用した補助犬の頭数
1	30代	男性	11	メス	2
2	50代	女性	10	オス	3
3	50代	女性	11	メス	2
4	40代	男性	7	メス	2

③介助犬ユーザー

(車いす使用者 12 名、うち 2 名屋内伝い歩可能・1 名近距離歩行器使用可能)

(下肢機能障害 1 名、上・下肢機能障害 11 名)

表 5 介助犬ユーザーおよび介助犬基本情報

	年齢	性別	犬年齢	犬性別	これまでに使用した補助犬の頭数
1	20代	女性	4	オス	1
2	40代	女性	6	メス	1
3	50代	女性	7	オス	2
4	50代	男性	8	メス	2
5	60代	男性	7	メス	1
6	40代	男性	10	オス	1
7	20代	女性	3	オス	1
8	50代	女性	3	オス	1
9	50代	女性	9	メス	2
10	50代	女性	7	オス	2
11	40代	女性	10	オス	2
12	40代	男性	4	メス	3

(2) 補助犬の種類別回答結果の概要

ここでは、補助犬の排泄方法に関する情報として、a. 訓練事業者における補助犬の排泄に関する訓練指導内容（訓練内容、訓練からの変化）、b. 現在の補助犬の排泄管理の方法（自宅・外出先、使用する道具、工夫）、c. (補助犬との) 外出頻度、外出先、d. 外出時の補助犬の排泄（場所、ユーザーご自身の排泄との兼ね合い、困りごと、希望）、e. 補助犬専用トイレについて（使用状況、困りごと、希望、理想の補助犬トイレ）、f. 補助犬の排泄に関して社会に求める理解についてまとめて報告する。

①盲導犬ユーザー

a. 訓練事業者における補助犬の排泄に関する訓練指導内容（訓練内容、訓練からの変化）

- ・訓練内容：排泄訓練の時期は最も早いユーザーは体験合宿時であり、共同訓練初日、翌日、盲導犬とのマッチング直後といずれも訓練の早期に実施されていた。体験合宿で排泄の練習をすることで盲導犬との生活を決めたと回答したユーザーもいた。自宅や外出先での訓練に言及したユーザーはいなかった。訓練内容は、実技を主として、訓練の宿泊施設の排泄場所（ベランダ、人工芝）で、全員ワンツールベルトの装着方法、「ワンツール」の声掛けを練習していた。リードをつけて行う方法、リード無しで行う方法があった。1 名は室内でペットシートを敷いて排泄させる方法も習っていた。また、犬の体を触ってワンツールの違いを認識するような指導を受けたユーザーが 1 名いた。犬の飼育経験がないユーザーでは、ぬいぐるみを用い「犬の身体構造」を理解することから訓練をスタートしていた（1 名）。1 名は、犬の生活サイクルを教えると同時に排泄の方法を練習したと述べ、実技以外の犬の排泄に関する知識の習得も行われていた。
- ・訓練からの変化：訓練内容と現在の排泄方法に変化はなく、そのまま継続しているユーザーが 4 名、変化したユーザーが 3 名であった。変化の内容としてリード無しでの排泄訓練を受けたが外出先では管理上リードが必要であり、リードありに変更した方 1 名、逆にリードありで訓練を受けたが自宅ではリード無しに変更した方が 1 名であった。3 名のうち 2 名は現在も犬の様子に合わせて試行錯誤を続けている（ご褒美を取り入れるなど）と述べた。1 名のユーザーからは「訓練事業者では屋内でも排泄できるように訓練しているはずなのに、自宅と一緒に生活を始めるとできなくなる」、「雨の日などに外に出るのは大変なので家のふろ場などでやってもらいたい、外出先でもバリアフリートイレでできると良いと思うが難しい」、「継続して屋内で排泄させるにはユーザーの努力も必要だと思うが、他のユーザーから 1 時間もおかかったなどと聞くと、自分にはそれはできないと感じる」と訓練時からの変化に困っている様子が語られた。

b. 現在の補助犬の排泄管理の方法（自宅・外出先、使用する道具、工夫）

使用道具は全員ワンツールベルトであり、犬の個性に合わせて失敗がないように工夫をしていた。自宅と外出先で排泄時のリードの有

無について、方法を変えているユーザーが2名いた。

c. (補助犬との) 外出頻度、外出先

ほぼ毎日盲導犬と外出していた(散歩、通院、買い物、友人との外出、ボランティアなど)、公共交通機関も利用。

d. 外出時の補助犬の排泄(場所、ユーザーご自身の排泄との兼ね合い、困りごと、希望)(表6)

バリアフリートイレ2名、屋外(草むら、土、芝生、道路、公園など)3名、併用2名。バリアフリートイレを使用している場合は、盲導犬とユーザー自身の排泄を同時に行っていた。バリアフリートイレが混んでいる場合は広めの普通のトイレで行うことがあると1名が回答した。バリアフリートイレ使用者は、トイレの場所の把握の困難さ・距離の遠さ・多様な方の使用による混雑・広さ・汚れていること・補助犬の利用への批判などを困りごととして挙げていた。また、補助犬の排泄で時間がかかる場合気兼ねがあるとも述べていた。屋外を使用する方の困りごとは、都会では草むらなどの適当な場所見つけにくいことであった。また、バリアフリートイレ内の設備の配置などが場所によって異なるので統一してほしい、盲導犬ユーザーは盲導犬と自身の排泄を行うためにバリアフリートイレの利用が必要であることを理解してほしいという希望があった。

e. 補助犬専用トイレについて(使用状況、困りごと、希望、理想の補助犬トイレ)(表7)

補助犬専用トイレを使用したことがある6名(空港、劇場、競技場他)、使用したことがない1名。

- ・補助犬トイレの場所が遠い
- ・使用のための手続きに時間がかかる
- ・広さが不十分・自身の排泄と同時にできず効率が悪い
- ・犬の好みの床材ではない(ステンレス、グレーチング等)
- ・屋根がなくて雨に濡れるなどの困りごとが挙げられた。改善点の希望では、便利な場所(人のトイレの近く)に作ってほしい
- ・植え込み・草むら程度でも決められたスペースがあればよい
- ・水が流せる
- ・誰でもが補助犬トイレとわかる掲示等について述べられた。屋根の有無については意見が分かれた。
理想としてはユーザーも補助犬も一か所のトイレ内で排泄を済ませることができる
- ・広いスペース
- ・人工芝などの犬が好むものの設置
- ・ゴミ箱
- ・荷物が置ける棚等(犬のための荷物が多いため)
- ・補助犬が使用するという明示
- ・3種の補助犬ユーザーが使いやすいようにすることという意見が出た。

f. 補助犬の排泄に関して社会に求める理解

盲導犬はユーザーが排泄を管理していること、盲導犬ユーザーもバリアフリートイレを使用することを理解してほしいと述べる声が多く、屋外で行う場合も袋をつけているので、植え込みなどですることを許容してほしいという希望も聞かれた。バリアフリートイレの競合についてはお互い様の気持ちで理解しあえたらよいと述べられたが、他の排泄場所があれば、盲導犬使用者はバリアフリートイレにこだわる必要はないのではという意見もあった。補助犬専用トイレに関しては、補助犬専用トイレがあることでバリアフリートイレが使いにくくならないようにしてほしい、補助犬専用トイレを作る時に人数が多い盲導犬ユーザーだけでなく介助犬ユーザーのことを考慮する必要があること、理解してほしいと社会に求めている。同じ盲導犬ユーザーに対してはマナーを守っている姿勢を見せてほしいとの意見も聞かれた。また、ペットの犬にも排泄のマナーを守ってほしいことが上がった。一方、盲導犬の排泄管理に関して、海外の犬に関する考え方や動物愛護の点に触れ、盲導犬だけが特別な排泄方法をとるのはどうかと疑問を呈する意見もあった。

表 6 盲導犬ユーザー 外出時の盲導犬の排泄場所（専用トイレ以外）、困りごと、希望

* 一部意味を変えず修正

	外出時の排泄場所 (専用トイレ以外)	外出時の排泄場所 (専用トイレ以外)の困りごと	外出時の排泄場所 (専用トイレ以外)の改善希望
1	屋内:バリアフリートイレ 屋外:人目を避けた草むらや植え込み、または駐車場など その他:効率的なルーティン化 自分自身のトイレも同じタイミングで済ませる	・都会ではバリアフリートイレなかなか空かない ・乳幼児連れ、高齢者、障害者などニーズが非常に高いが、利用者同士の理解や優先順位を巡るコミュニケーションに苦慮する ・都心部は屋外の場所の確保が難しい ・バリアフリートイレが目的地から遠く離れている、場所自体が不明なことが多い 都心へ外出する時は綿密な計画が必要	・ドアの開閉方法や洗浄ボタン、非常用ボタンの形状や配置をできるだけ統一し、わかりやすくしてほしい
2	屋内:バリアフリートイレ 犬が好まず、時間がかかる 屋外:草むら その他:事前の「トイレ計画」と粘り強く取り組む 効率的なルーティン 自身のトイレと盲導犬の排泄タイミングを合わせバリアフリートイレで済ませる	・バリアフリートイレ使用時、時間がかかるので気兼ね ・コンクリートでは難しい	・トイレの目的以外の利用(着替えなど)を控えてほしい。
3	屋内:バリアフリートイレ 屋外:ほとんどない(外でもできる) その他:事前にバリアフリートイレを調べる	・一般のトイレ個室に盲導犬と入るのはスペース的に難しい ・洗浄ボタンや非常ボタンなどが分かりづらく間違える ・バリアフリートイレに荷物を置ける場所がないため、現在は悪いなと思いつながら、きれいに使うように心がけてベビーバットを使っている	・バリアフリートイレを使うのは、自分のトイレと一緒に済ませるためなので理解してほしい。 ・犬の荷物が多くなるので、荷物を置けるようなスペースがあるとありがたい
4	屋外:建物周辺の草むら	・バリアフリートイレは屋外の要素(草、土など)がなく排泄をしたがらない	・バリアフリートイレに植木鉢、プランターを置いてほしい(装飾を兼ねる)
5	屋内:バリアフリートイレ バリアフリートイレが混んでる時は広めの一般トイレを使用 どこでも袋をつけたらしてくれる その他:自身の排泄も同時に済ませる 排泄物をゴミ箱に捨てる	特になし	特になし
6	屋内:バリアフリートイレ(旅行中など) 屋外:土、芝生、砂利など	・バリアフリートイレが汚い ・バリアフリートイレで補助犬の排泄をさせることへの批判(SNS) ・バリアフリートイレがなかなか空かない場合は、植え込みや駐車場を案内してもらうことで解決 ・洗浄ボタンが分かりづらい	・バリアフリートイレを使う目的は、自分のトイレと一緒に済ませるためであり、スペース的に、一般のトイレに盲導犬と入るのは難しいということを理解してほしい ・洗浄ボタンは自動にしてほしい(手が不自由な人が使うこともあるので)
7	屋外:道路や公園、芝生、広いスペースがある通路など。 その他:バリアフリートイレではないので、自分のトイレのタイミングとは異なる	特になし	特になし

表 7 盲導犬ユーザー 補助犬専用トイレの使用経験、困りごと、希望、理想

* 一部意味を変えず修正

	補助犬専用トイレの使用経験	補助犬専用トイレの困りごと	補助犬専用トイレ改善希望	理想の補助犬専用トイレ
1	使用経験あり:劇場	・劇場から遠く、幕間の休憩時間内に往復するのが難しい ・内部が狭く、犬が動くには不十分 ・自身のトイレと補助犬の排泄を別々の場所で済ませるのが不便 ・床が濡れているなど清掃が不十分だと利用をためらう	・風が通るのは良いが、屋根があると暗い印象 ・水栓(水場)があるのは助かるが、排泄物を処理できるゴミ箱や洗浄設備もほしい ・無機質で閉鎖的な空間よりも、使い心地の良い環境が理想 ・近くてすぐに行ける場所、植え込み等でも良い	・補助犬専用トイレにユーザー用のトイレもつけてほしい ・バリアフリートイレに補助犬も使うという事が明示されていると良い
2	使用経験あり:空港、競技場の屋内	・スペースが狭い ・床材が一般的な床(タイル等)であり、犬の好みや排泄のしやすさに合わない ・利用のたびにスタッフへの声掛けが必要で、心理的・時間的なハードルを感じた ・手続きの手間を考えると、自分と犬を同時に済ませられるバリアフリートイレの方が、結果として使い勝手が良い	・建物の脇(屋外)に屋根付きのトイレがあったら良い	・人のトイレの近くにあるとよい。 ・バリアフリートイレに補助犬も使うという事が明示されていると良い
3	使用経験なし	なし	なし	・ユーザーも一緒に使えて、配置のイメージがしやすいトイレ ・見えない人をサポートしてくれるようなシステム(音声案内)
4	使用経験あり:空港2カ所	・ステンレス、グレーチングは不向き ・屋外は雑草が生えないようにゴムのシートで覆われ、排泄場所が狭い ・屋外で屋根がなく雨に濡れる ・タバコを吸う場所になっている ・ゴミが捨てられていて汚い ・補助犬トイレがある場所を施設のスタッフが知らない	・屋外 ・水を流せる水道(またはじょうろなど)があると良い ・屋根がある、草むらなど指定のスペースがあるとありがたい	・屋内でも人も犬も両方OKなところ ・バリアフリートイレ+緑+ゴミ箱
5	使用経験あり:A市周辺6カ所、駅2カ所	・建物の裏の狭い場所を勧められ適当ではないと感じる ・自転車置き場ようになってしまっている	・誰でも分かるように補助犬トイレの看板をお願いしたい ・人間のトイレの近くに作って欲しい ・屋外なら屋根 ・水道 ・使えるように常に整備してほしい	・バリアフリートイレの隅に人工芝+ちょっとしたゴミ箱 ・屋外は屋根
6	使用経験あり:空港2カ所 袋無しで床の上で排泄可能、終わったら水で流す、ゴミ箱あり	・使うまでの手順が面倒。職員に声をかけなければいけないが、その場所がわからなかった。 ・終わった後も報告が必要で大変。ただし、夜中でも対応してくれた。	・スタッフに声をかけずとも利用できたらありがたい ・防犯上鍵が必要なら、暗証番号やQRコードなどでユーザー自身が簡単にアクセスできると良い	・スペースが広い ・荷物おきがある ・3種の障害者が使いやすいように、文字や音声で案内がある ・みんなが気持ちよく使える設計・指標があると良い ・バリアフリートイレにステッカーも貼ってあったら良い
7	使用経験あり:空港、ホテル ホテルは砂利のようなところで可能だった	特になし	特になし	・広いスペースがある ・バリアフリートイレとは別にあるとよい ・屋外で屋根があると良い

表 8 盲導犬ユーザー 補助犬の排泄に関して社会に求める理解

* 一部意味を変えず修正

	補助犬の排泄に関して社会に求める理解
1	・補助犬も生き物であり排泄はしなければならない、人と行動を共にしている犬にもトイレが必要だということを理解してほしい ・バリアフリースイートを補助犬ユーザーも使うことがあるということも理解してほしい ・そのような中で、バリアフリースイートの優先権など、折り合いをつけることも考えなければいけないと思う
2	・盲導犬たちはワンツーベルトをつけて、きちんと管理されているということを理解してほしい ・海外ではペットも商業施設に入れたり、ペット専用のトイレも設置されている例がある ・犬に対する社会的な考えが、日本はまだ遅れていると思う
3	・現在、バリアフリースイートを使うことにためらいは感じていない ・補助犬「専用」トイレがあると、バリアフリースイートを使いにくくなるのではという心配がある ・社会には、バリアフリースイートの意味を認識してほしい、バリアフリースイートにも補助犬マークを貼ってほしい ・ユーザーは綺麗に使うように心がけているということも知ってほしい ・社会一般の声として、バリアフリースイートで補助犬がトイレをすることが受け入れられないということを聞いたが、それは困るのできちんと周知していきたい
4	・ペットは排泄のために散歩に行く、盲導犬だけ袋を付けて排泄することがマナーだとするのは違う気がしている ・動物福祉の観点からしたら考えてほしい ・補助犬の種類によって排泄場所の使い勝手が違うと考えるが、盲導犬が主軸になりやすいと思うので介助犬の事も考慮する必要がある
5	・「袋を付けて排泄させて拾ってますよ」というのはアピールみたいな感じもしている ・ペットの尿の匂いが残っていると盲導犬も通り過ぎにくいことがあるので、ペットもマナーとして水で流して欲しい
6	・トイレの利用にはモラルも求められる、間違った使い方をしている場合にアピールしていく必要があると思う ・盲導犬と利用するとどうしても時間がかかることもあるが、お互い様理で解してほしい ・盲導犬ユーザーも他に排泄ができる場所があれば、バリアフリースイートにこだわる必要はないのではないか ・そもそも補助犬「専用」トイレは必要なのか
7	・犬が植え込みで排泄をすることに厳しい目を向けられることがあるが、きちんと袋をつけているので許容してほしい ・同じユーザー仲間には、盲導犬は袋をつけて排泄をし、周囲を汚さないようにしているという姿勢を示してほしい

②聴導犬ユーザー

a. 訓練事業者における補助犬の排泄に関する訓練指導内容（訓練内容、訓練からの変化）

- ・訓練内容：3名は屋内のバリアフリースイートでペットシートを使用してできるよう訓練していた。1名は合同訓練時、訓練士が自宅に来て家の状況に合わせて、排泄の場所などを考え、外出先では公共交通機関や施設を利用する前に、出る出ない関係なく、必ず排泄を促すように指導を受けたと述べた。1名は2頭目のためほぼ訓練士からの指導はなく自分でトイレトレーニングをし、もう1名は2頭目なので指導内容は少なく自分の生活のペースで行うようにとの指示を受けていた。4名とも2頭以上の聴導犬使用歴があり、個体による違いを感じながらも訓練だけでなく自身の経験を活かして対応していた。
- ・訓練からの変化：4名とも訓練内容からの変化はなかった。

b. 現在の補助犬の排泄管理の方法（自宅・外出先、使用する道具、工夫）

屋内はペットシート使用3名（自宅では、1名は失敗した時のためにペットシートの下にゴムマット、1名はトイレトレー使用）、屋外で使用する特別な道具はない。屋外では、尿は排泄後に水を流す。便は袋で拾う方法がとられていた。2名は、自宅では屋内で犬の自由なタイミングで排泄しているとのことであった。

c. （補助犬との）外出頻度、外出先

ほぼ毎日。通学、出勤、買い物、通院、遊び、旅行など基本的に聴導犬と一緒に行動。1名は通勤のために公共交通機関を利用していた。1名の方は飲みに行くときのみ例外とのことであった。猛暑等の天候や目的地の状況により連れて行かない選択をすることもあった。

d. 外出時の補助犬の排泄（場所、ユーザーご自身の排泄との兼ね合い、困りごと、希望）（表 9）

屋外のみ 1 名（土・草・植え込み等）、屋内・屋外併用 3 名（うち 1 名は屋内でもできるが可能な限り屋外）。屋内はバリアフリートイレ使用。屋内に入る前にできるだけ排泄を済ませるように工夫していた。また、聴導犬の排泄で屋外を利用する時はユーザー自身の排泄のタイミングとは同じにならないが、自分の排泄時にバリアフリートイレを使用する方が 1 名いた。屋外で困るのは都会の場合、土、草がないこと。犬の体格によって広いスペースが必要な場合もあり、探すのに困ることがある。その場合はペットの犬がしていそうな場所で促す、排泄間隔は把握しているので事前にできるところで済ませて目的地に行くなどの解決方法をとっていた。バリアフリートイレでする場合に、トイレの衛生管理が良くない場合があること、排泄物をトイレに流して良いか、使用済みのペットシートをおむつ用のゴミ箱に捨ててよいか迷うことが困りごとであった。ゴミに関しては捨ててよいという表示があると助かるとのことであった。現在、聴導犬の排泄で屋外のみを使用しているユーザーは、訓練時に屋内でも排泄ができるようにした方が良いと思うこともあるが、屋内で失敗することが多くなるのではないかとリスクを考えると葛藤すると述べていた。失敗に寛容、犬が過ごしやすい環境がある補助犬だけでなく、犬が暮らしやすい街になるとよいとのことであった。

e. 補助犬専用トイレについて（使用状況、困りごと、希望、理想の補助犬トイレ）（表 10）

4 名全員が使用したことがある（空港、役所、劇場）。1 名は、一部の空港の補助犬トイレはパーフェクトと感じたと述べていた。困りごととして

- ・水がない
- ・ゴミ箱がない
- ・ベンチがない
- ・屋根がない
- ・施錠されていてインターホンで人を呼ぶため聴覚障害者には使いづらい、設置場所が遠く雨天時
- ・炎暑時には行きにくい場所にあるなどが挙げられた。改善点として、
- ・水道の設置
- ・ゴミ箱
- ・土や草・（人工芝）
- ・アクセスの良さ
- ・ICT を活用した鍵の開閉システムの導入（QR コードなど）等の意見が述べられた。

また、都会の場合、屋外での排泄場所に困る点から、都会や大規模施設には補助犬専用トイレがあった方がよいという意見があった。理想の補助犬専用トイレとして、聴導犬ユーザーは盲導犬・介助犬ユーザーとニーズが異なるかもしれないという意見があった。屋外に補助犬専用トイレがあると良いという意見もあり、2 名の方からペットとの共用があってもよいという意見があった。空港などはペットも使える共同施設あってもよいのではないかとのことであった（ペットもきちんとマナーが守れる必要がある）。都心や大規模な公共施設には補助犬専用トイレがあるとよい、公園の法律と同じような考え方（緑地法）で一定の規模に対して補助犬トイレを設けといった方法を検討してもよいのではないかと提案があった。

f. 補助犬の排泄に関して社会に求める理解

補助犬は排泄を我慢しているとと言われることがまだ多いが、決してそんなことはなく、ユーザーが我慢させないように、管理していることをもっと理解してほしいという意見が 2 名から挙げられた。また、迷惑をかけないように気を付けているので必要な時に排泄できる場所があると助かることを理解してほしいとのことであった。また、街づくりをするときに補助犬ユーザーの人権を考えてほしい、きれいなまちづくりは大切だが 100 人の人が皆さん喜べる街か考えてほしいとの声があった。「補助犬も生き物なので失敗をすることはある、現在の社会はそれが許されないような風潮で非常に生き辛い、補助犬も失敗することはあるよねという寛容な社会になると、もう少し肩の力を抜いて社会参加できるのではないかなと思う。」とのことであった。

表 9 聴導犬ユーザー 外出時の補助犬の排泄場所（専用トイレ以外）、困りごと、希望 *一部意味を変えず修正

	外出時の排泄場所 (専用トイレ以外)	外出時の排泄場所 (専用トイレ以外)の困りごと	外出時の排泄場所 (専用トイレ以外)の改善希望
1	屋外:土、草のあるところ 聴導犬優先 聴導犬と同じタイミングで自身のトイレ に行くことはない	・コンクリートばかりだと排泄場所がなく タイミングに困る ・土がない場合、ペットの犬の排泄場所 付近で促す	・訓練時に室内でもトイレできるように した方がよいのではないかとと思うが、 室内で失敗するリスクが高くなる可 能性を考えると自分の中で葛藤がある ・(排泄の失敗が問題にならないよう な)補助犬だけでなく、犬と暮らしやす い街になるとよい
2	屋外:植え込み 屋内:バリアフリートイレ 劇場など外に出にくい施設の場合	・犬の排泄物をトイレに流しても良いの か迷う ・流してはいけない理由がわからないた め ・使用したペットシーツは、オムツを捨て るようなごみ箱がある場合は捨てても 良いのか悩む	特になし
3	屋内:バリアフリートイレ	・駅のバリアフリートイレは衛生面が良く ないことがあり、聴導犬を連れて入るの が嫌だと感じることもある ・天井にスピーカーがあるトイレでは、犬 がその音を気にしてトイレをしなくなる ことがあり、急いでいる時には困る ・犬の排泄物はトイレに流してもいいの か、ごみ箱に捨ててもいいのか迷う	・ごみを捨てても良いという表示がある とありがたい
4	屋外:草地 都心では排泄させる場所に困ることが ある 聴導犬の排泄間隔は把握しているの で、事前にできるところで済ませて目的 地に行くようにしている 屋内:室内でやらざるを得ないとき以外 は、外で済ませることがほとんど(移動 に制限がないので)	・都心は排泄をさせられる場所が少なく て困ることがある ・犬が大きいので、狭いスペースでは排 泄できない	・都心、大規模な公共施設では、補助犬 専用のトイレがあるといいと思う ・公園の法律と同じような考え方(緑地 法)で、一定の規模に対して補助犬トイレ を設ける

表 10 聴導犬ユーザー 補助犬専用トイレの使用経験、困りごと、希望、理想

*一部意味を変えず修正

	補助犬トイレの使用経験	補助犬トイレの困りごと	補助犬トイレの改善希望	理想の補助犬トイレ
1	使用経験あり:空港2カ所 屋外で開放的、屋根がある、 人工芝、パーフェクトだった	・アメリカの補助犬トイレと比べ ると、水がない、ゴミ箱がなく 捨てられない、ベンチがない ・聴覚障害者はインターホンが使 えない ・待ち時間が長い ・補助犬トイレは隅の方に追いや られている気がする	・水道(水をあげる) ・排泄物を捨てるゴミ箱 ・海外の空港の補助犬トイレが理 想 ・アクセスが良いようにしてほし い	・本物の土、草(人工芝) ・水道(水をあげる) ・排泄物を入れる袋 ・ゴミ箱 ・ユーザーの人権を考えてほしい
2	使用経験あり:役所、劇場、空 港2カ所	・一部の施設には屋根がないの で雨が降ると困る、暑い時期も 利用をためらう ・施錠され、インターホンで呼び 出さなければ使えない施設の場合、 聴覚に障害があるので使い づらい	・人工芝ではしない犬もいるの で人工芝以外の選択肢もあると 良い ・鍵が必要であれば、利用前に QRコードを配布して鍵の開閉 ができるようにするなど、どん な障害があっても利用しやすい ように工夫してほしい	・理想は普通のペットも使える施 設、匂いがして補助犬も排泄をしや すくなるのではないかと ・特に空港などでは、ペットにも需 要があると思うので、共同利用で きるような施設があっても良い ・ただし、ペットもきちんとマナーを 守れる必要があると思う

	補助犬トイレの使用経験	補助犬トイレの困りごと	補助犬トイレの改善希望	理想の補助犬トイレ
3	使用経験あり：ホテル、空港。駅 どこもペットシートで排泄できた	・鍵がかかっていて、インターホンでスタッフとコミュニケーションを取らなければいけない場合、聴こえないのでとてもハードルが高い ・病院のような雰囲気、消毒液の匂いがきついことがある	・補助犬ユーザーは排泄後に片付けをするので、スタッフによる掃除・消毒は最低限で良いのではないかと ・用意された様々な設備の使い方が分からず、壊してしまうことが怖いので、説明があると良い	今までの使用経験で一番良かったのはホテルの補助犬トイレ
4	経験あり空港駐車場	・動線に問題があり、近いルートは暑い時期は炎天下を歩く、暑さを避けるルートは交通量が多く盲導犬ユーザーは困るだろう ・使いやすさを考えると、ありえない位置だと思う	・動線をもう少し考えてほしい ・海外の犬用トイレは、もう少しアクセスしやすい所にある(建物を出てすぐのイメージ) ・動線、位置はなんらかの規定を設ける必要があると思う	・都心、大規模な公共施設では、補助犬専用のトイレがあるといいと思う ・公園の法律と同じような考え方(緑地法)で、一定の規模に対して補助犬トイレを設ける ・屋外で、補助犬専用のエリア、ドッグランになっていて他の犬もトイレをさせられ、そこに補助犬トイレもあると良い ・盲導犬ユーザー、介助犬ユーザーとはニーズは異なると感じる、聴導犬は屋内である必要はなく、ペットと共用でも構わない ・暑い日でも利用しやすい、雨もしのげるような設備だとありがたい ・空港では一般のペットもリフレッシュできるようなエリアがあるといいのではないかと ・ペットフレンドリーな施設は良い ・極端に離れた場所にあると、その後の行動に影響があるので、近いところにあった方がよい

表 11 補助犬の排泄に関して社会に求める理解

* 一部意味を変えず修正

	補助犬の排泄に関して社会に求める理解
1	・トイレ我慢させてないことを知ってほしい ・きれいなまちづくりは大切だが、100人の人が皆さん喜べる街か考えてほしい、補助犬ユーザーのことも考えてほしい
2	・補助犬は排泄を我慢しているとと言われることがまだ多い、決してそんなことはなく、ユーザーが我慢させないように管理していることをもっと理解してほしい ・赤ちゃんや子どもも排泄を失敗してしまうことがあるのと同じように、補助犬も失敗をすることはある ・現在の社会はそれが許されないような風潮で非常に生き辛い ・補助犬も失敗することはあるよねという寛容な社会になると、もう少し肩の力を抜いて社会参加できるのではないかとと思う
3	・なにかをする前には、必ず補助犬の排泄を済ませてから行動するようにしている ・トイレを我慢させてかわいそうと言われることがあるが、決してそんなことはないと思ってほしい
4	・公共の場で迷惑をかけないように気を付けているので、必要な時に排泄できる場所があると助かる

③介助犬ユーザー

a. 訓練事業者における補助犬の排泄に関する訓練指導内容（訓練内容、訓練からの変化）

- ・訓練内容：訓練事業者の入所施設での合同訓練（2週間）から排泄訓練を開始し、その後自宅での訓練を受けた方5名、初めから自宅における合同訓練を行いその中で排泄訓練を受けた方が7名であった。ともに合同訓練開始初期から行われていた。屋内での排泄訓練から外出先でのバリアフリートイレにおける排泄訓練へと展開していた。介助犬ユーザーは7名が合同訓練中に外出先での排泄訓練を行ったと明言した。排泄訓練時には介助犬トレーナーが障害に合わせた方法や道具を提案し、デモンストレーションし、それを実際に介助犬ユーザーが使用して練習をしていた。練習する中で、介助犬トレーナーとユーザーが適切な方法と道具を見極めていた。排泄の時間管理を理解するために日誌への記録を用いた方が1名いた。また1名の介助犬ユーザーは現在できている排泄処理動作が、自身の加齢に伴い身体への負荷となることを予測し、負荷の少ない方法を先に訓練するように希望して

いた。2 頭目のユーザー 1 名は、1 頭目よりも訓練内容が少なく、後は自分で行うようにと指導されたと述べた。また、別の 2 頭目のユーザーは介助犬トレーナーから犬にも個体差があるので比較をせず、現在の介助犬の排泄行動を理解して習慣化していくように指導されていた。

- ・ 訓練からの変化：合同訓練時の方法と変化している方は 4 名、変化していない方が 8 名であった。変化の内容は、犬の排泄の特性により尿をペットシートではなく柄杓で受け止める方法に変更した方 1 名であった。同じユーザーは便についても犬の特性と自分の生活時間に合わせて方法を変更していた。また別のユーザーは、犬の特性により尿・便ともに方法を変更している。便の排泄に時間がかかる犬の特性により当初使用していた道具は上肢への負担が大きいこと、また自身の体幹の筋力が向上したこともあり、道具の使用をやめ、地面から拾い上げる方法に変更している。また、バリアフリートイレで排泄をしなくなったと述べた方が 2 名、道具をより適切に変更した方が 1 名いた。

b. 現在の補助犬の排泄管理の方法（自宅・外出先、使用する道具、工夫）

使用道具は、障害の種類・程度によって異なるが、全ての方が道具を使用。ペットシートのみ 3 名（排泄物用のビニール袋使用含む）、ペットシートと市販されているペット用の排泄物キャッチャー（伸縮・折り畳み式）または柄杓かりーチャー（作成または市販のもの）の組み合わせ 9 名。キャッチャー・リーチャーなどは太柄にして持ちやすくする工夫をしていた。8 名の中でペットシートにひもを通す・洗濯ばさみを付けるなどペットシートの工夫があったのは 2 名であった。尿と便で排泄物の取り方が異なる場合、自宅（取りやすいもの）と外出時（持ち運びできるもの）とで道具を使い分けている場合が多かった。

c. （補助犬との）外出頻度、外出先

乳児の育児中のユーザー 1 名は 2 回 / 週であったが、それ以外は 5 回 / 週～ほぼ毎日外出していた。特に散歩は毎日の方が多かった。全員が移動手段として自走式・介助式または電動車いすを使用していた。2 名は屋内のみ伝い歩き可能、1 名は近距離であれば歩行器での歩行が可能で遠距離は介助式車いす使用であった。主な交通手段は自動車 7 名、公共交通機関 4 名であった。外出先は職場、病院、買い物（商業施設）、公園、習い事、音楽活動、旅行、スポーツやトレーニングジム、遊び、食事等多岐にわたった。ほぼすべて介助犬と一緒に行動し、例外は歯科受診（2 名）であった。

d. 外出時の補助犬の排泄（場所、ユーザーご自身の排泄との兼ね合い、困りごと、希望）（表 12）

バリアフリートイレ使用 4 名、バリアフリートイレと屋外併用 3 名、屋外 4 名。

バリアフリートイレを使用している場合はユーザー自身の排泄と同時に兼ねている者が 6 名いた。バリアフリートイレは障害のある方が待っている場合もあるので、介助犬の排泄のみでバリアフリートイレは使用しないようにしているという意見もあった。また、屋外（駐車場の隅、公園、草むら）では人目につかないところを探す配慮をしていた。屋外で排泄させる理由の一つとして、バリアフリートイレを使うと排泄物を捨てられず、持ち歩くことで周囲に気兼ねする、鞆の中とはいえ飲食店に持って入るのは申し訳ないので駐車場で済ませて持ち歩かないで済むようにしたいという意見もあった。困りごととして、バリアフリートイレでは

- ・ 汚れていると犬が排泄したがる
- ・ おむつなどが放置されていると臭いで犬が嫌がる
- ・ 待ち時間が長くなる
- ・ 補助犬が使っているとトイレを出たときにびっくりされる
- ・ 狭いと車いすと犬で身動きが取れない、ベビーベッドなどが出しっぱなしになっていると車いすが入れないし自分ではベッドをしまえないなどが挙げられた。また、一方でバリアフリートイレはいろいろな方が使用されることが前提で待つことは仕方がない、独占できる空間ではないと考えている、バリアフリートイレは特定の人が使いやすい環境というよりは皆が使いやすい状況を作ることが大切だと思うという意見も聞かれた。バリアフリートイレの改善点として、
- ・ 清潔であること
- ・ 手すりの設置は多いほうがよい（跳ね上げ式がよい）
- ・ 広い方がよい
- ・ ゴミ箱の固定
- ・ バリアフリートイレがあることを認識しやすいようにドアと壁の色を変える
- ・ ドアに補助犬ステッカーを貼ると使いやすいとの意見が出た。屋外の困りごとでは、
- ・ 雨の場合に濡れてしまうことや風が強い場合ペットシートが飛び排泄させづらい
- ・ 気が散って排泄に集中できない
- ・ 都会は緑が少なく人通りも多いため排泄場所に困る等を感じていた。そのため、屋外で屋根があるところがあるとよい

- ・ 駐車場に風を防げる囲いがある良い
- ・ 障害者用パーキングエリアを確保することが優先で駐車できなければ自分も補助犬もトイレに行けないので障害者用駐車エリアの数が増えるとよいとの意見が挙がった。バリアフリートイレ使用者も屋外使用者も事前に目的地にバリアフリートイレや公園などがあるか、天候や風の強さなどを調べて、あらかじめどこで、いつ排泄を促すか犬の体調と合わせて計画を立てて行動していることがわかった。

e. 補助犬専用トイレについて（使用状況、困りごと、希望、理想の補助犬トイレ）（表 13）

使用したことがある 7 名（空港、市役所、駅、ホテル、公共施設等）、使用したことがない 5 名。使用したことがない 5 名のうち 3 名は聞いたこと・見たことがあったが、2 名は存在を知らなかった。

補助犬専用トイレの困りごととして、

- ・ アクセスが遠い
- ・ 鍵がかかっているため使用するのに手間と時間がかかる
- ・ 車いすと介助犬にとっては入口が狭い
- ・ ほかの犬の臭いがすると気にして排泄を嫌がる
- ・ ユーザーのトイレがないので二度手間になるとの意見が述べられた。 反対に、
- ・ 排泄環境がそばにあるのは安心
- ・ 気兼ねなく使用できるといった肯定的な意見も聞かれた。現在の補助犬専用トイレについて改善してほしい点は、
- ・ 便利な場所に作ってほしい（案内をわかりやすく掲示する）
- ・ 鍵をかけないでほしい（認定手帳をカード式にしてカードでドアが開けられる、補助犬手帳をアプリにして管理できるなど ICT を活用した工夫があればよい）
- ・ 間口が広いほうが良いが視覚障害者が使用する時に使いにくいと思うので塩梅が難しい
- ・ 犬が回って排泄する広いスペースがあるとありがたい
- ・ 風が遮れる空間
- ・ 車いすから床に手を伸ばしてふき取るのが困難なため水が流せる仕様（失敗したときのため）という意見が出た。理想の補助犬専用トイレについては、屋内・屋外の両方の意見があった。屋内では、
- ・ 水道がある（床が流せる）
- ・ 視界が遮られる
- ・ 静かな環境
- ・ ゴミ箱の設置
- ・ 排泄物を流せる設備
- ・ 車いすでも問題ない広さ
- ・ 台の設置
- ・ 人工芝のエリア
- ・ 犬が好む床の素材
- ・ トイレ内に土がある（少し汚れても気にならない）
- ・ ペットシーツの完備といった意見があげられた。

屋外の補助犬専用トイレについては、屋根付きで背の低い植え込みが何本がある程度でよい・屋外で屋根付き人通りや車通りが少ない補助犬トイレが都会にあったら嬉しいといった屋外を希望する声もあった。また、ペットとの共用でもよいとする意見

- ・ 補助犬トイレを特別に作る必要はなく人も犬も使えるバリアフリートイレがたくさんあればよい
- ・ そこに補助犬ステッカーを貼って安心して使えるように、また補助犬の排泄について知らない方へ理解を促してほしいという意見も聞かれ、様々な考えがあることが分かった。

f. 補助犬の排泄に関して社会に求める理解

補助犬の排泄に関して、外出先で失敗しても許してくれる寛容な社会になってほしい・生き物だからトイレは完璧でないこともあると理解してほしいと 4 名のユーザーが述べ、社会の排泄に関する思い込みからプレッシャーを感じているように見受けられた。逆に「排泄物を拾いましょうか」という周囲の声かけがありがたいと感じているユーザーもいた。4 名のユーザーから

- ・ 補助犬は排泄を我慢させていないことを理解してほしい
- ・ 多目的トイレで補助犬が排泄をする（ペットシーツを使う）ことを理解してほしいという意見があった。ユーザー側にもマナーをしっかり守っ

て社会参加しなければいけないという提案もあった。また、ペットとの共生を考える中で、ペットも使えるトイレの設置やそのトイレに補助犬ユーザーだけでなくペット飼育者が余ったペットシートを置いてくれるという循環が生まれると相互に利用しやすくなる、但しペットの健康管理・衛生管理をしっかり守って使ってほしいという広く人と犬の共生社会に及ぶユニークなアイデアもあった。

表 12 介助犬ユーザー 外出時の補助犬の排泄場所（専用トイレ以外）、困りごと、希望 *一部意味を変えず修正

	外出時の排泄場所 (専用トイレ以外)	外出時の排泄場所 (専用トイレ以外)の困りごと	外出時の排泄場所 (専用トイレ以外)の改善希望
1	屋外:駐車場の裏、駅などの人目に付かないところ 犬はバリアフリートイレを好まず排泄しないが、自身のために使用、犬と人のタイミングは別	・外では人目が気になる、どのくらい人気のない所だったら排泄をさせても許されるのか迷う ・バリアフリートイレを使わない理由として、万が一失敗した時に自分で床の掃除をしないといけないと思うと、使用することに抵抗を感じているのかもしれない ・都会になると犬の排泄をさせても良い人気のない場所を見つけられない	特になし
2	屋外:芝生や草がはえているところ(程よい高さ) 遠出の時は、家の付近で済ませてから出かける 高速道路のSA(ドッグラン)で済ませることもある 水を流すことで対処している 自分と犬の排泄はタイミングが別	・都会は緑が少なく、人通りも多いので排泄場所に困る ・トイレのことが心配で電車にも乗るのを控えている ・介助犬が排泄しやすい場所にはペットも排泄していることがあり、ペットの排泄物を車いすで踏みそうになった ・雨が降っている時は、外で排泄に時間がかかると、車いすで傘もさせずぬれてしまう排泄してくれないとその後の行動がしづらい(飛行機、お店)	・ペットにもマナーを守ってほしい ・外で屋根があるところで排泄できると良い
3	屋外:駐車場や建物から出たところ、人のいないところを選ぶ 自身の排泄のためにバリアフリートイレと一緒に入るが介助犬はしないため、人と犬の排泄のタイミングが同じになることはない	・バリアフリートイレで失敗すると自分では床を拭けないので、同伴者に拭いてもらうことになるので、外でしている(外は水を流す) ・(外で排泄するようになったことで)犬が外だと思うと、本当は屋内なのに排泄してしまうことがある(渡り廊下のようなところ) ・犬が外だと勘違いすると困るので避けて行動するようにしている ・排泄の失敗は気になるのでタイミングを見計らって計画的に行動している	・外に補助犬専用のトイレがあると良いと思う
4	屋外:自動車で移動するので身体障害者専用駐車場の人目につかないところでさせる、室内に入る前に済ませると排泄物を車に置いていける 車の中に排泄物を入れるゴミ箱を設置している 犬と自身の排泄は分けている 障害者用トイレは狭い 時間的にも占拠できない(自分10分+犬10分で20分)	・外で排泄する時に風が吹くとシートが飛ばされてしまう、めくれてしまう ・同伴者がいる場合は、お願いしてシートを押さえてもらい解決 ・一人の時は何回もチャレンジする ・事前に風の予報や風が来ない地下の駐車場をリサーチする ・駐車場は公園、芝に比べる匂いもないし排泄が促されにくい	・ペットシートが飛ばないように、風対策で駐車場に囲いがあると良い ・入店前に犬にトイレをさせるより、まず自身が駐車できることが最低条件で優先事項、障害者用のパーキングが確保できるように数が増えて欲しい ・一部のショッピングモールでは障害者用駐車場は事前登録者のみ使用できるようになっているので安心して利用できる
5	屋内:バリアフリートイレ 屋外:車の間など人目に付かない場所 犬の排泄のついでに自身の排泄も済ます	特になし 小さな店やバリアフリートイレが無い所は行かない様になっている 大きな店は教育が行き届いている感じがする	・かがんでペットシートを取るので手すりをもっと設置してほしい
6	屋内:バリアフリートイレ 屋外:外の草むら、公園 排泄は家で済ませることが多い 自身と犬の排泄を同時に済ませる	・バリアフリートイレ内におむつが放置されていたり、ゴミ箱が溢れていたりとすることがある ・日常と違う閉ざされ空間、汚れて汚い場所では犬がしたがる ・犬が匂いで嫌がってしまう	・バリアフリートイレの使用者が多様化して利用が増えた、使えたらラッキーと思っている ・障害者だけが独占できる空間ではないと認識している ・清潔であることが大切 ・特定の人が使いやすい環境というよりは皆が使いやすい状況を作ることが大切かと思う

	外出時の排泄場所 (専用トイレ以外)	外出時の排泄場所 (専用トイレ以外)の困りごと	外出時の排泄場所 (専用トイレ以外)の改善希望
7	屋内: バリアフリートイレ(尿) 屋外: 人の少ないところ、土、芝生(便) 直線の道を歩くと出したがため、絶対に してほしくない場所の直前に先に排泄させて いる 自分は犬のタイミングに合わせて同時に済 ませる	・バリアフリートイレは色々な方が使うので 汚れてる ・待つことが多いが、誰でもトイレになってい るので仕方がない ・床が濡れているなど、犬が匂いを嗅ぎに 行く、足裏が汚れる ・ベビーベッドが出ていると車いすのス ペースが取れないため片づける必要があ る ・時間がかかるとノックされて落ち着いて できない、集中が切れると出なくなる ・トイレから犬が出てびっくりされる ・1回だけ犬が入っていることを指摘され た	・バリアフリートイレで待っている人に理解 してもらうために、自分で「介助犬排泄中」 というステッカーを貼って入る方法にしよう かと考えている ・勇気がないので言えないからトイレに補 助犬シールが貼ってあると助かる。 ・補助犬シールが貼ってあると安心して、選 んで入る
8	屋内: バリアフリートイレ	・バリアフリートイレが狭い場所もある、広 めのトイレが必要 ・誰でもトイレで長く待つこともある ・犬を連れてトイレを出た時にびっくりされ しまうことがある	・バリアフリートイレのスペースを広くして ほしい ・トイレに補助犬のマークがあって、犬の排 泄と自身の排泄の両方で時間を要してい ることが分かってもらえると気を使わな くて済む ・犬の排泄道具などを持っていく必要があ るので荷物が多くなるため、荷物を置く台 がトイレの中にあると便利
9	屋内: バリアフリートイレ 使うかどうかは多目的トイレの場所による ゴミ箱があればシートを捨てる 屋外: 駐車場や人目に付かないところ(冬 場で排泄の頻度が多くなる場合) ユーザー自身も介助犬と同じタイミングで 済ませる	・バリアフリートイレは混んでいる ・排泄以外の目的で使用していることがあ る ・コスプレヤーなどのイベントなどがある 時などは特に混む ・周りの人や店員さんに他のバリアフリー トイレを尋ねることで解決 ・トイレの中にあるベッドが出っぱなしだと 車いすが入れず、スペースが狭くなる(自 分では片づけられない) ・他の人に声をかけて助けてもらうことで 解決	・バリアフリートイレは広い方がよい ・車いすがゴミ箱に当たって倒れないよう に設置してほしい ・手すりが邪魔になることもあるので跳ね 上げ式にしてほしい ・トイレのドアと壁の色が同じだと見分けが つかないので、ドアの色を変えてほしい (犬が出る時に走ってくる方とぶつかりそ うになることがある)
10	屋外: 道路、公園、人目がないビルの間な ど 屋内: 自分のトイレと同じタイミングの時は バリアフリートイレを使うこともある 介助犬のトイレのためだけには使わない 自分が車いす利用者という立場から、犬の 排泄のためだけにバリアフリートイレを使 うと、待っている人は嫌だと感じるかもし れないと思う	・バリアフリートイレは空いていないことが 多いが、子供連れなども使うので仕方がない ・外では道路では、犬の気が散ることがあ る ・介助犬が高齢になりトイレが間に合わない ことがある、道具を用意している間にし てしまうことがある ・トイレ道具を用意する時間を短縮できる ように工夫している	・犬が苦手なグレーチングがない、入りやす いスペースだと良い
11	屋内: バリアフリートイレ 屋外: バリアフリートイレが混んでいるとき は仕方なく外で済ませる 犬と自身の排泄も同時に済ます	・使用中や近くに無いことが多いので探す のに困る ・そのために排泄に失敗してしまったこと もある ・トイレの前で失敗してしまうと我慢させて いるんでしょと言われる ・狭い多目的トイレで間違えて非常ボタン を押してしまったことがある	・ベビーカーが入れる様な広い空間があれば 必ずしもバリアフリートイレでないトイレ でも良い ・車椅子と犬が回れる大きさがあればよい
12	屋内: バリアフリートイレ 自分の犬のトイレのタイミングは100%一 緒 排泄はルーティン化 【自宅】 朝: 犬トイレ(尿・便) 夜: 犬トイレ 【職場】 朝: 犬トイレ→水飲ませる→自分トイレ 昼: 犬トイレ→水飲ませる→自分トイレ 夕方: 犬トイレ(尿・便)→水→自分 1日4~5回でタイミングが固定している、 乱れないように気を付けている	・バリアフリートイレは色々な人が使うの で、犬が出てくると驚かせてしまう ・補助犬がバリアフリートイレで排泄してい ることが一般的ではないので驚くのだろう ・驚かれたときは、「すみません」とあいさ つするくらい、説明を求められるまでのこ とはない	・一部の駅のバリアフリートイレは、補助犬 シールが貼ってあり、認識してもらえる機 会が増えるので安心(特に盲導犬、聴導犬 ユーザーにとっては安心材料になるのだ は) ・補助犬の排泄のことを一般的に知られて いないことが残念だと感じる(我慢させて いるなど)、だからこそ、シールが貼ってあ るだけでも、啓発につながるのではないかと 思う

表 13 介助犬ユーザー 外出時の補助犬の排泄場所（専用トイレ以外）、困りごと、希望

* 一部意味を変えず修正

	補助犬トイレ	補助犬トイレの困りごと	補助犬トイレの改善希望	理想の補助犬トイレ
1	使用経験なし 使用経験はないが、屋外の補助犬トイレがあるとありがたい「補助犬トイレ」ということが明記されていると、周りの目を気にせず安心して使えると思う	なし	なし	・屋外で屋根がついている ・人通りや車通りが少ない ・都会にあったらよいと思う
2	使用経験あり：空港 地上係員が案内してくれた 出口の近くで、比較的場所もわかりやすかった	・車いすでは、間口が狭くて犬と一緒に入りづらかった ・犬がトイレをしたくて慌てていたのに、家族に頼んだが間に合なかった ・人と犬が縦に並んで順番に入ればよかったかもしれないが、慌てている場合もある	間口がもう少し広い方がよいが、視覚障害者にとっては使いにくい施設になるのでは…と思うので、塩梅が難しい。犬が回って排泄するので、広いスペースがあるとありがたい。	・外で屋根付き、スペース広い、芝がある ・車いすの障害にならないように、フラットでシンプルなデザインが良い ・背の低いつつじなどが何本かあったらよい ・水道設備がある ・人工芝は衛生管理が難しく、においがあったり、暑くなると思う ・他のペットと一緒に使ってもよいと思う、補助犬だけではなく、マナーを守ってペットも使えるなら、もっと設置が進むのではないかとと思う。
3	使用経験あり：ホテル 1回使用したことがあり「良い」と感じた	なし	自分は台は使わないので、ない方がよい。人工芝はOK。	・屋外 ・低い壁ある（人や他の犬から見えない） ・広い（車いすの切り返しが可能、犬が排泄時にクルクル動く） ・失敗しても水で流せる床であればよい（水道がある） ・施設の中の使いやすい場所にある方がよい
4	使用経験あり：空港、ホテル 入口にカメラ顔を認識して使用を申し出ると、カギが開錠される、水は流せる 排泄はすんなり促せた 人工芝で犬の匂いもあって促しやすかった	・乗り場から離れた所にある	排泄の環境がそばにあるのは安心	・訓練事業者の入所施設にあるバリアフリートイレが一番使いやすい ・綺麗で広い、自身も犬もできる ・ペットシートが常備 ・消臭スプレーも常備 ・ゴミ箱設置（荷物を減らせる） ・犬は動き回って排泄するので便器や洗面もあると狭いのでバリアフリートイレでも犬だけ中でさせてここともある ・犬もバリアフリートイレでさせているのか、と思われるのも嫌で外でさせることが多い ・汚いところでないといけない犬もいる ・消臭剤、芳香剤が強すぎても犬は嫌がる
5	使用経験なし：存在を知らない	なし	なし	・ゴミ箱を大きくする ・壁に手すりがあると良い

	補助犬トイレ	補助犬トイレの困りごと	補助犬トイレの改善希望	理想の補助犬トイレ
6	使用経験なし:聞いたことはあるけど見たことはない	なし	・使用してみたい	・外出時の荷物がかさばるのでペットシートとかを完備してあれば荷物が減らせて助かる ・リーチャーも完備してればよい ・トイレ内に土があるスペースを増やして、屋外のような感じをトイレ内に作る ・土であれば、そのまま排泄してシートの拾い上げもいらない、手ぶらで済ませられる ・少しぐらい汚れても気にしすぎない空間 補助犬専用である必要はない。ペットも使用して良い空間。
7	使用経験あり:空港 バリアフリートイレと変わらなかった、台とシャワーがあった	・搭乗口から場所が遠い、鍵かかっている、インターホンで呼ばないといけない、時間がかかってしまう(優先搭乗の時間が早いので慌てる) ・空港職員を待つしかない	・シャワーはいらないと思った、台は車いすでブラッシングするのに利用しやすかった(搭乗前にブラッシングしておく) ・便利な場所に作ってほしい ・鍵はかけないでほしい ・認定手帳をカード式にしてそのカードでドアを自分で開けられるようにするという方法はどうか ・スマホで補助犬手帳を管理できるようなアプリが欲しい(障害者手帳のアプリの様な)	・屋外に補助犬のトイレを作ってほしい ・ペットと泊まれるホテルによくある、屋外で犬のトイレここのでしていいよという場所があればよい
8	使用経験なし:存在を知らない	なし	・あるといいと思う、気兼ねなく使用できる	・バリアフリートイレは必須だと思う ・そこにプラスして補助犬の排泄の使用 ・人も犬も一緒に使えるスペースがあると良いと思う
9	使用経験なし:最近知った(インターネット、SNS)	なし	・使ったことはないが見て感じたこととして、全面ガラス張りで補助犬トイレと書いてあり目隠しが欲しいと感じた ・台があつてペットシートを引きやすいようにしているが、もしシート外でしてしまったら始末ができないような構造に見えた - 尿はよいが、便はどこに捨てるのかなと思った	・周囲から見えないようにしてほしい ・音がしたり人がいると犬が排泄しない ・ゴミ袋の設置(黒い袋)、蓋つきのごみ箱 ・流せる場所も欲しい
10	使用経験あり:役所、空港、ホテル どこも使用可能だった 役所は本来は職員に声をかけて鍵を開けてもらわなければいけないが、その前にあるスペースで十分使いやすいのでそこを利用 広い場所があるだけで、なにか他に設備があるわけではない 庁舎建て替えに伴い、なくなってしまうと聞いたので残念	・役所のトイレは、鍵を開けてもらわなければならないので大変	・庁舎の建て替え後も、何らかの補助犬柄s用トイレのスペースがあったらありがたい	・介助犬が乗れる台がほしい

	補助犬トイレ	補助犬トイレの困りごと	補助犬トイレの改善希望	理想の補助犬トイレ
11	使用経験あり：ホテル、博物館、空港 水道あり、表示あり	・他の犬の匂いがあると、気にする犬はそこでできない ・遠い場所にあって困る	・風が遮れる空間がありがたい ・必ず使用後に水を流す様に看板を作って注意喚起してほしい ・情報・案内がもっと欲しい ・探さないと分からない場所では困る	・水があるとありがたい ・案内がある ・視界が遮られる ・車椅子でも問題ない広さ ・車いすが奏功しやすいように人工芝のエリアも考えて欲しい ・屋内はドアが軽い事、車椅子の人が使うを意識して欲しい ・使えるトイレを作って、たくさん使って、使うから増えるという循環が生まれる良い ・床の素材、ツルツル滑りすぎるのはダメ ・ステンレスで爪の音がするのはダメ
12	使用経験あり： 駅(多目的トイレと変わりはないが、汚してしまった時に水が流せるのが良い)、ホテル(バリアフリートイレで十分)、空港、ショッピングモール	・使いにくいとは思わなかった ・人のトイレがないので、二度手間になってしまう(それなら、バリアフリートイレでいっぺんに済ませたい)	・専用でなくても良いが、失敗した時に、水が流せるのが良い ・ふき取るのが大変なので、流してふき取らなくてもいいような床材だと更に良い	・特別に作る必要はないのではないと思う ・バリアフリートイレがたくさんある方がよい ・補助犬トイレの1つ分をバリアフリートイレにしてくれればよい ・補助犬シールを貼ろう！

表 14 介助犬ユーザー 補助犬の排泄に関して社会に求める理解

* 一部意味を変えず修正

	補助犬の排泄に関して対し社会に求める理解
1	・外出先で失敗しても許してくれる寛容な社会になってほしい ・駅と商業施設の中が心配、トイレは完璧にできるので店に入れるという触れ込みがハードルを高くしている ・電車を降りた時にすぐしたくなる傾向があり、駅を出た直後に人通りの多いところでしてしまったことがあったが、そのようなこともあるということを理解してほしい
2	・トイレしているときに話しかけられることがあるので、静かに見守ってほしい ・周囲の声かけがあるのでとてもありがたいが、自分で拾うようにしている(公園や病院などで拾いましょうか？と声をかけてもらえることが10回以上)
3	・バリアフリートイレに犬が入ると「えっ？」とみられることもあった ・使用者がトイレの時には一緒に入るし、補助犬もバリアフリートイレを使うことを知ってほしい ・補助犬シールを貼っておくのもよい
4	・補助犬専用トイレなら健康管理している犬しか使わないのでOK ・現実問題みんなが使えた方が良くと思うが補助犬以外の犬も利用できるなら、補助犬とペットの健康管理の違いを理解して、他の犬もきちんと健康管理して使ってほしい
5	・生き物なので体調を崩すこともあることを分かっている欲しい、トイレの場所に間に合わない事もある ・検査もしていることを知っておいて欲しい ・犬の出し入れ、歩行器の出し入れに広い駐車スペースが必要で、障害者用の駐車場が無いと斜めに停めざるを得ないことがある、障害者用の駐車場をいつでも利用できるようなにしてほしい
6	・ペットとの共用トイレにして、ペット飼育者も寄付してペットシートを置いてくれるような循環が生まれると良い ・非日常で計算外に排泄回数が増えることがあり、遠方に行くときは足りなくなることもある ・一般のペットも利用できるとなると衛生面、健康管理が行き届いていない犬も使う可能性が出てしまうので、そのあたりをしっかりと管理して使って欲しい
7	・補助犬はトイレを我慢していないので誤解しないでほしい ・外で排泄しても気にしないほしい ・絶対に失敗しないという思い込みはやめてほしい ・ペット可のお店が増えると、他の犬の失敗している場所に反応するので困ることも多くなる、失敗することもあるがきちんと片付けていることも知ってほしい ・補助犬の排泄に関して認知を変えるように情報発信してほしい
8	・だいが啓発が進んだ感じがする ・急にむやみに触ってくる人は今のところ居ない、お仕事中和認識もらえている様
9	・補助犬がバリアフリートイレを使うことを理解してほしい ・バリアフリートイレのドアに補助犬シールを貼ってほしい ・犬にトイレ我慢させてもらえると思われているが、実際は我慢などさせていない ・水の量、排泄の時間、トレイのタイミングを考えていることを知ってほしい
10	・介助犬と一緒にバリアフリートイレに入っても怒らないでほしい ・補助犬たちもバリアフリートイレで排泄することが広まってほしい ・バリアフリートイレはきれいに利用してほしい(食べ残しなどが放置されていることがある)
11	・ペットシートを使って排泄させていることを知っておいて欲しい ・我慢させてないことを知っておいて欲しい、家に帰るまでさせていないと思われることがある ・補助犬使用者がバリアフリートイレを使用していることを知って欲しい ・補助犬のトイレ方法についても知っておいて欲しい ・災害時にもトイレに関して理解してもらえるのか、ちょっと不安になることもある
12	・バリアフリートイレで補助犬も排泄することあるので、理解してほしい ・失敗してしまうこともあるので、温かい目で見守ってほしい ・ユーザーも水を持ち歩く等、マナーをしっかりと守って、社会参加しなければいけない

(3) 考察

①補助犬ユーザーの補助犬の排泄に関する考え方について

今回の調査で補助犬ユーザーは外出先での補助犬の排泄に非常に気を配り、失敗しないように努力し、周囲の視線を気にしながら協調して社会参加するために行動していることが、改めて感じられた。そして、それを当然とことしながらも、その配慮や努力は外出先での緊張感となり、補助犬ユーザーとして担うべき責任以上に社会参加時のプレッシャーになっているように思われた。その気持ちが社会へ求める理解において、補助犬も生き物なので失敗することがある、補助犬の失敗を許す寛容な社会になってほしいという意見に繋がっているのではないだろうか。その気持ちは、自身の障害によって失敗した時に上手く対処できないかもしれないという不安が加味され、盲導犬ユーザー・介助犬ユーザーに特に強く表れているのではないかと思われた。

②外出先での補助犬の排泄場所について

外出先での補助犬の排泄の場所として、屋内のバリアフリートイレを使用、屋外の土・草むら・植え込み・駐車場等で人が少ない場所を使用、屋内・屋外を併用している場合があることが分かった。三種の補助犬ユーザーは、補助犬の種類に関係なく屋内ではバリアフリートイレを使用していた。また、バリアフリートイレを使用する場合、効率的に人と犬の排泄を同時に済ませている場合が多いこともわかった。盲導犬・聴導犬ユーザーであっても、通常のトイレの個室（便房）は人と犬とが両方入るには狭く、補助犬の排泄行動に見られる動きもスムーズにできないため適していないと考えられた。

バリアフリートイレを使用する場合の困りごとは、ユーザーの障害の種類によって違っており、困りごととして共通していたのは、混雑しているので待ち時間があること、衛生的に管理されていない場合があることであった。改善希望はそれぞれの困りごとに即していた。盲導犬ユーザーはボタンや設備の形状や配置の統一や音声案内・施設内での場所が把握しやすいこと、聴導犬ユーザーは排泄物をトイレに流してよいかどうかやごみを捨ててよいかの表示、介助犬ユーザーは車いすで利用できる十分な広さを希望していた。希望として共通していたのは、バリアフリートイレのドアに補助犬ステッカーを貼ってほしい、そうするとバリアフリートイレが使用しやすくなるということであった。これは、補助犬ユーザーがバリアフリートイレを使用することは、本来は社会的に認められていることであると公表し、当たり前によりバリアフリートイレを使用できる土壌を作ってほしいということであろう。やはり社会のなかでの補助犬の認知度の低さ、補助犬に関する誤解があり、排泄の失敗同様周囲から向けられる視線が補助犬ユーザーの行動を窮屈にしているということではないだろうか。

屋外で排泄を行う場合の困りごとは、都会では犬の排泄に適した場所が見つけにくい、雨天の場合は濡れてしまう、風でペットシートが飛ばされるが挙げられた。これに対応して屋外での排泄時に希望することは、外で屋根があるところで排泄できるとよい、風を防げる、人目が少ない場所を案内してほしいということであった。屋外派からはバリアフリートイレに草や土を置いてくれたら嬉しいという意見もあった。このような多様なニーズに応えるバリアフリートイレが実現可能かは、トイレに関する学際的な専門家のチームによる検討が重要であると考えられた。

③補助犬専用トイレのあり方について

補助犬専用トイレに関しては、補助犬が使いやすいバリアフリートイレが増えた方が使いやすい、その方が補助犬ユーザー以外にもメリットがある、ペットも共通して利用できるトイレでもよいというユーザーのメリットと公共のメリットの両方を考えた意見があった。一方で、遠慮なく入れる補助犬専用トイレはありがたいとの意見もでた。それは、バリアフリートイレの混雑や先に述べた補助犬が使用することに対する遠慮があり、遠慮なく時間をかけて排泄を促せる補助犬専用のトイレは気がねがないということだろう。しかし、現在の補助犬トイレのあり方には困りごとも多い。アクセスが遠い、使用までに時間がかかりバリアがある（鍵、スタッフへの依頼、障害によっては使えない連絡手段など）、犬の好まない床材や設備の仕様（グレーチング、ステンレス製品など）などが挙げられた。これらに対して様々なアイデアが提供された。特に防犯のための鍵や連絡手段には ICT を使って、QR コードや暗証番号を事前に受け取りそれを鍵代わりに使用すること、いつも持ち歩く補助犬の認定証・使用者証をカードにして入口でかざすとドアが開くシステムの導入、インターホンではなくカメラ付きの画面で顔を見ながら連絡できる方法や音声と同時に文字情報で表示する画面を取り入れるなどがあった。バリアフリートイレに常設されていない設備では、床に水が流せる（失敗した時のため）、犬の排泄物を流せる、排泄物を捨てられるゴミ箱がある、補助犬用の荷物を置けるなどは共通しているが、ユーザーによっては犬が乗れる台がある方がよい場合やない方がよい場合など、障害の種類や排泄処理の方法が違ふことによって希望することにもばらつきが出たと考えられる。ここでも常に失敗した時について意見が出る点は、失敗しないように、失敗してもきちんと片付けられるようにという周到な準備が常に頭にあるのだらうと感じられた。

④社会の中で補助犬ユーザーが補助犬の排泄管理を楽にしたいために

補助犬ユーザーは全体として、外出時には補助犬の排泄を優先して考え、犬に無理がないよう、周囲に迷惑をかけないよう計画的に行動していた。そして、そのことを社会に理解してほしいと考えていた。屋内・屋外に関わらず、ワンツーベルトやペットシートなどのあらかじめ訓練された方法で排泄をし、屋外で直接土に排泄する場合は水で流すなどの対応を行い、排泄時に周囲を汚す（臭気が残る）

ことがない方法がとられていることがわかった。今回のユーザーの排泄管理において、社会参加時に不衛生になるような結果は生まないことが予想された。補助犬がバリアフリートイレを使用すると不衛生になるというのは誤解であり、周囲の誤解（SNS 含む）が補助犬使用者のバリアフリートイレの使用を控えさせる・遠慮する一つの要因になっていると考えられた。しかし、補助犬ユーザーが補助犬を同伴して社会参加することは国に認められており、バリアフリートイレを使用して補助犬が排泄することは補助犬ユーザーの権利であると考えられる。特に盲導犬・介助犬ユーザーは補助犬と同じタイミングで両方の排泄を済ませることもあり、自身の排泄にも関わることもある。補助犬使用者が外出先でバリアフリートイレを使用することはユーザーと補助犬の両方にとって重要であり、社会参加を支える大切な行動であることが推察された。

上記の点を踏まえて、補助犬ユーザーがバリアフリートイレを使いやすくなる 2 つのポイントを検討した。

1 つ目は今回の補助犬ユーザーから意見が出ていた「補助犬もバリアフリートイレを使用する」ことを明示することである。これで、他のバリアフリートイレを利用する方に、補助犬も使用することについて理解を求めることができるのではないかと。障害のある方、乳幼児を連れた方、高齢者などのステッカーが貼ってある場合があるが、そこに補助犬のマークがついていると使用して良いということが伝わりやすいだろう。



写真 45 トイレに掲示された補助犬マーク

2 つ目は、補助犬ユーザー側の遠慮とそこから表現される行動について考えたい。車いすを使う方、杖を使う方、ストーマ装具を使う方、おむつを使う方など、社会でトイレを使用する多様な方の中に補助犬ユーザーがいる。補助犬を連れてバリアフリートイレを使用することは、他の多様な方々同様、社会参加する上での権利であると考えられる。このことは当然補助犬ユーザーも理解していることだと思われるが、何か遠慮しているような様子が回答から見受けられる。補助犬ユーザーは補助犬を伴って社会参加できることに対して感謝しているという言葉をよく使うと感じている。補助犬に「ありがとう」と声をかけるように、周囲の方にも「ありがとう」の気持ちで接しているように思える。声高に自分たちの権利を主張する人は、今回の対象者には見受けられなかった。一部の補助犬ユーザーは、自分も排泄に時間がかかるのに補助犬まで排泄するとさらに時間がかかり、外で待っている人に気を遣うことや、他の場所で排泄できるなら他を探そうと考えること、犬がトイレから出るとびっくりされてしまうなど、補助犬と社会参加する上で周囲に気を遣って、遠慮して過ごしていることが伺えた。その心情は十分に理解できるし、もしかしたら犬を連れて社会参加する当たり前ではない自分たちという認識（本当は他の支援機器を使用する方と同様に当たり前のことである）、それに理解を求めるための戦略としての行動なのかもしれない。しかし、他者への配慮をするあまり萎縮し、自分たちの必要なことまであえて手放すこと、後回しにすることは本当に必要だろうか。バリアフリートイレを使用する多様な方の中には、補助犬使用者も含まれているはずである。声高に権利を主張するのではなく、それぞれがお互い様と考えて、気持ちよく使えるように行動していきたい。補助犬ユーザーと補助犬を見守る社会の視線が温かく寛容に変わるように、理解を求める啓発活動も続ける必要があることも言い添えておきたい。そして、それは補助犬ユーザーだけにメリットがあるのではなく、ペットの飼育者を含む人と動物が暮らしやすい、共生社会に近づくことであると考えられる。

2.2.3 一般市民に対する補助犬の排泄に関する意識調査（単純集計編）

補助犬使用者でない障害のある方や障害のない方との共生が可能な補助犬の排泄環境の方針を検討する一助として、一般市民の補助犬の排せつに関する意識調査を行った。

2.2.3.1 はじめに

2026年3月5日に実施した「補助犬の排泄に関する意識調査」の単純集計結果をまとめた。事業で実施したアンケート調査結果の速報として、回答結果の単純集計（各質問項目ごとに、回答割合（％）を示す集計）の結果を示しており、属性や質問ごとのクロス集計等の結果は2.2.2としてまとめた。

* 属性に関する結果の一部は男女別の結果を掲載している。

2.2.3.2 目的

本調査では、補助犬ユーザーと補助犬が安心して利用でき、施設管理者が管理しやすい環境整備をめざし、補助犬の排泄環境整備方針検討の一助となる基礎調査の実施を目的としている。

※大阪保健医療大学研究倫理委員会の承認を受けて実施した。（承認番号：大保大研倫簡 2510）

※調査結果に関する留意点

- ・本報告書で報告する調査は、調査会社登録パネルに対して実施した。そのため、調査結果は国内の状況を一般化するものではない。
- ・％の数字は小数点以下第2位を四捨五入したため、内訳の合計が100.0%にならない場合がある。
- ・エクセル統計 (BellCurve) ver.4.10 を使用し、単一回答にはカイ二乗検定（男女別集計を行った項目のみ）、複数回答にはコクランの Q 検定を行った。その他の検定方法を用いた場合はそれぞれに示す。

2.2.3.3 調査概要

・調査方法・対象等

①調査方法：株式会社マクロミルが提供するセルフアンケートツール「Questant」* を利用したインターネット調査

②調査地域：指定なし

③調査対象：「Questant」登録パネル配信にて回収した20歳～69歳の男女計1,111人

※配信は、性年代均等割で設定。

※パネル登録情報に基づき回答を収集したため、性別に関して「どちらでもない」、「無回答」等の選択肢は設けず。

④設問数：計15問（内、任意の自由記述設問1問）

⑤調査期間：2026年3月5日（木）1日間。

* 株式会社マクロミル「Questant」WEBサイト：<https://questant.jp/>

2.2.3.4 調査結果要約（サマリー）

1. 認知の乖離：補助犬の存在認知に比べ、法的根拠の認知が低い。

「補助犬」の名称認知は8割を超えるが、「身体障害者補助犬法」名称認知は4割強であり、内容まで知る層は3割程度に留まる。なお、盲導犬の認知度78.0%に対し、介助犬は64.2%、聴導犬は47.7%と開きがある。補助犬ユーザーが利用できる施設に関しても、誤った認識と「わからない」で7割を占めた。補助犬の存在周知に加え、受け入れ義務等の法的理解の周知が必要である。しかし、依然として大きな壁があることも示唆された。

2. 補助犬の排泄に関する意識：ほぼ知られていない状況が明らかとなった。

補助犬が排泄する場所に関する一般認知はほぼみられなかった。「補助犬は排泄を我慢させられている」と回答した人は36.3%であり、排泄場所は「わからない」が42.8%で最多であった。

3. 補助犬の「バリアフリートイレ」利用について：許容層が7割越えで多数派。

補助犬の排泄場所として「バリアフリートイレ」を許容する層が74.9%であるのに対し、否認層は25.1%であった。否認理由として、「特に理由はない」を除き「犬の排泄物で汚れそう」が27.6%でトップであった。補助犬が訓練されていることの周知が必要と考えられる。その他の理由として、「犬アレルギーが心配」23.3%、「ニオイが気になる」11.5%等もあり、健康上の理由や犬への嫌悪感もあると考えられ、解決の難しさが示唆された。

4. 「補助犬専用トイレ」設置の必要性について：必要派が8割越えで多数派。

「補助犬専用トイレ」の設置について、必要派が84.0%であり、不要派の16.0%を大きく上回った。必要派の理由として、「補助犬が排泄しやすい」等の補助犬や補助犬ユーザーへの配慮視点が半数であった。一方、「トラブル予防・ルール明確化」「施設の衛生管理」等、管理側視点も3割程度であった。そうした中、「多様な人への配慮」という共生社会への意識もみられた。一方、不要派の理由としては、「特に理由はない」が46.6%で最多であり、根拠が薄弱であることもうかがえる。

5. 自由回答：「補助犬の排泄のことなど考えたこともなかった」という声が多数。

調査への意見や感想を尋ねた自由回答では、「補助犬の排泄問題があるとは驚いた」、「補助犬の排泄について考えたこともなかった」、「考える機会になった」等の声が多数寄せられ、この調査を実施した意義はあったと考えられる。

一方で、「アレルギー」の問題や、「寛大な人ばかりでない」という懸念、バリアフリートイレの利用に関して「赤ちゃんが補助犬と同じトイレを使うのは嫌だ」という不安、「犬が可哀想」という同情の声もみられた。アレルギーや犬嫌いの人といかに共生するかについては、今後の課題といえる。

2.2.3.5 調査結果

1. 回答者属性

①年齢（年代）

20～60代性年代均等割付けにて配信した結果、計1,111名からの回答を得た。各年代の構成割合は20%前後であり、ほぼ均等であった。

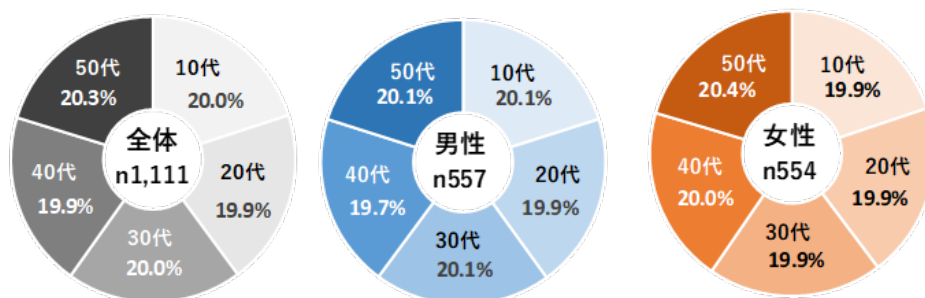


図 10 年代構成割合

②性別

回答者の性別構成を図11に示す。男性50.1%、女性49.9%であり、ほぼ半々であった。なお、性別の聴取については独立した設問を設けず、調査会社登録パネルの登録情報に基づき回答を収集した。そのため、性の多様性に配慮した「どちらでもない」や「答えたくない」等の選択肢は設けていない。

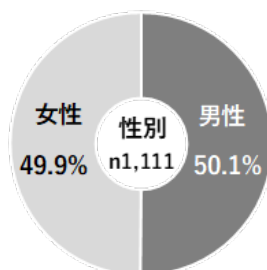


図 11 性別構成割合

③職業

職業を尋ねた結果を図12に示す。飲食業及び対面サービス業とその他の業種では、補助犬の受け入れに関する意識に違いがあるとの仮説より、「会社員・派遣社員・パートなど」、「個人事業主」、及び「会社経営者、役員」については、それぞれの選択肢に（飲食業）、（対面サービス業）、（その他）と補足を設けた。会社員・派遣社員・パートなど（その他）が最も多く33.6%、次いで無職が14.0%、専業主婦・主夫12.4%、会社員・派遣社員・パートなど（対面サービス業）11.8%、会社員・派遣社員・パートなど（飲食業）8.9%と続いた。その他の職業は、すべては5%未満であった。

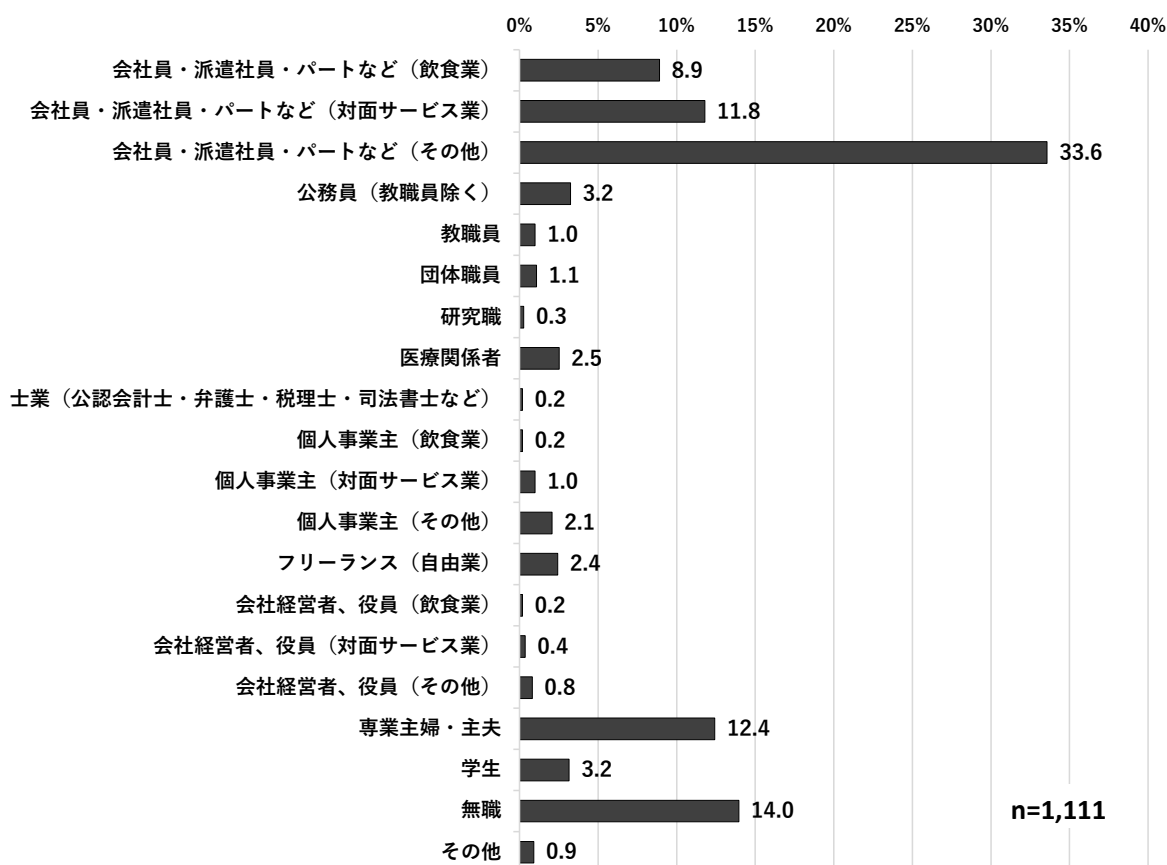


図 12 職業：回答者全体

考察：アンケート調査を平日（木曜日）の 10 時頃から配信したため、無職及び専業主婦・主夫の回答が比較的多くみられたと考えられる。なお、今回使用したアンケートツールの仕組み上、配信日時の指定はできなかった。職業においては男女差があると考えられるため、男女別の集計結果図 4 に示す。全体において最も多かった「会社員・派遣社員・パートなど（その他）」では、男性 39.3%に対し女性 27.8%であり、11.5 ポイントの差があった。「専業主婦・主夫」では男性 1.3%に対し、女性 23.6%であった。一方、「無職」は男性 15.6%に対し、女性 12.3%であり、男性の方がやや多いものの、大きな差は見られなかった。

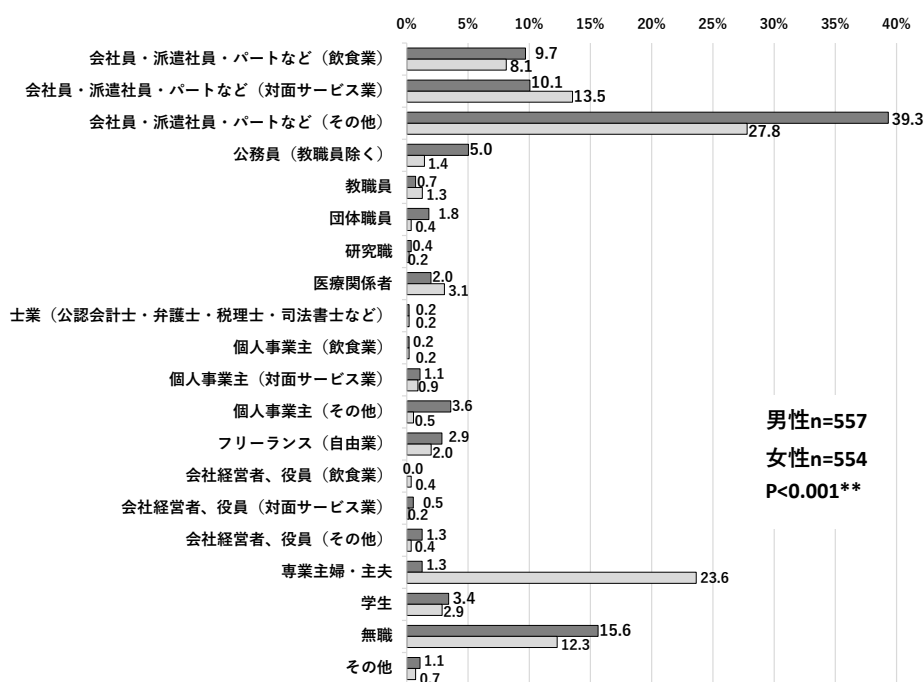


図 13 職業：男女別

考察：専業主婦・主夫は圧倒的に女性が多く、男性の担い手は少ないことがうかがえる。

飲食業、対面サービス業など、所謂「サービス業」に従事する従業員の割合は、男女の差が小さい、或いは女性の方が従事者は多く、その他の業種では男性の方が多いことが示唆される。

④居住地域

居住地域を47都道府県で尋ねた結果を表15に示す。地域区分は、総務省統計局に準拠したが、本資料では沖縄を「九州」でまとめず、「九州・沖縄」とした。47都道府県すべての地域から1名以上の回答があった。東京都が最も多く、15.0%、次いで神奈川県8.9%、大阪府8.6%であった。

表15 居住地域（47都道府県）

地域区分	都道府県	回答数(n)	構成比(%)	地域区分	都道府県	回答数(n)	構成比(%)
北海道 東北	北海道	44	4.0%	近畿	滋賀県	11	1.0%
	青森県	9	0.8%		京都府	23	2.1%
	岩手県	13	1.2%		大阪府	95	8.6%
	宮城県	28	2.5%		兵庫県	47	4.2%
	秋田県	9	0.8%		奈良県	15	1.4%
	山形県	8	0.7%		和歌山県	6	0.5%
	福島県	14	1.3%	中国	鳥取県	1	0.1%
南関東	埼玉県	67	6.0%		島根県	4	0.4%
	千葉県	59	5.3%		岡山県	13	1.2%
	東京都	167	15.0%		広島県	25	2.3%
	神奈川県	99	8.9%		山口県	10	0.9%
北関東・甲信	茨城県	22	2.0%	四国	徳島県	9	0.8%
	栃木県	13	1.2%		香川県	7	0.6%
	群馬県	12	1.1%		愛媛県	2	0.2%
	山梨県	8	0.7%		高知県	2	0.2%
	長野県	13	1.2%	九州・沖縄	福岡県	41	3.7%
北陸	新潟県	17	1.5%		佐賀県	4	0.4%
	富山県	9	0.8%		長崎県	6	0.5%
	石川県	5	0.5%		熊本県	11	1.0%
	福井県	8	0.7%		大分県	10	0.9%
東海	岐阜県	13	1.2%		宮崎県	7	0.6%
	静岡県	25	2.3%		鹿児島県	5	0.5%
	愛知県	77	6.9%		沖縄県	6	0.5%
	三重県	12	1.1%	合計		1,111	100.0%

次に、地域区分ごとに集計した結果を図14に示す。地域区分の分け方は表2同様である。一都三県である南関東が最も多く、35.3%であり、全体の3割以上を占めた。次いで、近畿17.7%、東海11.4%であった。東北、関東・甲信、九州・沖縄は6.1～8.1%で10%弱、北海道、北陸、中国、四国は5%未満であった。

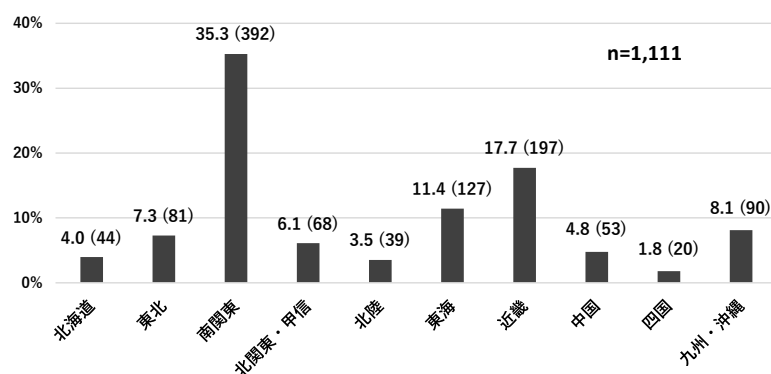


図14 居住地域（地域区分）

考察：全国から回答を得ることができた。しかし、大都市のある地域への偏りがみられる。結果の考察にはその点への考慮が必要と考えられる。

⑤犬との関係性や状況、認識等

回答者の犬との関係性や状況、認識等が、各項目の調査結果に影響を及ぼすか否かを調べることを前提に、「犬の飼育経験の有無」、「犬（動物）アレルギーの有無」、「犬好きか否か」を尋ねた結果を図 15 に示す。「犬の飼育経験者」は 35.7%、「アレルギー有」は 5.5%、「犬は好きなほうだ」と回答した人は 70.2%であった。 * 設問No. Q 13

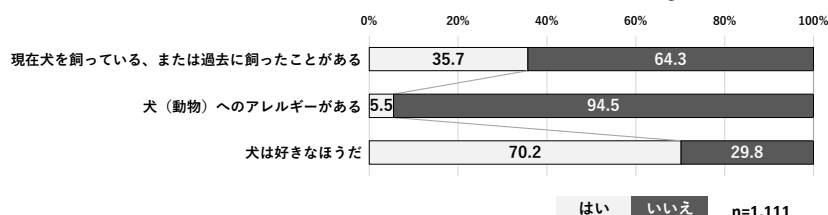


図 15 犬との関係性、認識等

考察：犬の飼育経験が無い人が 6 割以上であり、犬の習性等への理解が低い層の方が多い可能性がある。但し、犬好きと回答した人が 7 割を占めたことから、犬に対して好意的な層は多いと思われる。一方、5.5%ではあるが、犬（動物）へのアレルギーを持つ層があり、健康上の理由から配慮が必要な人があることが示唆される。

（２）「補助犬」に関する基礎知識 浸透状況の現状把握

認知度や理解度を尋ねる設問への回答バイアスをなるべく減らすため、「正誤は問いません」との注釈を提示した（以降同様）。

①「補助犬」と「身体障害者補助犬法」に関する認知度（単一回答）

「補助犬」と「身体障害者補助犬法」の名称や内容（どういふものか）に関し、どの程度知っているかを尋ねた結果を図 16 に示す。「補助犬」については、「名称も名前も知っている」、「名称のみ知っている」が共に 40%台、「名称も名前も知らない」は 15.6%であった。一方、「法律」については「名称も名前も知らない」が最も多く 56.3%であり、「名称も内容も知っている」は 14.4%であった。

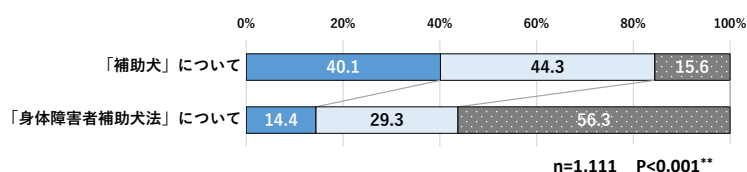


図 16 「補助犬」と「身体障害者補助犬法」の認知度

考察：「補助犬」については、「名称も名前も知っている」、「名称のみ知っている」を合わせると 84.4%であり、補助犬そのものへの認知度は高いことがうかがえる。一方、「法律」については「名称も名前も知らない」が 56.3%であり法律の存在自体がさほど認知されていないことが示唆される。なお、ウィルコクソンの符号付順位検定結果は $P < 0.001^{**}$ であり、両者の認知度の差は統計的にも意味のある差といえる。

②「補助犬」の種類に関する認知度（複数回答）

「補助犬」の種類を認知度を確認するため、「どれも知らない・わからない」を含む 9 選択肢の中から「補助犬だと思う犬の種類」をすべて選択するよう依頼した結果を図 17 に示す。「盲導犬」は 78.0%でトップ、次いで「介助犬」が 64.2%、「聴導犬」が 47.7%と続いた。「警察犬」、「災害救助犬」など、比較的社会的認知がされている犬種については 40%前後であった。

* 設問No. Q 2（選択肢「どれも知らない・わからない（排他選択肢）」以外はアンケート画面上でランダム表記）

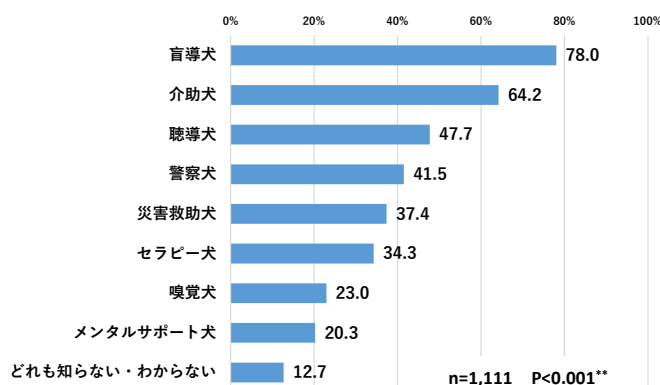


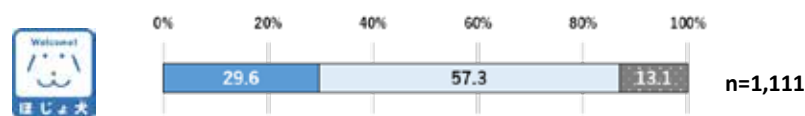
図 17 「補助犬」の種類に関する認知度

考察：上位 3 位はすべて「補助犬」として「正解」であった。特に「盲導犬」が 78.0%であり、認知度の高さがうかがえる。「介助犬」も 64.2%であり、ある程度の認知が進んでいる状況が示唆される。一方、「聴導犬」は正解ではあるものの半数を切っており、補助犬の中では最も認知度が低い。「盲導犬」、「介助犬」、「聴導犬」の順で認知度が下がっており、補助犬の種類による認知の程度に段階的な格差がみられた。また、補助犬以外の犬の選択率は、最も低い「メンタルサポート犬」でも 20.3%、「どれも知らない・わからない」と回答した人が 12.7%おり、周知活動の必要性が示唆される。

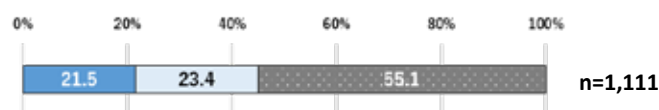
③「ほじょ犬マーク」と「補助犬ユーザー」の認知度

「a. ほじょ犬マーク」を実際に見たことがあるか、「b. 補助犬ユーザー（補助犬を連れた人）」を実際に見たことがあるか、「c. ほじょ犬マーク」と「補助犬ユーザーが利用できる施設」の関係性に関する理解度を尋ねた。それぞれの結果をまとめて図 18 として示す。「ほじょ犬マーク」を実際に見たことがある人は 29.6%、ない人は 57.3%であった。一方、「補助犬ユーザー」を見たことがある人は、直近 1 年以内では 21.5%、1 年よりも前では 23.4%、合計 44.9%であり、半数近くに遭遇経験があった。「ほじょ犬マーク」と「補助犬ユーザーが利用できる施設」の関係性の理解度は、正解である「マークがない施設でも利用できる」は 29.9%であった。「マークがある施設のみ利用できる」は 24.7%、「わからない」は 45.5%で最も多かった。＊設問No. Q 3, Q 4, Q 5

a.「ほじょ犬マーク」の視認経験(単一回答)



b.「補助犬ユーザー」との遭遇経験(単一回答)



c.「ほじょ犬マーク」と「補助犬ユーザーが利用できる施設」の関係性への理解度(単一回答)

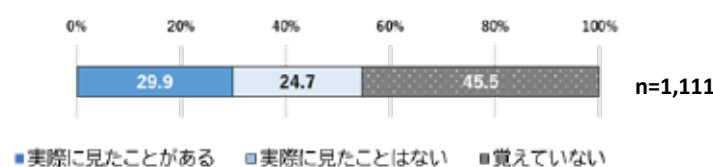


図 18 「ほじょ犬マーク」の視認経験（上段）、「補助犬ユーザー」との遭遇経験（中段）、「ほじょ犬マーク」と「補助犬ユーザー」が利用できる施設の関係性への理解度（下段）

考察：「ほじょ犬マーク」の視認経験は 29.6%であるのに対し、「補助犬ユーザー」との遭遇経験は 1 年よりも前を含めて 44.9%であった。マークが貼られている施設の少なさを想起されるが、自身と無関係のマークであることから記憶に残りづらい可能性もある。「補助犬ユーザー」の場合は目立つことから、記憶に残りやすいことが考えられる。また、「ほじょ犬マーク」と「利用できる施設」の関係性を正しく認識している人は 29.9%であり、周知の必要性がある。

（3）補助犬の排泄に関する意識の現状把握

①補助犬の排泄状況に関する認知度（単一回答）

補助犬がどのように排泄しているかについて、以下の①～③についてどの程度認知されているかを尋ねた（選択肢では「排せつ」と表現。以降同様）。結果を図 1 9 に示す。

「a. 補助犬は補助犬ユーザーの指示や管理のもと、補助犬の体調に合わせて排せつするよう訓練されている。」

「b. 補助犬の排せつ物は、補助犬ユーザーが責任を持って片づけている。」

「c. 補助犬は、排せつを我慢させられている。」

補助犬の排泄に関して、「①体調に合わせて排せつするよう訓練されている」は、そう思うが 33.8%、どちらかといえばそう思うが 34.0%で、「そう思う」の合計は 67.8%であった。「②補助犬ユーザーが責任を持って片づけている」は、そう思うが 26.8%、どちらかといえばそう思うが 30.4%、「そう思う」の合計は 57.2%であった。「③排せつを我慢させられている」は、そう思うが 9.9%、どちらかといえばそう思うが 26.4%、「そう思う」の合計は 36.3%であった。3 項目共に、「わからない」が 20 ～ 25%程度であった。

＊ 設問No. Q 6

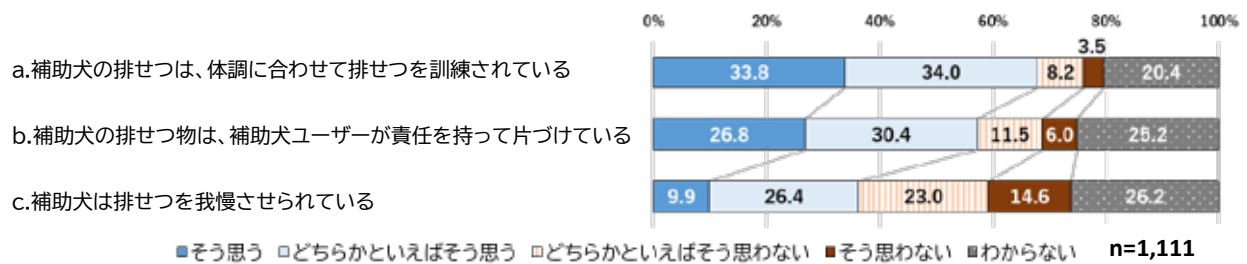


図 19「補助犬」の排泄状況に関する認知度

考察：aとbについては、「どちらかといえばそう思う」も含めた正答率は、aが70%弱、bが60%弱であり、比較的理解が進んでいることがうかがえる。cは、「どちらかといえばそう思う」も含めて誤った認識の回答率は36.3%であった。一方、正解である「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の回答率は37.6%であった。「わからない」も26.2%あり、aとbに比べて認知度が低いことが示された。

②補助犬が排泄する場所に関する認知度（複数回答）

「補助犬」がどのような場所で排泄しているかの認知度を確認するため、「その他」「わからない」を含む8選択肢の中から「補助犬が排泄していると思う場所」をすべて選択するよう依頼した。その結果を図20に示す。「わからない」が最も多く42.8%、次いで「補助犬専用トイレ」が31.3%、「施設側が指定するスペース」が28.4%であった。「多目的トイレ」と「公園」は16.3%、16.2%で同程度、道路・歩道は7.7%であった。

* 設問No. Q7（選択肢「その他」、「わからない（排他選択肢）」以外はアンケート画面上でランダム表記）

* 「多目的トイレ」：車椅子用トイレに、乳幼児用のベッドやオストメイト（人口肛門等を付けた人）用の流し等を設置したトイレのこと。「多機能トイレ」や「バリアフリースペース」とも言う。

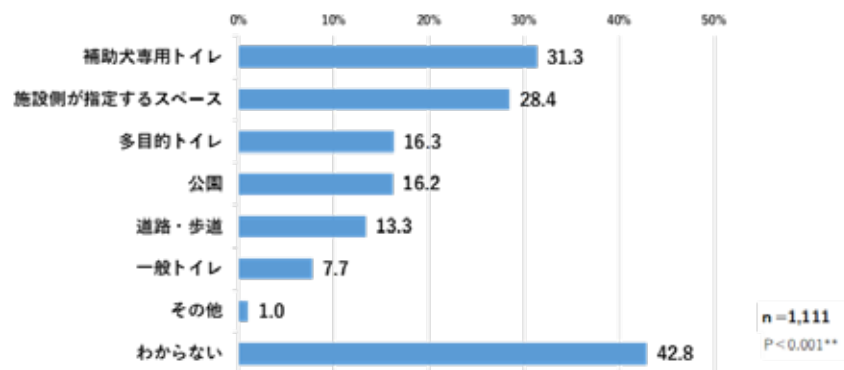


図 20「補助犬」の排泄する場所に関する認知度

考察：ペットの犬と同様に、公園や道路、歩道と回答した人は10%台に留まり、補助犬は「専用トイレ」や「施設側が指定するスペース」で排泄していると思っている人が相対的に多いことが明らかとなった。但し、「わからない」が42.8%で最も多く、補助犬の排泄に関する知識が認知されていないことが示唆される。

（４）補助犬が「バリアフリースペース」を利用することへの意識

公共施設に多く設置されている「バリアフリースペース（多機能・多目的含む）」を実際に利用する補助犬ユーザーも多いことから、補助犬が「バリアフリースペース」で排泄することに関する許容度や意識を調べた。

* 本項から「多目的トイレ」を、国土交通省が使用する名称「バリアフリースペース」を使用する。

①補助犬が「バリアフリースペース」を利用することへの許容度（単一回答）

補助犬が「バリアフリースペース *」を利用してもよいと思うかどうか、自身の考えに最も近いものを尋ねた結果を図21に示す。「よいと思う」が39.7%で最も多く、次いで、「どちらかといえばよいと思う」が35.2%であり、「許容派」は74.9%であった。一方、「どちらかといえばよくないと思う」は14.8%、「よくないと思う」は10.4%であり、「否認派」は25.1%であった。

* 設問No. Q8

* 実際の設問では一般認知が最も高いと思われる「多目的トイレ」を使用し、「車椅子用トイレに、乳幼児用のベッドやオストメイト（人口肛門）」

門などを付けた人) 用の流しなどを設置したトイレのこと。「多機能トイレ」や「バリアフリートイレ」とも言う。」と説明を付記した。

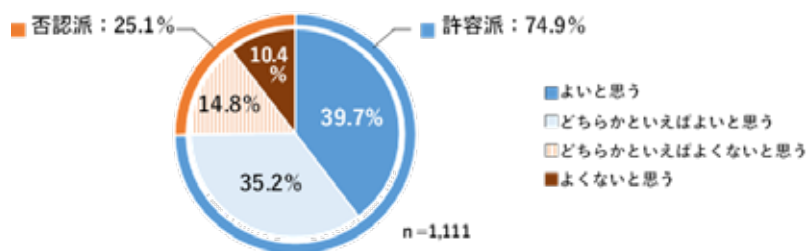


図 21 「補助犬」が「バリアフリートイレ」を利用することへの許容度

考察：許容派が 74.9%であり、補助犬が「バリアフリートイレ」を利用することへの許容度は高い。一方、否認派も 25.1%おり、利用者同士の合意形成が必要と考えられる。しかし、許容できない理由は人それぞれであると考えられ、配慮が必要なケースもあることが想定される。そのため、留意が必要な点もあると思われる。

②補助犬が「バリアフリートイレ」を利用することに対する否認理由（複数回答）

前問にて、補助犬が「バリアフリートイレ」を利用することについて「どちらかといえばよくないと思う」「よくないと思う」と回答した人に対し、その理由を尋ねた結果を図 22 に示す。「特に理由はない」が 31.5%で最も多く、次いで「他の利用者とトラブルになりそう」が 27.6%、「犬アレルギーが心配」が 23.3%と続いた。「犬の排せつ物で汚れそう」、「ルールや運用がわからないので不安」はそれぞれ 20.1%、19.7%で同程度、「人間用のトイレを犬が使うのはおかしい」は 16.8%であった。

* 設問No. Q 9（選択肢「その他」、「特に理由はない（排他選択肢）」以外はアンケート画面上でランダム表記）

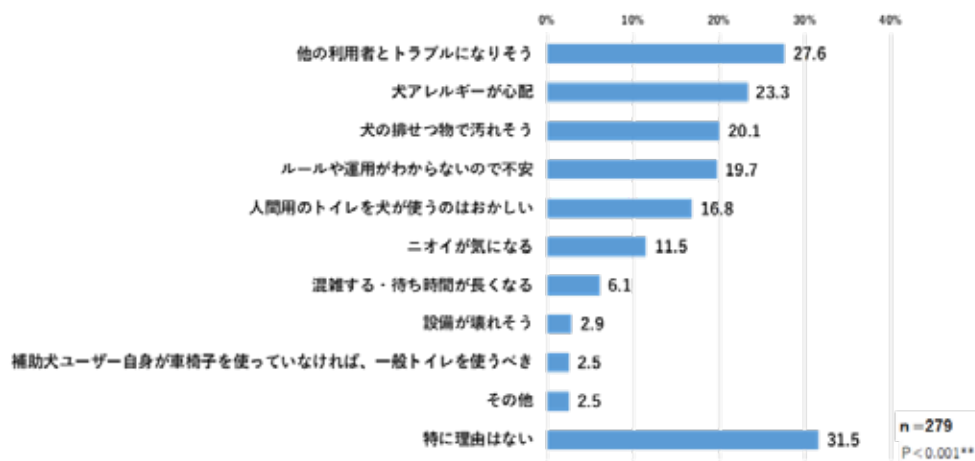


図 22 「補助犬」が「バリアフリートイレ」を利用することに対する否認理由

考察：「他の利用者とトラブルになりそう」、「犬の排せつ物で汚れそう」が上位であった点については、補助犬は訓練されていることの周知が必要と考えられる。また、「ルールや運用がわからないので不安」については、一定のルール設定及び周知を検討する必要性が示唆される。一方、「犬アレルギーが心配」については、健康上の理由、「ニオイが気になる」については、犬が好きではない等の理由が考えられ、周知だけでは解決できない課題がある。但し、「4）犬との関係性や状況、認識等」にて「犬（動物）のアレルギーがある」と回答した人は 5.5%であり（P43 参照）、回答者自身ではなく家族や他人のことを心配している可能性もある。「人間用のトイレを犬が使うのはおかしい」のほか、2.5%ではあるが「補助犬ユーザー自身が車椅子を使っていなければ一般トイレを使うべき」という理由もあり、周囲の人々の意識向上を図る必要性も示唆される。

（５）「補助犬専用トイレ」に関する意識

調査実施時点（2026 年 3 月）にて「補助犬専用トイレ」の設置事例が増えつつあることを踏まえ、専用トイレの必要性に対する意識、及びそのように思う理由を調べた。

①「補助犬専用トイレ」設置の必要性に関する意識（単一回答）

「補助犬専用トイレ」を設置することについてどう思うか、自身の考えに最も近いものを尋ねた結果を図 23 に示す。「専用のトイレがある方がよいと思う」は 35.8%であった。「どちらかといえば専用のトイレがある方がよいと思う」は 48.2%で最多であった。一方、「ど

ちらかといえば専用のトイレは無い方がよいと思う」は 7.6%、「専用のトイレは無い方がよいと思う」は 8.5%であった。

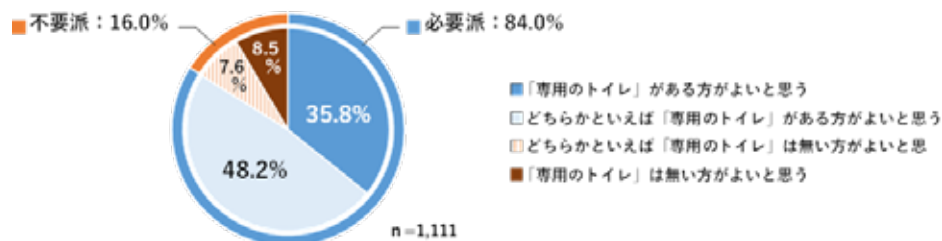


図 23 「補助犬専用トイレ」設置の必要性に関する意識

考察：「補助犬トイレ」の「必要派」が 84.0%であり、「不要派」の 16.0%を大きく上回った。但し、「ある方がよいと思う」の 35.8%に対し、「どちらかといえばある方がよいと思う」の方が 12.4 ポイント高い 48.2%であった。絶対的な必要性の認識ではなく、自身の知識範疇外事項について、「できればあった方がよいのではないか」という暗黙的確証バイアスに基づいた回答も多かった可能性もある。

②「補助犬専用トイレ」がある方がよいと思う理由（複数回答）

前問にて「補助犬専用トイレ」が「ある方がよいと思う」「どちらかといえばある方がよいと思う」と回答した人に対し、その理由を尋ねた結果を図 24 に示す。「「専用のトイレ」がある方が、補助犬が排せつしやすい」が 52.5%で最も多く、次いで「補助犬ユーザーが「補助犬が排せつできる場所」を探す手間が省ける」が 46.0%、「トラブルの予防・ルールの明確化につながる」が 38.4%で続いた。4 位～6 位は 32%で同程度、「補助犬にその辺に排せつされたら困る」は 12.3%であった。「特に理由はない」は 8.3%であった。 * 設問No. Q 11（選択肢「その他」、「特に理由はない（排他選択肢）」以外はアンケート画面上でランダム表記）

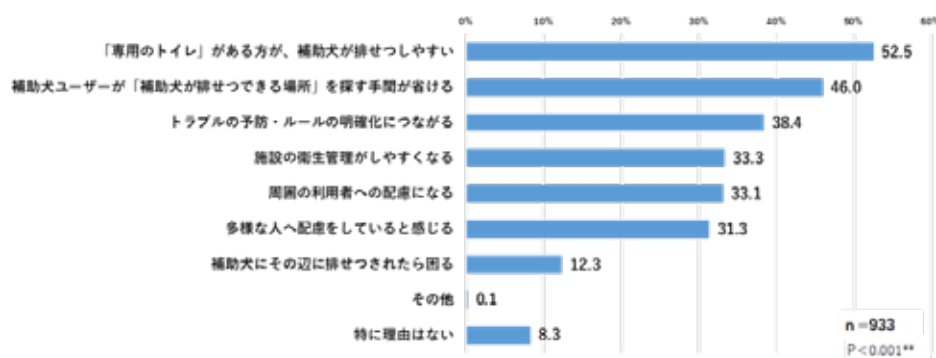


図 24 「補助犬専用トイレ」がある方がよいと思う理由

考察：「補助犬が排せつしやすい」、「補助犬ユーザーが補助犬の排せつ場所を探す手間が省ける」が 50%前後であり、補助犬や補助犬ユーザーへの配慮として必要と考えた人が半数程度を占めた。一方、「トラブル予防・ルール明確化」、「施設の衛生管理がしやすい」、「周囲の利用者への配慮」が 30%台であり、当事者よりも周囲の利用者、管理側の視点での必要性を考慮した人もいることが示唆される。但し、「多様な人への配慮」が 31.3%であり、共生社会への意識もうかがえる。「補助犬にその辺に排せつされたら困る」は最も少ないものの 12.3%であり、補助犬が訓練されていることの周知が必要と考えられる。

③「補助犬専用トイレ」が無い方がよいと思う理由（複数回答）

前問にて「補助犬専用トイレ」が「無い方がよいと思う」「どちらかといえば無い方がよいと思う」と回答した人に対し、その理由を尋ねた結果を図 25 に示す。「特に理由はない」が 46.6%で最多であった。「特に理由はない」を除く上位 3 位は、「設置や維持管理にコストがかかりそう」、「設置スペースの確保が難しそう」が 21.3%で同率 1 位、「利用対象者が限られ、その他大勢にメリットが少ない」が 18.0%であった。いずれも数値に大きな差はなく、割合も低い。

また、「ペットの犬同様に補助犬も道端などで排せつすればよい」は 15.2%、「悪用やマナー違反」「衛生面やニオイ」に不安を感じる人がそれぞれ 12.9%、7.9%であった。

* 設問No. Q 12（選択肢「その他」、「特に理由はない（排他選択肢）」以外はアンケート画面上でランダム表記）

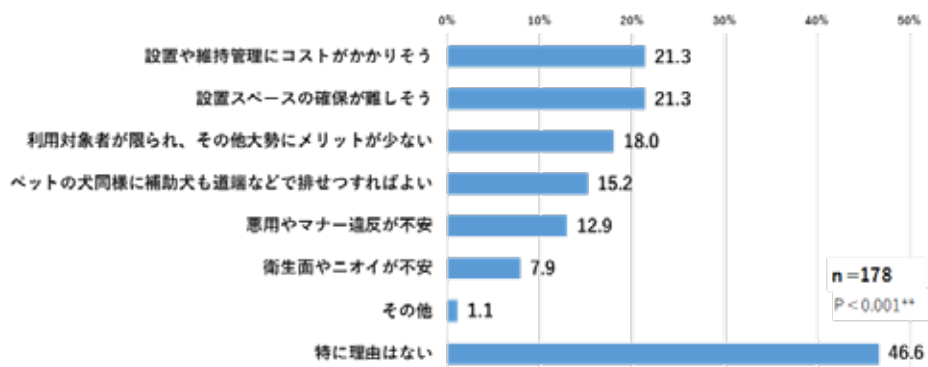


図 25 「補助犬専用トイレ」が無い方がよいと思う理由

考察：「補助犬トイレ」が「あった方がよい」と回答した理由とは対照的に、「特に理由はない」が46.6%で半数近くであった。同率1位の理由は21.3%、3位～5位は10%台であり、「補助犬トイレ」が「無い方がよい」とする理由が薄弱であることがうかがえる。「コスト」や「スペースの確保」は施設の施主や管理者側、ひいては設計側の課題であり、建築関係者への周知も必要と考えられる。「ペットの犬同様に補助犬も道端などで排せつすればよい」と回答した人については、犬の習性等に理解がある、或いは寛容である可能性がある。

(6) 調査に関する意見・ご感想（自由回答・任意）

本調査に関する感想や意見などを任意の自由記述式で尋ねた。計192件の意見、感想を得た。192件中、女性が105件(54.7%)であり、男性の87件(45.3%)より多かった。年代別では20代25件(13.0%)、30代23件(12.0%)、40代40件(20.8%)、50代59件(30.7%)、60代45件(23.4%)であり、30代以下の若年層よりも40代以上の中高年層の方が多かった。

以下、代表的なコメントを抜粋する（大意を変えずに要約した箇所あり）。全体的な傾向については2.2.4にて詳細報告する。

●補助犬への理解や啓発への意識

- ・「補助犬の排泄問題があるとは驚いた。一般の犬のようにしたい時にすれば良いと思うが、介助される方が片づけられるかなどの問題があると知った。(50代・女性)」
- ・「補助犬の排泄について考えたこともなかったので、新たな視点を得るきっかけになった。これからは意識を向けてみたい。補助犬が人間に貢献してくれる中で、ストレスなく、快適に過ごせるようになればいいと思う。(40代・女性)」
- ・「補助犬に接する機会がなかったので、排泄について考えたことがなかった。考える機会になった。(20代・女性)」
- ・「今後も補助犬の支援が広がると良いと感じた。(30代・男性)」

●実際の遭遇経験・マナーについて

- ・「地下鉄の車中で盲目の方と盲導犬が乗ってくるところを見た。よく馴けられていて感心すると同時に、馴ける方々もご苦労があるのだろうと思った。(60代・男性)」
- ・「盲導犬を電車で何度か見たことがある。座席の下ですごく不安そうにしているのを見ると、仕事とはいえ可哀想に感じる。満員電車で足を踏まれたり蹴られたり、怖い思いをすることもあってはいるのではなかろうか。(中略) 犬は責任感が強い生き物なので、無理をしているのではないかと心配になる。(30代・女性)」

●今後の課題

- ・「このアンケートに答えるまで、補助犬の排泄のことは考えたことがなかった。一般トイレの利用は、アレルギーの方はもちろん、寛大な人ばかりではないので別のトイレの設置が必要だと感じる。(50代・女性)」
- ・「補助犬の存在は前から知っていたが、実際街中で見かけたことはない。補助犬専用のトイレは取り入れてもいいと考える。人への配慮や衛生的な面を考えてもアリではないか。(20代・男性)」
- ・「赤ちゃんがいるため多目的トイレを使うことも多く、補助犬と共同だと嫌だと感じてしまった。世の中のみんなが使いやすいようにするのは難しいと思った。(30代・女性)」
- ・「専用トイレの設置は、明らかに補助犬がたくさん利用すると分かっている施設なら良いと思う。しかし、利用が多くはない一般的な施設に設置しても、今の多目的トイレ同様悪用されると思うので不要だと思う。(30代・女性)」
- ・「犬嫌いな人、動物嫌いな人もいるので、すべての人の理解を得るのは相当の努力が必要だと思う。(60代・男性)」

● 共生社会に向けて

- ・「補助犬は身体の不自由な方のためには必要な大事な犬。自分は健常者だが、どんなに有り難いか、役に立っているかわかっていくつもり。この犬たちが頑張りやすい環境を作るのが人間の使命だと思う。(60代・女性)」
- ・「補助犬は知っていたしマークも見た事があるが、排泄の事まで思いが及ばなかった。どんな人でもみんなが快適に暮らせる街になれば良いと思う。(50代・女性)」
- ・「補助犬も利用者も周囲に気兼ねすることなく共生出来る社会であり、弱者や補助を必要としている方達に人として当たり前手の差し伸べることが出来る私達でありたい。そのための環境整備や社会的認知を向上させる活動はもっとするべきと思う。(60代・男性)」

● 犬への同情

- ・「犬が可哀想。(60代・男性)」
- ・「ある意味動物も可哀想だと思う。(50代・男性)」

● 回答を終えて

- ・「現状、目が見えない方や体が不自由な方の補助の場合はどうしているのか気になった。私は犬が苦手なので、お手伝いは出来ないが、好きな方ならお手伝い出来る世の中になって欲しいと思う。(40代・女性)」
- ・「補助犬の排泄について考えたこともなかったので、新たな気づきがあり興味を持った。(30代・女性)」

2.2.4 一般市民に対する補助犬の排泄に関する意識調査（分析編）

2.2.4.1 はじめに

2.2.3 をさらに属性や質問間でクロス集計等を行い、「分析編」としてまとめた。回答結果を居住地や性別、犬との関係性等の属性により、補助犬や法律の認知度、補助犬がバリアフリートイレ（多機能・多目的・だれでもトイレ等）を利用することへの許容度、「補助犬専用トイレ」の必要性への肯定度等の結果を示すことを目的としている。

※大阪保健医療大学研究倫理委員会の承認を受けて実施した。（承認番号：大保大研倫簡 2510）

※調査結果に関する留意点

- ・本報告書で報告する調査は、調査会社登録パネルに対して実施した。そのため、調査結果は国内の状況を一般化するものではない。
- ・%は小数点以下第2位を四捨五入したため、内訳合計が100.0%にならない場合、4段階評価で「どちらかといえば」の合計がグラフ数値の合計と一致しない場合がある。
- ・エクセル統計（BellCurve）ver.4.10 を使用し、カイ二乗検定を行った。
- ・自由回答については、アフターコーディングによる分析を行った。

2.2.4.2 分析編要約

（1）犬との関係性や状況、認識等：男女差は認められず

- ・犬の飼育経験の有無、アレルギーの有無、犬好きか否か：いずれの項目においても、男女間で統計的有意差はみられず、男女間での構成比に差はみられなかった。

（2）認知の現状と課題：補助犬の名称認知と法律認知の乖離

- ・「補助犬」と「法律」の認知差：「補助犬」の名称認知は性別・年代を問わず8割を占めた。一方「身体障害者補助犬法」の名称認知は4割程度、内容まで知る層は最も高い20代でも21.2%、他は1割台、50代は7.7%であった。性別・年代問わず共通の課題であるといえる。職業別でも、法律について内容まで知る層は「飲食業」でも3割であり、他は1割台であった。補助犬の受け入れ側への周知も課題である。
- ・補助犬の種類別の認知格差と性別・年代による有意差：性別・年代を問わず、盲導犬、介助犬、聴導犬の順に認知度が高かった。男女で比較すると、介助犬（ $P < 0.001^{**}$ ）及び聴導犬（ $P = -0.0446^{*}$ ）において女性の認知率が有意に高かった。特に介助犬では女性が約10ポイント上回り、情報の浸透度に男女差が見られた。年代別では30代以下よりも40代以上の方が認知率は高く、上位3位の犬種共に有意差がみられた。（盲導犬・介助犬： $P < 0.001^{**}$ 、聴導犬 $P = 0.0583^{*}$ ）
- ・利用可能施設の理解不足：補助犬ユーザーが利用できる施設について正しく認識している層は約3割に留まる。「ほじょ犬マークの視認経験」と「補助犬ユーザーとの遭遇経験」により理解度が左右されることが明らかとなった（いずれも $P < 0.001^{**}$ ）。しかし、視認経験、遭遇経験のある人でも正しく理解している層は4割～半数未満であった。それらの経験に大きな地域差はみられず、受け入れ義務等の法的理解の周知は、全国的な喫緊の課題といえる。

（3）補助犬の「バリアフリートイレ」利用：高い許容度と属性による差

- ・多数派である許容層とアレルギーを有する当事者の受容：補助犬の排泄場所として「バリアフリートイレ」を利用することを許容する層は、全体で74.9%に達する。また、「犬（動物）へのアレルギーがある」と回答した層においても80.3%が許容している点は特筆に値する。アレルギーの有無において統計的有意差はみられなかったことから、アレルギーの有無は許容度を左右する要因となっていないといえる。ゆえに、適切な衛生管理のもと、アレルギーを有する層との共生も可能であることが示唆された。
- ・犬への親和性の影響、及び年代による違い：犬の飼育経験者や犬好きの層において、有意に許容度が高い（いずれも $P < 0.001^{**}$ ）。一方、年代別では20代の「よくない」が16.2%であり、全年代で最も高かった。
- ・年代による否認理由の違い：否認理由のうち、年代別で有意差がみられたものは「他の利用者とのトラブル」や「ルールや運用の不明瞭さ」への懸念、及び「特に理由はない」であった。全年代で「よくない」の回答率が最も高かった20代では、「特に理由はない」が半数を占め、無意識の感覚的な拒否感である可能性もある。一方、「よくない」の回答率が低かった50代（5.4%）、60代（5.8%）では、トラブルやルールに対して懸念を抱いていることがうかがえた。

（4）「補助犬専用トイレ」の設置の必要性：圧倒的な必要派と選択肢としての役割

- ・8割超が設置を支持：「補助犬専用トイレ」の設置について、必要派が84.0%であり、不要派の16.0%を大きく上回った。
- ・アレルギーを有する層による「選択肢」としての肯定：犬（動物）アレルギーがあると回答した層の内、8割以上が専用トイレの設置を支持しており、アレルギーがないと回答した層との有意差はみられなかった（ $P = 0.6538$ ）。アレルギーを有する層においては、補助犬の「バリアフリートイレ」の利用においても許容度が8割であったことから、「専用トイレの設置」が唯一の解ではなく、バリアフリー

トイレの利用との併用等、多様な環境整備についてアレルギーを有する層でも許容され得ると考えられる。

- ・女性及び 50 代以上による高い支持：性別では男性よりも女性（86.6%）、年代では 50 代以上（50 代 90.0%、60 代 90.2%）において必要性が強く支持された（いずれも $P < 0.001^{**}$ ）。

（５）自由回答からみえる「共生」への視点

- ・調査を通じた気づきと意識の変容：「補助犬の排泄のことなど考えたこともなかった」、「これを機に学びたい」という声が多数寄せられ、当調査自体が補助犬や補助犬の排泄に関する理解啓発や意識変容への契機となったことが読み取れる。
- ・柔軟な環境整備への期待：「犬が苦手な人や小さな子どもへの配慮」、「補助犬が生きやすい社会への希求」等の意見がみられた。特に 50 代以上の女性に目立ち、他者への配慮や共生社会への意識の高さがうかがえた。一方、衛生面やルールに関する不安の声もあり、画一的な整備では解決が困難であることが示された。補助犬ユーザーが周囲に気兼ねすることなく、かつ安全に排泄環境を選択できる社会の実現に向けた課題が浮き彫りとなった。

2.2.4.3 調査結果

（１）犬との関係性や状況、認識等

回答者の犬との関係性や状況、認識等が、各項目の調査結果に影響を及ぼすか否かを調べることを前提に、「犬の飼育経験の有無」、「犬（動物）アレルギーの有無」、「犬好きか否か」を尋ねた。全体の結果を図 26 に再掲。

* 年齢（年代）、性別、職業、居住地域等の基本属性については「2.2.3」参照。

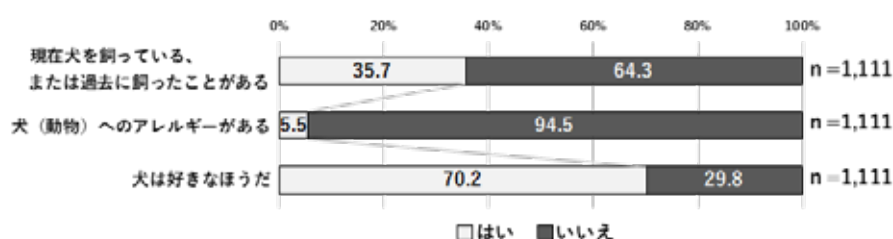


図 26 犬との関係性、認識等：全体

次に、男女別の結果として、犬の飼育経験の有無を図 27 に、犬（動物）へのアレルギーの有無を図 24、犬好きか否かを図 25 に示す。犬との関係性や認識に関して、男女による統計的有意差は認められなかった。

①現在、及び過去における犬の飼育経験の有無：男女

「犬の飼育経験者」は、男性 35.0%、女性 36.5%と同程度であった。

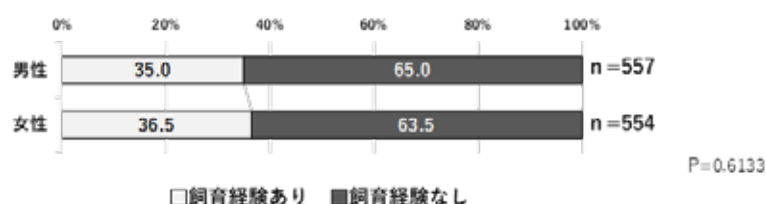


図 27 犬の飼育経験の有無：男女

②犬（動物）へのアレルギーの有無：男女

犬（動物）へのアレルギーがあると回答した人は、男性 5.0%、女性 6.0%であった。

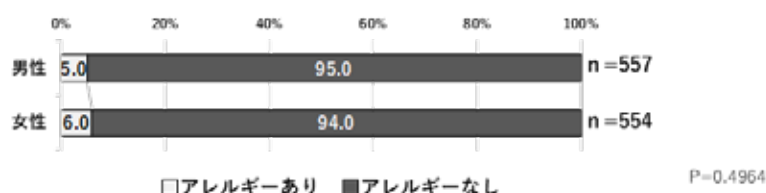


図 28 犬（動物）へのアレルギーの有無：男女

③犬好きか否か：男女

「犬は好きなほうだ」と回答した人は、男性 69.3%、女性 71.1%であった。

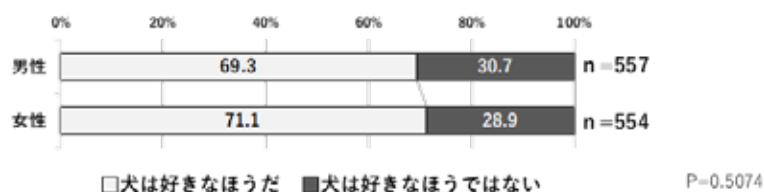


図 29 犬好きか否か：男女

考察：当該調査の回答者は、犬の飼育経験の有無、アレルギーの有無、及び犬好きか否かのいずれにおいても男女間で構成比に差がないことが確認された。

(2)「補助犬」に関する基礎知識：浸透状況の現状把握

認知度や理解度を尋ねる設問への回答バイアスをなるべく減らすため、「正誤は問いません」との注釈を提示した（以降同様）。

①「補助犬」に関する認知度（単一回答）

「補助犬」の名称や内容（どういうものか）に関し、どの程度知っているかを尋ねた。男女別結果を図 30 に、年代別結果を図 31 に、職業別結果を図 32 に示す。男女別・年代別、職業別のすべてにおいて統計的有意差がみられた。

a. 男女別

「名称も内容も知っている」と回答した人は、男性 36.3%、女性 44.0%であった。「名称のみ知っている」の男女差はほぼなく、「名称も名前も知らない」は男性 18.5%に対し、女性は 12.6%であった。

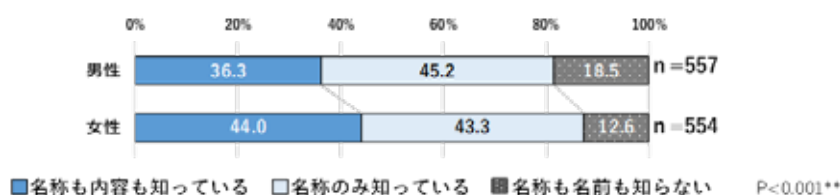


図 30 「補助犬」の認知度：男女別

b. 年代別

「名称も内容も知っている」の割合は、50代・60代の30%台に対し20代～40の方が高く、20代が47.3%で最も高かった。一方「名称も名前も知らない」においても20代が21.6%で最も高かった。「名称のみ知っている」は、50代・60代が過半数を占めた。

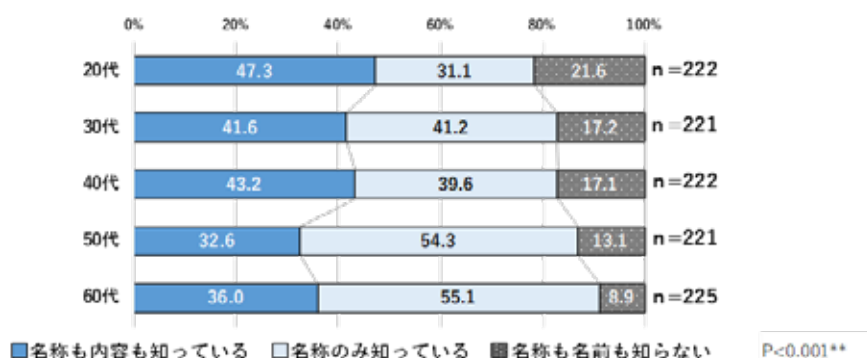


図 31 「補助犬」の認知度：年代別

c. 職業別

職業を尋ねる設問では選択肢を20種類用意したが、便宜上5カテゴリに分類した。専業主婦・主夫・学生・無職・その他以外は下記のようにまとめた。

※ 1 飲食業：会社員・派遣社員・パートなど、個人事業主、会社経営者、役員にて（飲食業）を選択した人

※ 2 対面・サービス業：同、(対面サービス業)を選択した人

※ 3 その他業種：同、(その他)を選択した人

※ 4 その他職業：公務員（教職員除く）、教職員、団体職員、研究職、医療関係者、士業（公認会計士、弁護士、税理士、司法書士など）

「名称も内容も知っている」は飲食業が最も高く 54.4%であり過半数であった。次いで対面・サービス業が 43.2%、その他職業が 41.2%であった。「名称も名前も知らない」はその他職業が 18.5%、専業主婦・主夫・学生・無職・その他が 18.6%であり、他の職業と比較してやや割合が高かった。

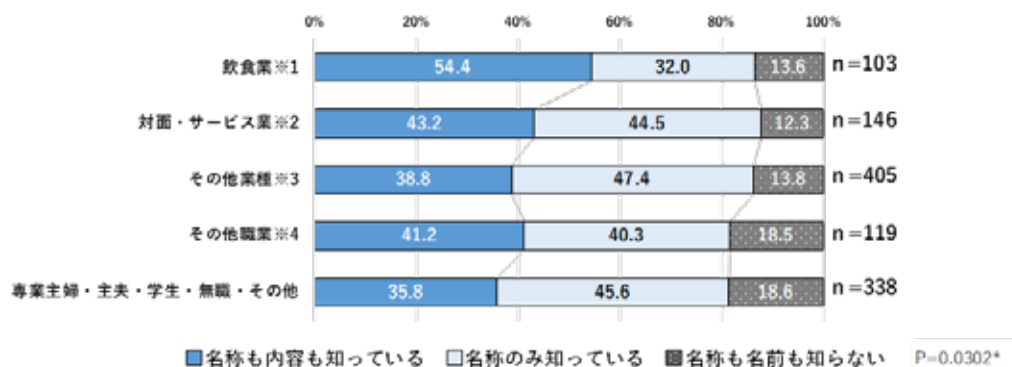


図 32 「補助犬」の認知度：職業別

考察：「補助犬」については、男性よりも女性の方が「名称も名前も知っている」割合が高い。女性は「名称のみ知っている」を合わせると 87.4%であり、男性の 81.5%と比較して補助犬への認知度が高いことがうかがえる。年代別では 50 代以上よりも 40 代以下の方が「名称も内容も知っている」の割合が高いが、「名称も名前も知らない」では逆転した。「名称も内容も知っている」と「名称のみ知っている」を合わせると、60 代が 91.1%で最も高く、20 代は 78.4%で最も低かった。20 代では知識の二分化がみられるが、60 代における全体的な認知度は高い。職業別では、飲食業従事者の認知度が高く、補助犬受け入れの場面に遭遇する機会が多いことがうかがえる。ただし、「名称も内容も知っている」の回答割合が最も低い専業主婦・主夫・学生・無職・その他でも 35.8%であり、「名称のみ知っている」と合わせると 81.4%であることから、職業の違いによる「補助犬」存在への認知度の極端な差はないといえる。

② 「身体障害者補助犬法」に関する認知度（単一回答）

次に、「身体障害者補助犬法」の名称や内容（どういうものか）に関し、どの程度知っているかを尋ねた。男女別結果を図 33 に、年代別結果を図 34 に、職業別結果を図 35 に示す。男女別での統計的有意差はみられなかった。一方、年代別、職業別では統計的有意差がみられた。

a. 男女別

「名称も内容も知っている」と回答した人は、男性 12.9%、女性 15.9%であった。「名称も名前も知らない」は男性 59.1%に対し、女性は 53.4%であった。

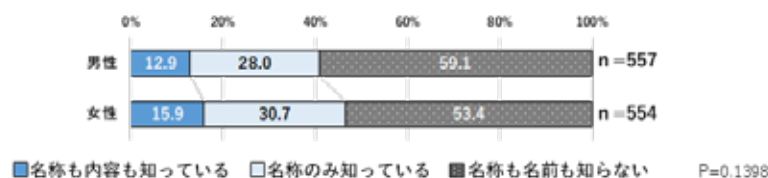


図 33 「身体障害者補助犬法」の認知度：男女別

b. 年代別

「名称も内容も知っている」と回答した人は、20 代が最も高く 21.2%、50 代が最も低く 7.7%であった。一方、「名称のみ知っている」は 20 代が最も低く 24.3%、50 代が最も高く 38.5%であった。「名称も名前も知らない」は全年代で過半数であり、30 代は 59.3%で最も高かった。

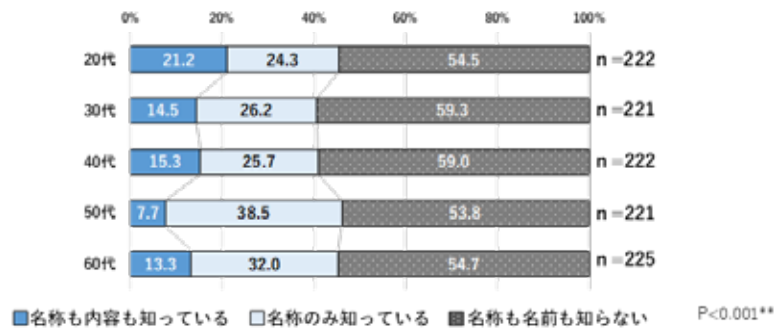


図 34 「身体障害者補助犬法」の認知度：年代別

c. 職業別

職業のカテゴリ分けは、「補助犬」の認知度と同様である。「補助犬」同様、「名称も内容も知っている」は飲食業が最も高く 31.1%であり、「名称のみ知っている」の 29.1%と合わせると 60.2%であり、職業別では最も認知度が高かった。その他の職業では「名称も内容も知っている」は 10%台に留まった。対面・サービス業でも「名称も内容も知らない」が 48.6%で半数近くを占め、その他業種、その他職業では 55%程度、専業主婦・主夫・学生・無職・その他では 65.1%であった。

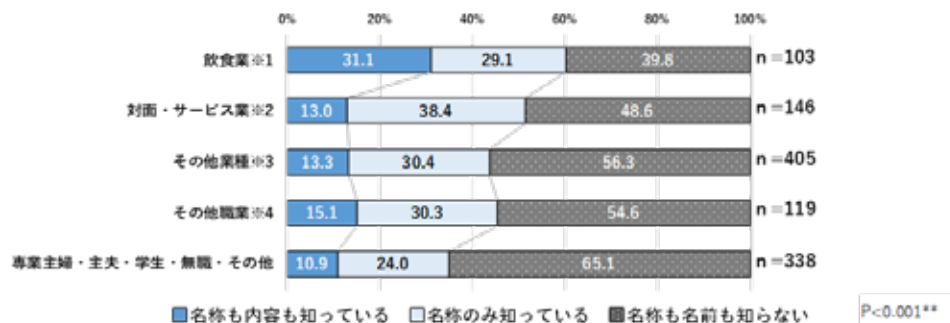


図 35 「身体障害者補助犬法」の認知度：職業別

考察：性別・年代問わず、「補助犬」と比較して明らかに認知度が低い。補助犬の周知だけでなく、その根拠となる法律が存在することやその中身についても周知が必要であり、その対象は限定されないことが裏付けられた。職業別では、「補助犬」同様飲食業従事者の認知度が高く、他の職業と比較して補助犬受け入れが法律に基づいていることが周知されていることがうかがえる。但し、「内容も知っている」層は 30%程度であり、決して高い数字とはいえない。補助犬の受け入れ場面が相対的に多いであろう飲食業、対面・サービス業の従事者に対する周知徹底が望まれる。また、その他職業の従事者、専業主婦・主夫・学生・無職・その他の層においても、店舗や施設において補助犬とそのユーザーに遭遇する場面があり得るため、受け入れが法律に基づくことは知る必要がある。

③「補助犬」の種類に関する認知度（複数回答）

「補助犬」の種類を確認するため、「どれも知らない・わからない」を含む 9 選択肢の中から「補助犬だと思ふ犬の種類」をすべて選択するよう依頼した。男女別の結果を図 36 に、年代別の結果を図 37 に示す。

a. 男女別

「正解」である盲導犬、介助犬、聴導犬の 3 種について、介助犬と聴導犬に男女間で有意差がみられた。盲導犬は男女共 80%近い認知率であるが、介助犬では男性 59.4%に対し女性 69.0%で 9.6 ポイント差、聴導犬では男性 44.7%に対し女性 50.7%で 6.0 ポイントの差があった。

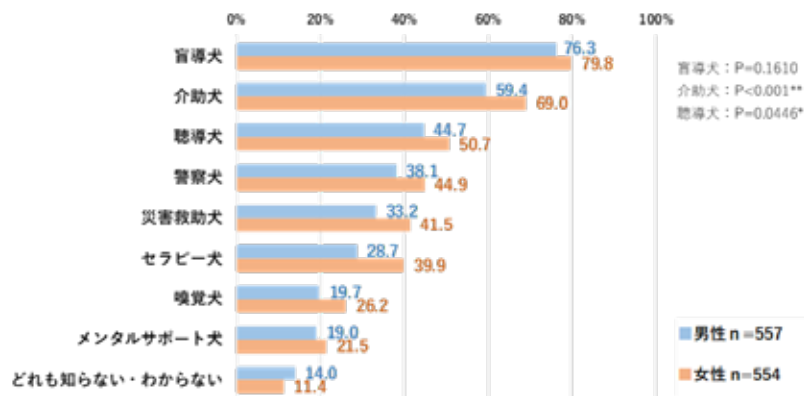


図 36「補助犬」の種類に関する認知度：男女別

考察：全体でも上位 3 位は盲導犬、介助犬、聴導犬の正解であったが、男女別でも同様であった。男女共に「盲導犬」の認知度は高い。「介助犬」と「聴導犬」は、男性よりも女性への認知が進んでいる状況がうかがえる。「図 32 補助犬の認知度：男女別」の結果との整合性もとれた結果といえる。全体の結果同様、男女別でも「盲導犬」、「介助犬」、「聴導犬」の順で認知度が下がっており、補助犬の種類による認知の程度に段階的な格差がみられた。なお、すべての犬種において選択率は女性の方が高いため、誤答率も女性の方が高かった。「警察犬」「災害救助犬」は女性回答者の 4 割以上が補助犬と誤認していた。

②年代別

「正解」である盲導犬、介助犬、聴導犬について、3 犬種共に年代間で有意差がみられた。盲導犬はどの年代でも最も認知率が高かった。しかし、年代が高い程認知率が高い傾向がみられ、40 代以上は 80% 台であり、50 代が 86.4%、60 代が 85.3% で特に高かった。一方 20 代は 60.8% で最も認知率が低く、60 代とは 24.5 ポイントの差があった。年代によるこうした傾向は介助犬、聴導犬も同様であり、20 代と 60 代の認知率の差は、介助犬では 20.6 ポイント、聴導犬では 14.1 ポイントであった。

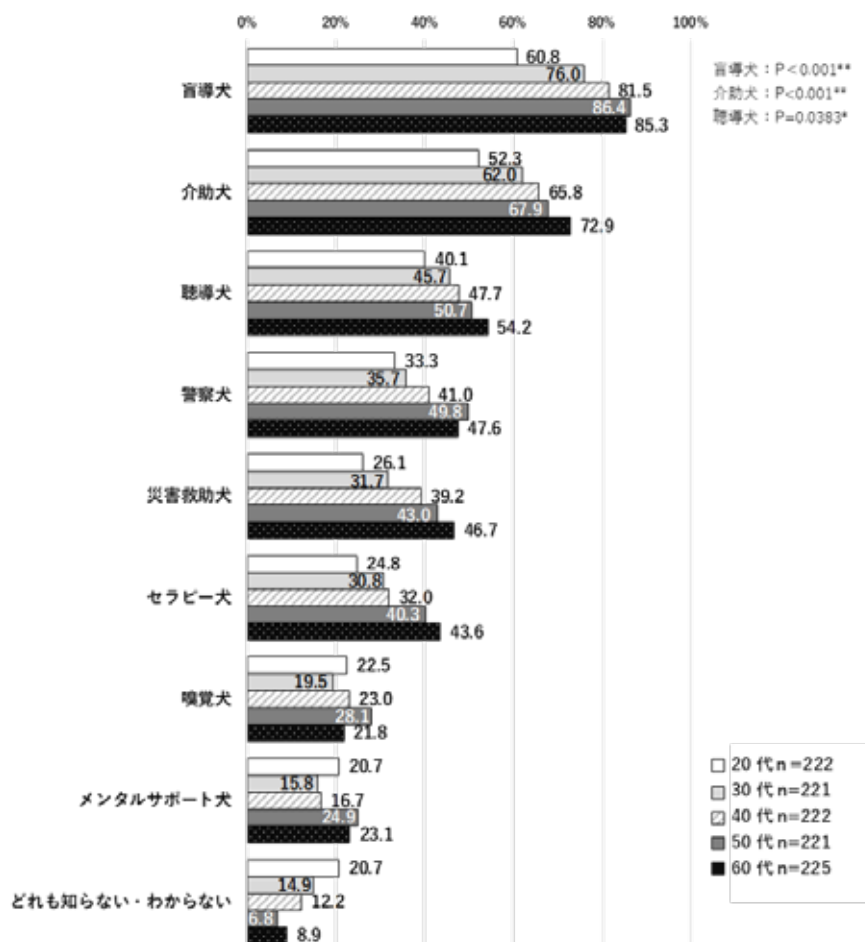


図 37「補助犬」の種類に関する認知度：年代別

考察：図 37「補助犬の認知度：年代別」の結果では、「名称も内容も知っている」と回答した人は 20 代が 21.2%で最も高く、60 代は 13.3%であり 50 代の 7.7%に次いで低かった。自分が「知っていると思っている」と、「正しく知っている」とは別であることがうかがえる。従って、「知っている」と思っている人こそ、正しい情報であるかどうかの確認が必要である。補助犬の受け入れ、社会での共生のためには、まずは補助犬の種類といった基礎的なことからの周知が必要であると考えられる。特に若年層への周知が求められる。

④「ほじょ犬マーク」の認知度と「補助犬ユーザー」の視認経験（単一回答）

「ほじょ犬マーク」を実際に見たことがあるか、「補助犬ユーザー（補助犬を連れた人）」を実際に見たことがあるかを尋ねた。「ほじょ犬マーク」視認経験の全体の結果を図 38 に再掲する。

a. 「ほじょ犬マーク」の視認経験：全体

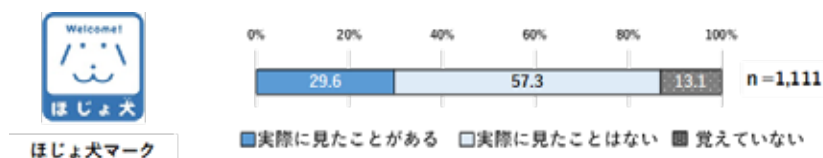


図 38 「ほじょ犬マーク」の視認経験：全体

b. 「ほじょ犬マーク」の視認経験：地域別

次に、居住地域により「ほじょ犬マーク」の視認経験が異なるか否かの分析を行った。サンプルの偏り防止と統計的信頼性確保のため、地域の統合を行い以下の 7 ブロックに分類した。結果を図 39 に示す。「ほじょ犬マーク」の視認性における地域間での統計的有意差はみられなかった。「実際にみたことがある」と回答した人は、最も高い北海道・東北では 33.6%、最も低い中国・四国では 24.7%であり、地域を問わず 25 ~ 30%の視認率であった。

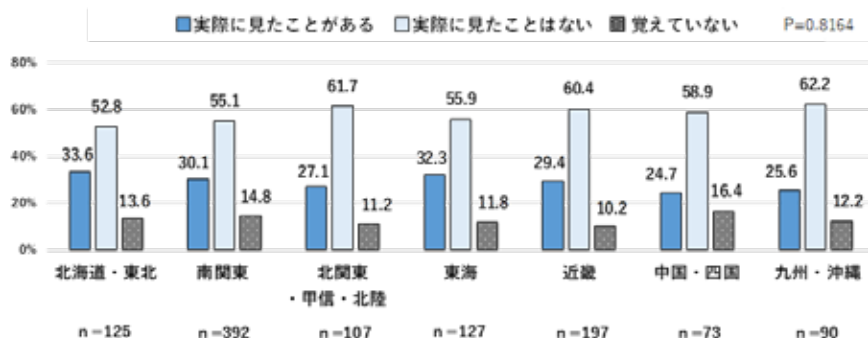


図 39 「補助犬マーク」の視認経験：地域別

c. 「補助犬ユーザー」との遭遇経験：全体

続いて、「補助犬ユーザー（補助犬を連れた人）」を実際に見たことがあるかを尋ねた全体の結果を図 40 に再掲する。

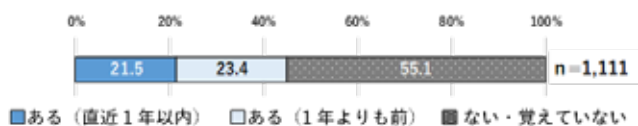


図 40 「補助犬ユーザー」との遭遇経験：全体

d. 「補助犬ユーザー」との遭遇経験：地域別

さらに、居住地域により「補助犬ユーザー」との遭遇経験が異なるか否かの分析を行った。地域の統合については「ほじょ犬マーク」と同様である。結果を図 41 に示す。「補助犬ユーザー」との遭遇率について、地域間での統計的有意差はみられなかったものの、「直近 1 年以内」では「ほじょ犬マーク」同様、北海道・東北が 24.8%で最も高かった。九州・沖縄が 12.2%で最も低い中国・四国も 12.3%とほぼ同率であり、北海道・東北より 12.5 ポイント程度低い。「1 年よりも前」では東海が 26.0%で最も高く、北海道・東北が 20.0%で最も低い。「直近 1 年以内」と「1 年よりも前」の割合を合計すると、南関東が 49.5%であり、他の地域に比べて遭遇率が高めであった。一方、「ない・覚えていない」はすべての地域で過半数を占めた。特に中国・四国は 64.4%、九州・沖縄は 63.3%で他の地域と比較し遭遇率が低かった。

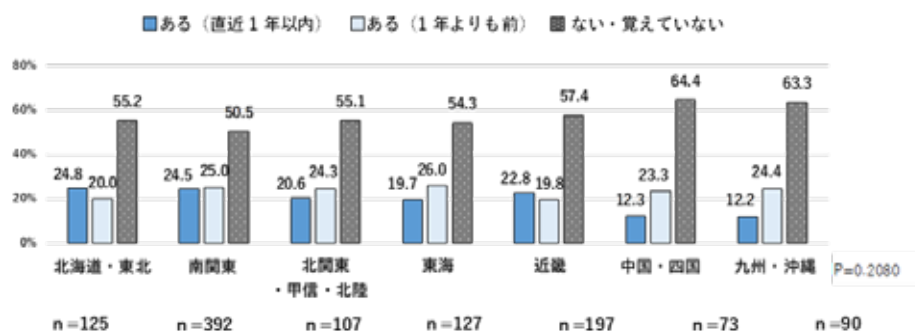


図 41 「補助犬ユーザー」との遭遇経験：地域別

考察：「ほじょ犬マーク」の視認経験について、大都市圏（南関東・東海・近畿）に偏ることも想定されたが、全国7ブロックでの差はあまりみられなかった。地域によらず一定の視認経験があり、地域による「ほじょ犬マーク」の掲示施設の大きな偏りは生じていないことがうかがえる。「ほじょ犬マーク」は全国共通マークであることも要因のひとつと考えられる。一方、「補助犬ユーザー」との遭遇経験は地域によりやや偏りがみられた。統計的有意差はないものの、最も人口密度の高い大都市圏である南関東（一都三県）での遭遇経験が他の地域と比較してやや多かった。厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部による「身体障害者補助犬実働頭数（都道府県別）令和7年10月現在」参）によれば、盲導犬総数768頭の内、28.6%に相当する220頭が南関東に集中している。これは、東海（岐阜・静岡・愛知・三重）の73頭の約3倍、近畿（滋賀・京都・大阪・兵庫・奈良・和歌山）の114頭の約2倍であることから、補助犬頭数の違いが表れていると推察される。また、「1年以内」の遭遇率が最も高い北海道の盲導犬頭数は37頭であり、地方の中では頭数が多いことが影響していると考えられる。しかしながら、全国において4割以上の市民に遭遇経験があることから、全国規模での受け入れマナー啓発が必要不可欠であるといえる。

参考）厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部：身体障害者補助犬実働頭数（都道府県別令和7年10月現在

<https://www.mhlw.go.jp/content/12200000/001572392.pdf> * 令和7年 = 2025年

掲載ページ：厚生労働省 身体障害者補助犬実働頭数 <https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000165273.html>

⑤ 「ほじょ犬マーク」と「補助犬ユーザーが利用できる施設」の関係性への理解度（単一回答）

「ほじょ犬マーク」と「補助犬ユーザーが利用できる施設」の関係性に関する理解度を尋ねた全体の結果を図42に再掲する。

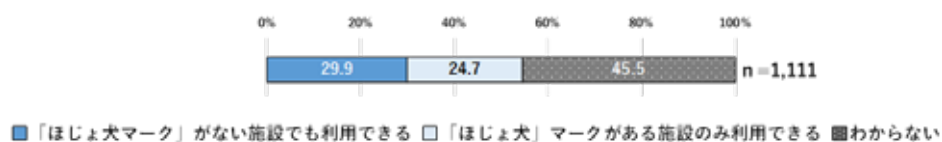


図 42 「ほじょ犬マーク」と「補助犬ユーザー」が利用できる施設の関係性への理解度：全体

① 「ほじょ犬マーク」の視認経験による理解度の違い

「ほじょ犬マーク」の視認経験の結果とクロス集計した結果を図43に示す。視認経験において、統計的有意差がみられた。選択肢のうち、正解は「ほじょ犬マークがない施設でも利用できる」であるが、「ほじょ犬マーク」を実際に見たことがある人の正解率は38.3%で3つの層のうち最も高かった。見たことがない人の29.8%より8.5ポイント、覚えていない人の11.0%より27.3ポイント高い。「わからない」については、実際に見たことがある人では21.9%で最も低かった。見たことがない人は約半数の49.9%、覚えていない人では約8割の79.3%が「わからない」と回答した。一方で、実際に見たことがある人でも「ほじょ犬マークがある施設のみ利用できる」の誤答率は39.8%であり、正解率とほぼ同等であった。

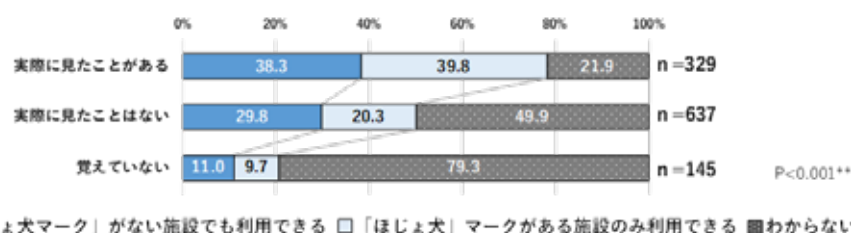


図 43 「ほじょ犬マーク」と「補助犬ユーザー」が利用できる施設の関係性への理解度：「ほじょ犬マーク」の視認経験別

b. 「補助犬ユーザー」との遭遇経験による理解度の違い

次に、「補助犬ユーザー」との遭遇経験の結果とクロス集計した結果を図 44 に示す。「ほじょ犬マーク」の視認経験とのクロス結果同様、統計的有意差がみられた。直近 1 年以内に「補助犬ユーザー」との遭遇経験がある人の正解率は 48.1% で最も高く、次いで 1 年よりも前が 41.9% であった。いずれも「ほじょ犬マーク」の視認経験がある人の正答率よりも高い。一方、遭遇経験のない人では 17.6% であった。「わからない」については、直近 1 年以内に遭遇した人では 19.7% で最も低かった。1 年よりも前の場合でも 32.3% であり、「ほじょ犬マーク」を見たことがない人よりも 17.6 ポイント低い。遭遇経験がない・覚えていない人では 61.1% であった。ただし、「ほじょ犬マーク」の視認経験同様、遭遇経験のある人でも「ほじょ犬マークがある施設のみ利用できる」の誤答率は直近 1 年以内では 32.2%、1 年よりも前では 25.8% であった。

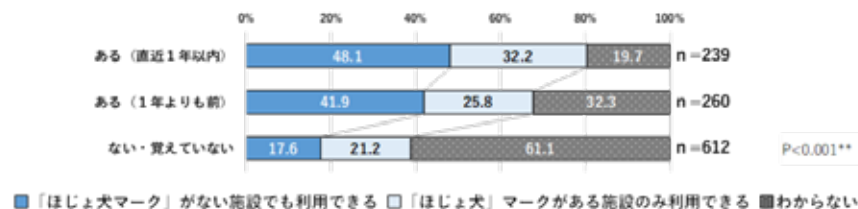


図 44 「ほじょ犬マーク」と「補助犬ユーザー」が利用できる施設の関係性への理解度：「補助犬ユーザー」との遭遇経験別

考察：「ほじょ犬マーク」の視認経験がある人、「補助犬ユーザー」との遭遇経験がある人の方が、ない人よりも正答率が高かった。また、「補助犬ユーザー」との遭遇経験が直近である方が正答率は高かった。これらの結果より、実際の経験が正しい理解に繋がると考えられる。また、「マーク」の視認経験よりも「ユーザー」との遭遇経験の方が正解率は高かった。両者間における検定は行っていないものの、単なる記号の視認経験よりも実在する生身の「人」への遭遇経験により、遭遇した補助犬ユーザーの施設利用状況が自身の経験として記憶に残り易い可能性がある。一方、「マーク」を見たかどうか覚えていない、或いは「ユーザー」との遭遇経験がない人の場合、「わからない」の割合がそれぞれ 80% 弱、60% 強であった。「マーク」については、全国の施設への貼付を推進する施策が必要である。但し、遭遇経験については各地域の補助犬頭数に差があり、相手が「人」であることから「遭遇経験」を増やすことは困難であり、施設利用に関する正しい情報を周知する施策が必要である。

c. 職業による理解度の違い

「補助犬ユーザー」を受け入れる施設側の理解度をみるため、職業とのクロス集計を行った。職業のカテゴリ分けは、「補助犬」の認知度と同様である。その結果を図 45 に示す。職業カテゴリ間にて有意差がみられた。正解率が最も高かったのは「その他職業」の 37.8%、最も低かったのは「飲食業」の 26.2% であった。「対面・サービス業」は 29.5% で「飲食業」に次いで正解率が低かった。「ほじょ犬マークがある施設のみ利用できる」を選択した誤答率は、「飲食業」が 35.9% で最も高く、次いで「対面・サービス業」が 29.5% であった。「わからない」は全体的に 40% ～ 50% 程度であった。

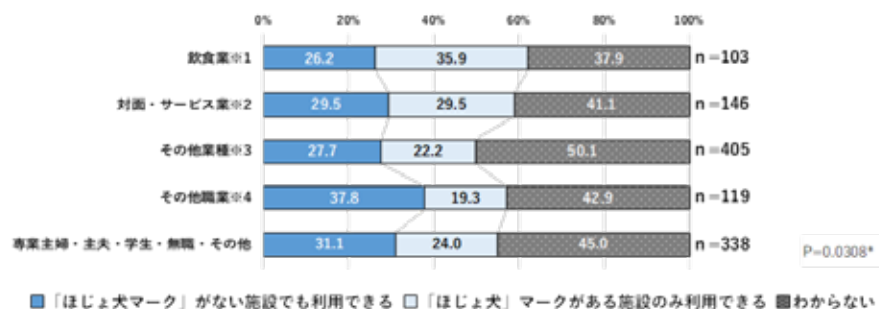


図 45 「ほじょ犬マーク」と「補助犬ユーザー」が利用できる施設の関係性への理解度：職業別

考察：補助犬の受け入れに関して最も理解しておく必要があると思われる「飲食業」及び「対面・サービス業」に従事する人の誤答率が上位 2 位を占めたことは、懸念点である。「図 33 「身体障害者補助犬法」の認知度：職業別」において、法律の名称も内容も知っているという回答した人の割合は「飲食業」が最も高く 31.1% であり、他の職業の 10% 台と比較しても群を抜いて認知度が高かった。しかしながら、現場での実践に結びついていないことが示された。「わからない」人への理解啓発・啓蒙活動はもちろん、「マークがある施設のみ利用できる」と誤認している人への周知も必要である。同時に、「ほじょ犬マーク」の意味について正しい情報発信、特に飲食業・対面サービス業に対して継続して行う必要があると考えられる。

（３）補助犬が「バリアフリートイレ」を利用することへの意識

公共施設に多く設置されている「バリアフリートイレ（多機能・多目的含む）」を実際に利用する補助犬ユーザーも多いことから、補助犬が「バリアフリートイレ」で排泄することに関する許容度や意識を調べた。

* 本稿では、国土交通省が使用する名称「バリアフリートイレ*」を使用する。

* 実際の設問では一般認知が最も高いと思われる「多目的トイレ」を使用し、「車椅子用トイレに、乳幼児用のベッドやオストメイト（人口肛門などを付けた人）用の流しなどを設置したトイレのこと。「多機能トイレ」や「バリアフリートイレ」とも言う。」と説明を付記した。

①補助犬が「バリアフリートイレ」を利用することへの許容度（単一回答）

補助犬が「バリアフリートイレ」を利用してもよいと思うかどうか、自身の考えに最も近いものを尋ねた全体の結果を図 46 に再掲する。「許容派」は 74.9%、「否認派」は 25.1%であった。

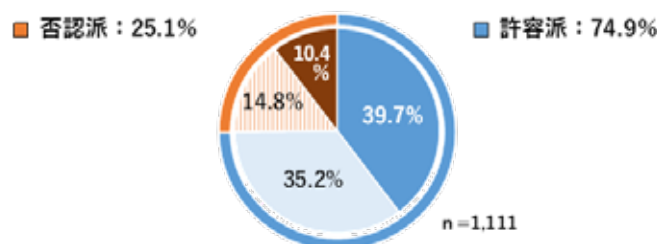


図 46 補助犬が「バリアフリートイレ」を利用することへの許容度：全体

a. 男女別

性別とのクロス集計の結果を図 47 に示す。「よいと思う」「どちらかといえばよいと思う」の割合に男女差はなく「許容派」は 75%程度であった。「どちらかといえばよくないと思う」「よくないと思う」ではそれぞれ男女差がややみられたものの「否認派」は共に 25%程度で差はみられなかった。男女間での統計的有意差もみられなかった。

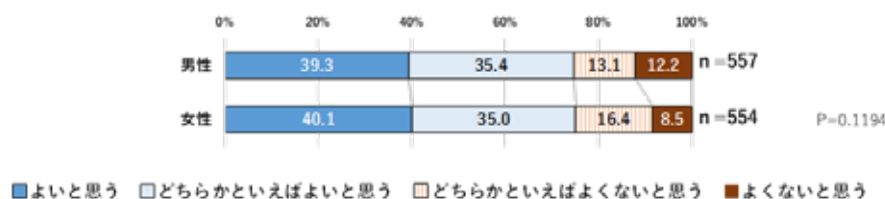


図 47 補助犬が「バリアフリートイレ」を利用することへの許容度：男女別

b. 年代別

年代とのクロス集計の結果を図 48 に示す。年代間では統計的有意差がみられた。「よいと思う」と回答した人の割合は、年代が上がるに従い高い傾向を示した。最も低い 20 代では 35.1%、最も高い 60 代では 42.7%であった。「どちらかといえばよいと思う」の割合は 60 代の 31.6%を除き概ね 35%前後であった。「よいと思う」と「どちらかといえばよいと思う」を合わせた「許容派」は、50 代が最も高く 79.6%、次いで 30 代の 76.0%であった。20 代は 70.3%で最も低かった。一方、「よいと思う」の割合が最も高い 60 代では「どちらかといえばよくないと思う」の回答率が 20.0%で最も高く、「よくないと思う」は 20 代が 16.2%で最も高かった。

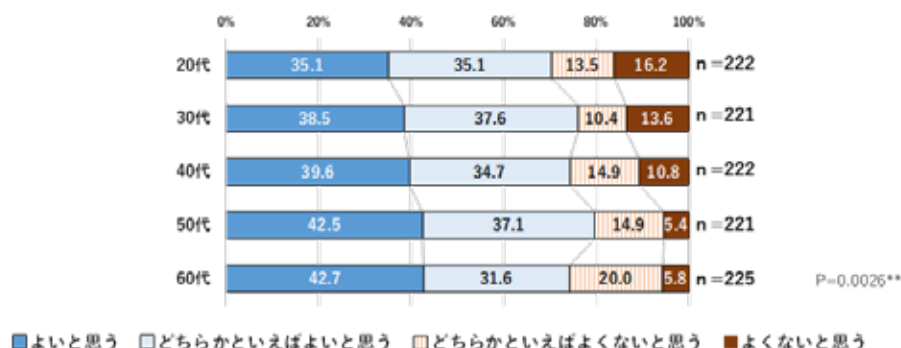


図 48 補助犬が「バリアフリートイレ」を利用することへの許容度：年代別

考察：補助犬がバリアフリートイレを利用することへの許容度は、性別よりも年代が関係していることが明らかとなった。「許容派」の中でも「よいと思う」と断言する層の割合は 20 代が最も低く、50 代以上と比較すると 7.6 ポイントの差がある。但し、「どちらかといえばよいと思う」と合わせると必ずしも年代順に沿った形ではなく、30 代と 60 代に「許容派」がやや多いことがわかる。20 代は「否

認派」の中でも「よくないと思う」と断言する割合が他の年代と比較して高く、50代以上とは10ポイント以上の差がみられ、若い世代での否認感情が強いことがうかがえる。

c. 犬との関係性や認識による違い

犬との関係性や認識により、補助犬がバリアフリースイレを利用することへの許容度が変わるかどうかを調べるため、「犬の飼育経験の有無」、「犬（動物）へのアレルギーの有無」、「犬好きか否か」とクロス集計の結果をそれぞれ図49、図50、図51に示す。アレルギーの有無を除き、統計的有意差がみられた。

d- 1. 犬との関係性や認識による違い：犬の飼育経験の有無

犬の飼育経験がある人では54.2%が「よいと思う」と回答しており、飼育経験のない人の31.7%より22.5ポイント高い。「どちらかといえばよいと思う」を合わせた「許容派」は、飼育経験ありでは85.1%を占めた。一方、飼育経験なしでは「どちらかといえばよいと思う」が16.5%、「よくないと思う」が14.3%であり、「否認派」が30.8%であった。

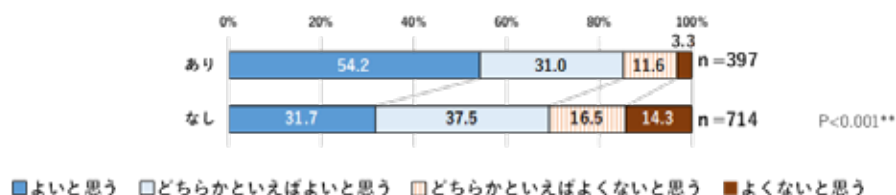


図49 補助犬が「バリアフリースイレ」を利用することへの許容度：犬の飼育経験の有無別

d- 2. 犬との関係性や認識による違い：犬（動物）へのアレルギーの有無

犬（動物）へのアレルギーがある人とない人の間に統計的有意差はみられなかったものの、「あり」と回答した人の方が「許容派」の割合が高く、80.3%であった。「よいと思う」は41.0%、「どちらかといえばよいと思う」は39.3%であり、いずれもアレルギーのない人よりも割合が高かった。

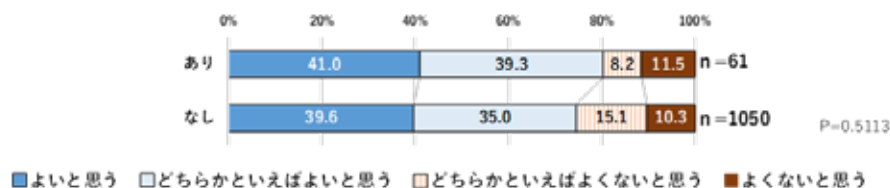


図50 補助犬が「バリアフリースイレ」を利用することへの許容度：犬（動物）アレルギーの有無別

d- 3. 犬との関係性や認識による違い：犬好きか否か

「犬は好きなほうだ」と回答した人では、「よいと思う」が47.8%、「どちらかといえばよいと思う」が34.2%であり、「許容派」が82.1%であった。「犬は好きなほうではない」と回答した人でも、「どちらかといえばよいと思う」が37.5%であり、「犬好き」よりも割合が高かった。但し「許容派」の中でも「よいと思う」と断言した人は20.5%であった。一方、「否認派」は「犬は好きなほうではない」人では42.0%であった。「犬好き」でも「否認派」は17.9%であったが、24.1ポイントの差がある。犬好きではない人では、「よくないと思う」と断言する人は23.9%であり、犬との関係性においては最も割合が高かった。

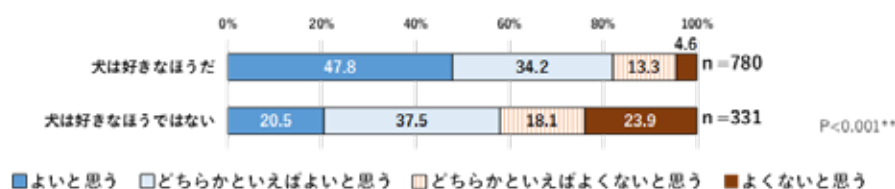


図51 補助犬が「バリアフリースイレ」を利用することへの許容度：犬好きか否か

考察：「犬の飼育経験あり」及び「犬好き」の方が、補助犬がバリアフリースイレを利用することへの許容度が高いことが明らかとなった。犬の飼育経験がある人では、犬の特性や習性を理解していると考えられ、「犬好き」の人では犬への親和性が高いと考えられることから、「補助犬」への理解や寛容度が高いことが想定される。また、犬の飼育経験よりも犬好きか否かの方が許容度に影響があることから、犬が好きではない人にとっては、人間用のバリアフリースイレを犬が利用することへの拒否感があることが考えられる。但し、犬が好きではない人でも「許容派」は58.0%であり、単なる「犬」ではなく「補助犬」であることを意識している可能性もある。

アレルギーの有無については統計的有意差がみられなかったものの、あり／なしでほぼ差がなく、むしろ「あり」と回答した人の方が「ない」と回答した人よりも、許容度がやや高かったことは興味深い点である。アレルギーを持つ当事者の方が、アレルギーに対して日常的にさまざまなことに気を配っていると考えられ、補助犬がバリアフリートイレを利用しても問題ないと判断したのか、或いは自身はバリアフリートイレを利用しないために問題ないと判断したのかは本調査では判別できないが、今後理由の探求が必要と考える。一方、アレルギーがないにも関わらず否認派である人は、「単純集計結果報告」でも示したように、回答者自身ではなく家族や他人のことを心配している可能性がある。そうした意味でも、アレルギーとの関係性の究明は今後の課題といえる。

（２）補助犬が「バリアフリートイレ」を利用することに対する否認理由（複数回答）

補助犬が「バリアフリートイレ」を利用することについて「どちらかといえばよくないと思う」「よくないと思う」と回答した人に対し、その理由を尋ねた。全体の結果を図 52 に再掲する。

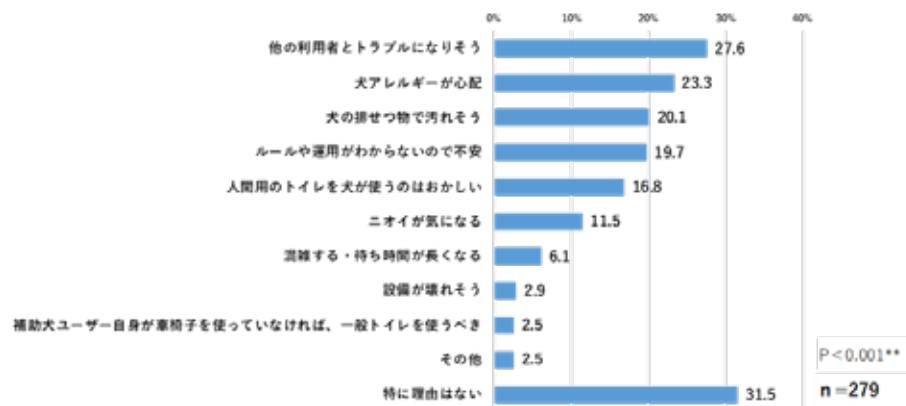


図 52 補助犬が「バリアフリートイレ」を利用することに対する否認理由：全体

a. 否認派の年代構成

* 否認派：補助犬がバリアフリートイレを利用することについて、「どちらかといえばよくないと思う」「よくないと思う」と回答した人

補助犬が「バリアフリートイレ」を利用することについて「どちらかといえばよくないと思う」「よくないと思う」と回答した「否認派」の年代構成を図 53 に示す。年代構成において統計的有意差がみられた。否認派は 279 名であり、回答者全体（1,111 名）の 25.1%であった。「図 53「補助犬」が「バリアフリートイレ」を利用することへの許容度：年代別」でも示したとおり、20 代の割合が最も高く 23.7%であった。次いで 60 代が 20.8%であり、50 代が 16.1%で最も低かった。20 代と 50 代の間には 7.6 ポイントの差がある。但し、年代に沿って否認率が上がることはなく、20 代の若年層、40 代の中年層、60 代の高年層での否認率が高めであり、30 代と 50 代が低めという結果であった。

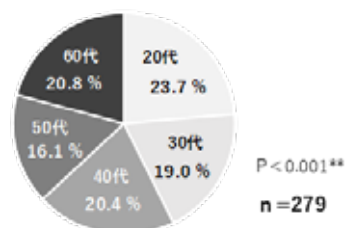


図 53 補助犬の「バリアフリートイレ」利用を否認する回答者の年代構成

b. 年代による否認理由の違い

否認理由と年代のクロス集計を行った。選択肢 10 項目の理由の内、「他の利用者とトラブルになりそう」、「ルールや運用がわからないので不安」、「特に理由はない」の 3 項目にて統計的有意差がみられた。それぞれの割合（全体・年代別）を図 50 に示す。これら 3 つの理由の内、全体では「特に理由はない」が 31.5%で最も高く、「他の利用者とトラブルになりそう」が 27.6%、「ルールや運用がわからないので不安」が 19.7%であった。「他の利用者とトラブルになりそう」は全体でも「特に理由はない」を除き 1 位であり、「ルールや運用がわからないので不安」は全体の中では 4 位であった。いずれの理由においても年代毎に大きなバラつきがみられ、「他の利用者とトラブルになりそう」は 50 代が 42.2%で最も高く、30 代が 18.9%で最も低かった。否認派が最も多い

20代では19.7%であり、30代と僅差であった。「ルールや運用がわからないので不安」は、60代が37.9%で最も高く、20代は9.1%で最も低かった。「特に理由はない」では、20代が50.0%で最も高く、次いで30代の39.6%であった。50代が15.6%で最も低かった。

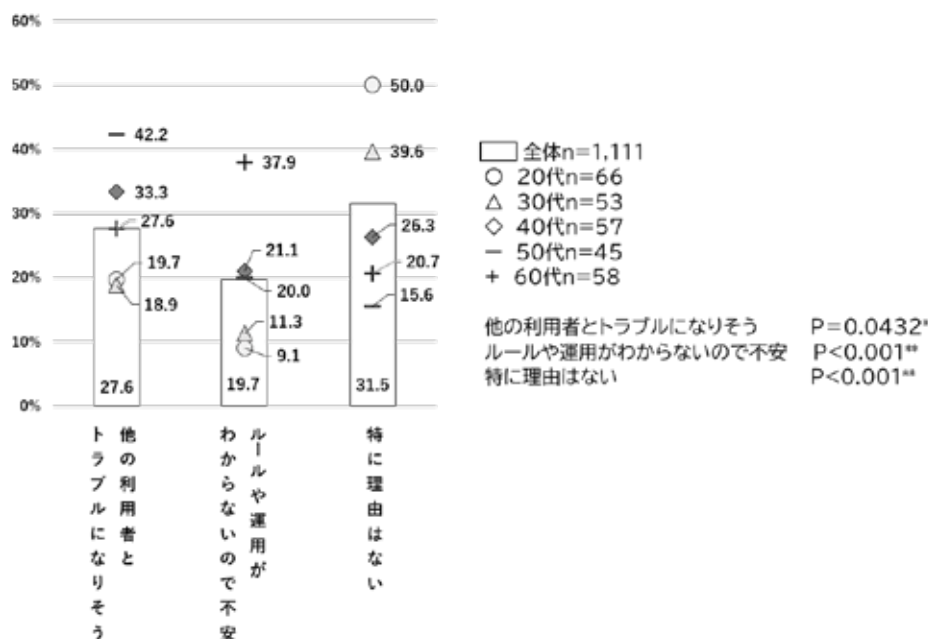


図 54 有意差がみられた否認理由の年代別割合

考察：他の利用者とのトラブルを懸念する人は50代が42.2%、ルールや運用への不安は60代が37.9%であり、他の年代と比較して突出している。特に20代、30代の若年層との差が大きい。逆に、特に理由はない人は20代が50.0%で突出しており、30代も39.6%で40代以上との開きが大きい。中高年層ではトラブルやルールといった具体的な懸念事項を抱えているのに対し、若年層は特に理由もなく感覚的に否認していることがうかがえる。中高年層に対しては具体的な対策等の情報提供、若年層に対しては補助犬が実際にバリアフリートイレを利用するケースがある事実の周知等が有効と考えられる。

c. 参考：「その他」の自由記述

参考として、「その他」を選択した回答者（7名）の記述内容を紹介する。＊大意を変えずに一部修正。

- ・「子ども使うのであまりよくないと思う。（50代・女性）」
- ・「衛生面が心配。（20代・男性／50代・男性）」
- ・「犬を自宅かつ室内で飼っている人以外は、人間と犬が一緒にトイレを使うことに心理的抵抗がある。また、衛生面は問題ないのか不安がある。（40代・男性）」
- ・「犬の排泄物は固く、下水道が詰まる原因となっている。（60代・男性）」
- ・「人間優先だから。（50代・女性）」
- ・「見たことがないから。（30代・女性）」

考察：衛生面への心配については、補助犬はユーザーにより衛生面も含めて管理されていることを周知する対策が有効と考えられる。一方、「犬と一緒に使うことへの心理的抵抗や不安」については、感じ方は人それぞれであるため配慮が必要と考えられる。但し、「動物」に対する直観的忌避感や通常のペットと同様に捉えていることからくる心理的抵抗・不安であることも想定され、補助犬の特性についての周知徹底が必要である。下水が詰まる原因となるか否かについては、流してよいかどうかのルールが自治体により異なり、現場の状況によっても変わってくるため明確な対策は困難である。しかし、補助犬ユーザーの多くは補助犬の排泄物を持ち帰っており、人間の使用済みオムツのように捨てられるしくみの整備が望まれる。

（４）「補助犬専用トイレ」に関する意識

調査実施時点（2026年3月）にて「補助犬専用トイレ」の設置事例が増えつつあることを踏まえ、専用トイレの必要性に対する意識、及びそのように思う理由を調べた。

①「補助犬専用トイレ」設置の必要性に関する意識（単一回答）

「補助犬専用トイレ」を設置することについてどう思うか、自身の考えに最も近いものを尋ねた。全体の結果を図55に再掲する。「必要派」は84.0%、「不要派」は16.0%であった。

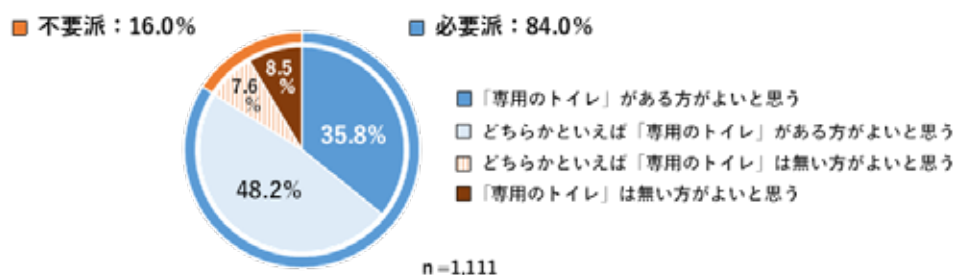


図 55 「補助犬専用トイレ」設置の必要性に関する意識：全体

a. 男女別

「専用トイレの必要性」について、性別（男女）とのクロス集計の結果を図 56 に示す。男女間にて統計的有意差がみられた。「ある方がよいと思う」の割合は、男性の 30.5%よりも女性の方が 10.7 ポイント高い 41.2%であった。「どちらかといえばある方がよいと思う」と合わせた「必要派」は、男性 81.3%に対し女性 86.6%であった。「どちらかといえば無い方がよいと思う」では男女差はほぼ無いが、「無い方がよいと思う」は男性 10.8%、女性 6.1%で 4.7 ポイントの差があった。

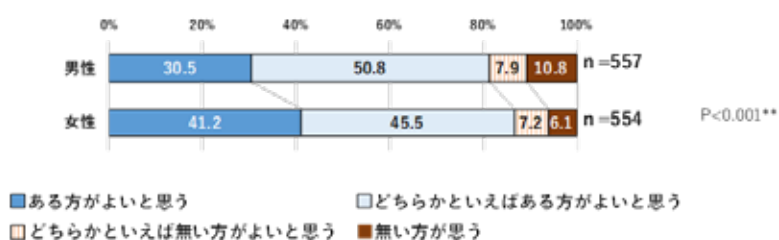


図 56 「補助犬専用トイレ」設置の必要性に関する意識：男女別

b. 年代別

年代とのクロス集計結果を図 57 に示す。年代間でも統計的有意差がみられた。専用トイレが「ある方がよいと思う」と回答した人の割合は、最も低い 30 代で 33.5%、最も高い 60 代で 39.1%であり、年代による大きな差はみられなかった。一方、「どちらかといえばある方がよいと思う」はややバラつきがみられ、最も低い 20 代の 40.1%と最も高い 60 代の 51.1%では 11.0 ポイントの差があった。「どちらかといえば無い方がよいと思う」、「無い方がよいと思う」を合わせた「不要派」は、最も高い 20 代では 23.9%、最も低い 60 代では 9.8%であり、14.1 ポイントの差があった。

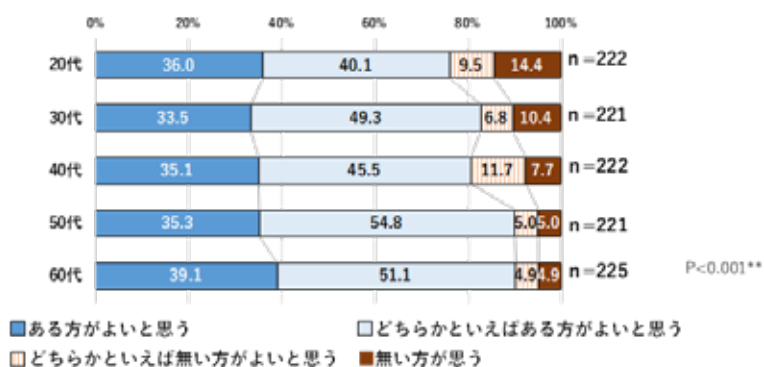


図 57 「補助犬専用トイレ」設置の必要性に関する意識：年代別

考察：「バリアフリートイレ利用への許容度」にて男女差はみられなかったが、「補助犬専用トイレの必要性」では差がみられ、男性よりも女性の方が「必要派」の割合が高い。但し、男性の「必要派」も 80%超であり、「どちらかといえば」も含め「ある方がよい」とする人の方が多数派である。年代別では、40 代以下よりも 50 代以上の方が「補助犬専用トイレ必要派」の割合が高く、50 代と 60 代は「必要派」が 90%超であった。一方、「専用トイレ」は「無い方がよいと思う」と回答した人の割合は、「バリアフリートイレの利用はよくないと思う」と回答した人と各年代において同程度であった。全体的に「バリアフリートイレの利用の許容派」よりも「専用トイレ必要派」の割合の方が高いが、両者共「許容派」、「必要派」が多数派である。しかし、それぞれに「否認派」、「不要派」も 2 割前後存在する。補助犬ユーザーにとって利用しやすい方を選択できる環境を整えることが必要であるが、そのためには、ハード整備に加え、一般市民に対する正しい情報の提供、及び「否認派」と「不要派」に対する周知・理解の徹底と合意形成が求められる。

c. 犬との関係性や認識による違い

犬との関係性や認識により、「補助犬専用トイレ」が必要性に関する認識が変化するかどうかを調べるため、「犬の飼育経験の有無」、「犬（動物）へのアレルギーの有無」、「犬好きか否か」とクロス集計の結果をそれぞれ図 58、図 59、図 60 に示す。アレルギーの有無を除き、統計的有意差がみられた。

d- 1. 犬との関係性や認識による違い：犬の飼育経験の有無

犬の飼育経験の有無に関わらず、専用トイレが「ある方がよいと思う」と回答した人は 35%前後であった。一方、「どちらかと言えばある方がよいと思う」は飼育経験のある人の 52.9%に対し、ない人では 45.5%であった。結果として、飼育経験のある人では「必要派」が 89.7%であり、経験のない人の 81.8%を 7.9 ポイント上回った。「どちらかといえば無い方がよいと思う」は飼育経験による差はほぼないが、「無い方がよいと思う」は飼育経験がない人では 11.9%、経験がある人では 9.6 ポイント低い 2.3%であった。

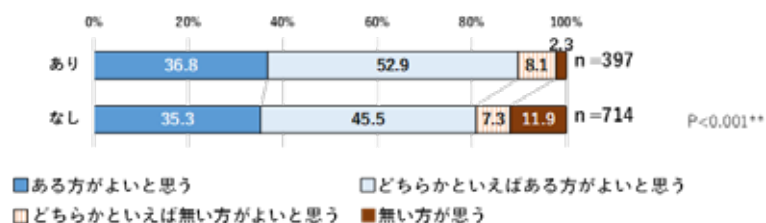


図 58 「補助犬専用トイレ」設置の必要性に関する意識：犬の飼育経験有無別

d- 2. 犬との関係性や認識による違い：犬（動物）へのアレルギーの有無

犬（動物）へのアレルギーの有無による統計的有意差はみられなかった。アレルギーの有無に関わらず、「専用トイレ」が「ある方がよいと思う」は 35%前後、「どちらかと言えばある方がよいと思う」は 48%前後であり、「必要派」は共に 85%前後と大きな差はみられなかった。「どちらかといえば無い方がよいと思う」はアレルギーがある人では 11.5%であり、ない人の 7.3%より 4.2 ポイント高いが、「無い方がよいと思う」は 6.6%であり、アレルギーがない人の 8.6%より 2.0 ポイント低かった。

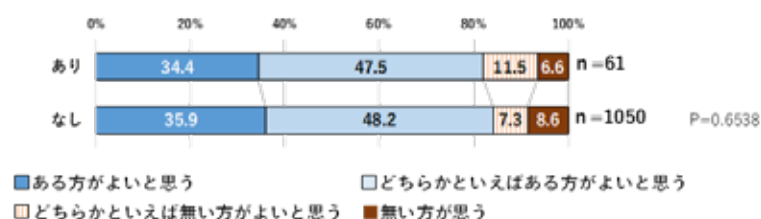


図 59 「補助犬専用トイレ」設置の必要性に関する意識：犬（動物）アレルギーの有無別

d- 3. 犬との関係性や認識による違い：犬好きか否か

犬好きか否かにおいては、統計的有意差がみられた。「犬は好きなほうだ」と回答した人では、「専用トイレ」が「ある方がよいと思う」が 37.1%、「どちらかといえばある方がよいと思う」が 52.3%であり、「必要派」が 89.4%であった。「犬は好きなほうではない」と回答した人の「必要派」は 71.3%であり、18.1 ポイント低かった。一方、「不要派」は「犬は好きなほうではない」人では 28.7%であった。「どちらかといえば無い方がよいと思う」は犬好きか否で大差はないが、「無い方がよいと思う」は犬好きの人では 3.6%であったのに対し、犬好きではない人では 19.9%であり、犬との関係性や認識の 3 項目中最も割合が高かった。

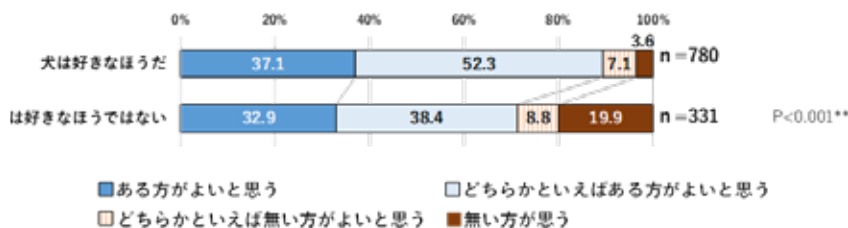


図 60 「補助犬専用トイレ」設置の必要性に関する意識：犬好きか否か

考察:「補助犬専用トイレ」については、補助犬のバリアフリートイレ利用への許容度と同様に、「犬の飼育経験あり」及び「犬好き」の方が「ある方がよい」と考える人が多いことが明らかとなった。犬の飼育経験がある人では、自身の経験上施設利用時に専用トイレがある方がよいと思っている人が多いことが、「犬好き」の人では、犬にとっては専用トイレがある方がよいと思っている人が多いこと

が考えられる。いずれの場合も「バリアフリートイレを利用してもよい」よりも、「専用トイレがある方がよい」の割合の方が高かった。アレルギーの有無については統計的有意差がみられず、あり／なしでの割合差もほぼなかったものの、アレルギーがない人の方がある人よりも「専用トイレ必要派」の割合がやや高かった。なお、補助犬専用トイレについて「どちらかといえば」も含めて「ある方がよい」と回答した理由、及び「無い方がよい」と回答した理由については「単純集計結果」を参照のこと。

（５）調査に関する意見・ご感想（自由回答・任意）

本調査に関する意見や感想などを任意の自由記述式で尋ねた。計 192 件の意見、感想を得た。単純集計結果にも掲載した内容を再掲すると、192 件の内、女性が 105 件（54.7%）であり、男性の 87 件（45.3%）より多かった。年代別では 20 代 25 件（13.0%）、30 代 23 件（12.0%）、40 代 40 件（20.8%）、50 代 59 件（30.7%）、60 代 45 件（23.4%）であり、30 代以下の若年層よりも 40 代以上の中高年層の方が多かった。本報告書では、寄せられた意見・意見についてアフターコーディングを行い、7 つのカテゴリに分類した。なお、一人の回答に複数の要素が含まれる場合があるため、各カテゴリの件数の合計は 192 件（100%）を超える。

* 「具体的な声」は、大意を変えずに一部修正した箇所がある。また、一部の意見・感想は「単純集計報告書」にも掲載済みである。

①全体総括

アンケートの回答対象であった 20 代～ 60 代の全年代から多様な意見が寄せられた。全体的に補助犬に対して協力的・好意的・支援的な声（「応援したい」、「温かく見守りたい」、「力になりたい」等）が多くみられた。

最も多かったのは、「新たな気づきの獲得と行動意識の変化」であった。当アンケートにより、回答者に対して「補助犬の排泄問題」への関心が呼び起こされ、大きな啓発効果をもたらしたといえる。同時に、「補助犬の排泄問題」がいかに一般市民の意識下に無いかかが明らかとなった。一方で、犬が苦手な人やアレルギーを持つ人もおり、衛生面への懸念もみられた。より多くの人が納得できるインフラ整備が求められる。また、「もっと知りたい」「質問の回答が知りたい」といった情報提供を求める声も多く、「補助犬の排泄に関する正確な情報」の周知や広報の必要性が示唆された。「継続的かつ効果的な広報・教育活動」が必要であり、それが補助犬とユーザー及び補助犬の排泄環境改善に繋がる第一歩であると考えられる。

②新たな気づきの獲得と行動意識の変化：90 件（46.9%）

「補助犬の排泄について考えたことがなかった」という意見が目立ち、アンケートをきっかけに新たな視点を得たという声が回答者の半数近くを占めた。調査結果で「わからない」や「特に理由はない」の回答が多かった項目の裏付けのひとつと考えられる。「排泄について考えたことがなかった」、「知らなかった」、「勉強になった」などの声が多くみられ、補助犬の排泄問題やそれに伴うユーザーの苦勞を初めて知った人が多かったことがうかがえる。また、「もっと理解を深めたい」、「もっと調べてみたい」などの前向きな声や、「どこで排泄しているのか気になる」、「どうしているのか気になった」などの情報提供を求める声も多くみられた。アンケート自体が回答者に新たな視点を提供する啓発の機会として機能し、さらに意識変容の効果をもたらしたことが示された。

<具体的な声>

- ・「補助犬に接する機会がなく、排泄について考えたことがなかった。考える機会になった。（20 代・女性）」
- ・「犬は好きだが、補助犬に関しては全く知らないことばかりだった。これを機に補助犬に関して学ぼうと思う。（50 代・男性）」
- ・「補助犬という名前、役割等、詳しく考えた事がなかった。特に「排泄」の事は、初めて知った。動物だから当然「排泄する」のは当たり前。どんなところでどのようにされているのか知りたい。（40 代・女性）」

③ 補助犬の受け容れや排泄環境整備に向けた期待と課題：48 件（25.0%）

排泄の課題解決に向けて、「みんなが快適に暮らせる街になるとよい」、「補助犬も生きやすく活動しやすい社会を願う」などの共生社会の実現を望む声や、「補助犬ユーザーも気兼ねなく、補助犬も落ち着いて排泄できる場所が明確にあれば、安心して外出できそう」、「補助犬用の排泄場所があってもよい」などの専用の場所の整備に関する声が多くみられた。一方で、「明確なルール」や「犬が苦手な人に対する理解を求める努力」を求める声など課題提示もみられた。その他、補助犬を育成する学校の増設を望む声や、補助犬が増えることへの賛同を示しつつもコストを心配する声など多様な意見があり、実社会で直面するハードルの高さが浮き彫りとなった。

<具体的な声>

- ・「補助犬が、もっと活躍してくれると、助かる人が増えると思う。補助犬も、生きやすい（活動しやすい）社会になることを願う。（50 代・女性）」
- ・「ユーザーの長時間の外出時にはトイレに困る事になると初めて思った。ユーザーも気兼ねなく、補助犬も落ち着いて排泄出来る場所が明確にあれば、安心して外出できそうと思った。（40 代・女性）」

- ・「補助犬が受け入れられやすい環境がもっと整備されると良いと思う。(40代・男性)」
- ・「色々大変だと思うが、明確にルールがある方が良い。(20代・男性)」
- ・「犬嫌いな人、動物嫌いな人もいるので、すべての人の理解を得るのは相当の努力が必要だと思う。(60代・男性)」

④ 共生社会に向けた教育・周知の必要性、広報活動への要望：30件（15.8%）

「もっと周知して理解を深めるべき」、「広く認知されるべき」、「メディアで取り上げてほしい」など、社会全体への教育や広報の必要性、啓発活動を求める声がみられた。現状の社会において、補助犬に対する理解や認識が不足していると感じていることがうかがえる。具体的な施策として、テレビ（ニュースやCM）などのメディアを活用した情報発信、掲示板・広告の活用、基本的なルールの啓発機会を増やすべきなどの提案があった。

<具体的な声>

- ・「補助犬も利用者も周囲に気兼ねすることなく共生出来る社会であり、弱者や補助を必要としている方達に人として当たり前の手差し伸べることが出来る私達でありたい。そのための環境整備や社会的認知を向上させる活動はもっとするべきと思う。(60代・男性)」
- ・「どうしても動物が苦手な人もおり、小さい子どもは接し方が分からずむやみに怖がることもある。基本的なルールを啓発する機会が増えると良いと思う。(50代・女性)」
- ・「このようなシステムがある事を広く認知されるべく、促してほしい。(40代・男性)」

⑤ 動物愛護的視点と情緒的理解：17件（8.9%）

補助犬への感謝や、「頑張ってほしい」、「偉いと思う」など応援の声のほか、「可哀想」という声もあった。また、電車の中や街中で実際に見かけた経験から「よく馴けられていて感心する」など感嘆の声もみられた。

<具体的な声>

- ・「偉いと思う。私は何もできないが、温かく見守りたい。(40代・女性)」
- ・「盲導犬を見るととても応援したくなる。(20代・男性)」
- ・「朝の通勤電車で盲導犬を連れた人が降りるのが見えた。あんなに混んでいる電車で犬がいると気づかないほど大人しくしていたことに驚いた。(60代・女性)」
- ・「自分が知らないことが思っていたより多かった。犬の排泄が体調によって管理されているのは少し悲しいが、人のために働く犬は立派だと思う。(30代・女性)」

⑥ 動物福祉的視点：12件（6.3%）

「アニマルウェルフェア（動物福祉）の観点でも重要」、「犬が我慢することがないような環境にしてほしい」など、補助犬自身のストレス軽減や快適な生活環境（動物福祉）を気遣う意見がみられた。また、補助犬を必要とするユーザーへの理解だけでなく、「人間のために働く犬」に対する配慮や敬意を表す声もあった。

<具体的な声>

- ・「障害のある人の目や体の一部として活躍するのだから、補助犬の住みやすい世の中になるとよい。(60代・女性)」
- ・「補助犬のトイレ利用は、アニマルウェルフェアの観点でも重要と思った(60代・男性)」。
- ・「デジタル技術も併用し、犬の負担が少しでも減るとよいと思う。(30代・女性)」
- ・「人を補助しているのだから、犬に優しい環境が大事。補助されている人も安心ではないかと思う。(50代・女性)」
- ・「補助犬の引退後は、最後まで幸せに暮らしてほしい。(50代・男性)」

⑦ 衛生・ルール面での懸念と現実的視点：9件（4.7%）

衛生面やルールを心配する声があり、そうした点から補助犬専用トイレがあった方がよいという意見や、補助犬の利用頻度により専用トイレの有無を検討してもよいのではないかと意見もみられた。また、場所や予算、アレルギーがある人との共存をどうすべきか、という問題提起もあった。

<具体的な声>

- ・「利用者が少ないため、専用トイレを作ることに場所や予算などの問題があり、多くの人の理解を得ることは難しいだろう。しかし、障害がある人も社会にどんどん出ていけるようになってほしい。(50代・女性)」
- ・「一般のトイレの利用は、アレルギーの方ももちろんだが、寛大に受け止める人ばかりではないため、別のトイレの設置が必要と感じる。(50代・女性)」

- ・「補助犬の存在は知っていたが、街中で実際に見かけることがない 補助犬専用のトイレは取り入れてもよいと考えており、人への配慮や衛生的な面を考えてもアリだと思う。(20代・男性)」
 - ・「赤ちゃんがいるため多目的トイレを使うことも多く、補助犬と共同だと嫌だと感じてしまった。世の中のみんが使いやすいようにするのは難しいと思った。(30代・女性)」
- (8) その他：15件(7.8%)
- 「良いアンケートだと思う」などアンケートに対する好意的な声の他、「わからない」「考えがまとまらない」、「難しい」という声もみられた。

第 3 章 課題整理と補助犬整備方針の検討

3.1 そのトイレ、補助犬は使えますか？一犬の行動と心理から読み解く排泄環境の課題

3.1.1 調査の背景と目的

日本では公共施設や公共交通機関において「補助犬トイレ」の整備が進められている。公共施設や駅、空港などに、「補助犬専用トイレ」が設置されることがあるが、実際の利用状況やユーザーのニーズ、犬の行動学的観点については十分に整理されていない。本報告書では、犬の行動学的観点と、障害者の心理的な観点から、補助犬ユーザーへのインタビュー、盲導犬訓練事業者へのインタビューを通して補助犬の排泄やトイレの現状と課題を整理することとした。

3.1.2 日本における補助犬の排泄方法の現状

1. 盲導犬におけるワンツーパーベルト（排泄ベルト）の使用

日本の盲導犬は「ワンツーパーベルト（排泄ベルト）」を使用して排泄させる方法が広く普及している。この方法では、「犬の排泄物で地面を汚さない」「屋内でも犬の排泄処理が可能」「犬に排泄をさせる場所の選択肢が増える」という利点があり、清潔で犬を含むペットの排泄マナーについて厳しい日本では、適した方法となっている。2.2.2でも、対象者となった盲導犬ユーザー全員がワンツーパーベルトを使用していた。また、盲導犬ユーザーも「ワンツーパーベルトが使えるなら、補助犬専用トイレは必ずしも必要ではない」と考えている可能性があるようだ。盲導犬の排泄場所に関しては、ユーザーの居住環境（都市部または地方）、生活リズム、ニーズでも変わってくるため、一概にすべての盲導犬ユーザーが専用トイレを必要としているわけではないことも想定される。

2. バリアフリートイレ（多目的トイレ）の利用

外出している補助犬とそのユーザーにとって、利用頻度が高い場所の1つとして、バリアフリートイレがあげられている。

その理由として

- ・スペースが広い（犬が排泄するためには一定のスペースが必要）
- ・ユーザーと犬と一緒に入ることができる
- ・ユーザー本人も一緒に用が足せる
- ・水を使用できる（ユーザーが手を洗う）
- ・個室になっているので雨風や人の目を避けられる、等があげられる。

しかし、一方で以下のような問題もある。

- ・他の利用者や一般の人から理解されにくい
- ・他の障害者との利用競合（特に車いすユーザー）

現実問題として、盲導犬と一緒にバリアフリートイレから出てきた際、周囲から非難の目を向けられたり、車いすユーザーと盲導犬ユーザーが口論になったりするなどの問題が起きている現状がある。上記の問題に対しては、バリアフリートイレの個数を増やす、多目的トイレを使用する必要のない人はなるべく使わないことなど、一般の市民への周知徹底は必要だが、今後のバリアフリー社会への大きな課題となっている。

3. 補助犬専用トイレ設置の現状と問題

（1）設置の現状

公共施設、空港、駅、大型施設などで「補助犬専用トイレ」が設置されている例があるが、これは「障害者に優しい（＝障害者が利用しやすい）施設」の象徴として設置されるケースが多いと考えられる。障害者にとって利用しやすい施設を考えることは、成熟した社会として好事例ととらえられる。

（2）補助犬トイレの問題点

しかし、設置された補助犬トイレの中には、設置の際に専門家（補助犬の排泄や障害者のニーズを理解している人）に相談していなかったり、当事者である補助犬ユーザーの意見を徴収できていなかったりなどの問題がある。

その結果、一部の補助犬専用トイレでは

- ・ユーザーのニーズを反映していない
- ・ユーザーが使いにくいと感じて実際には使われていない
- ・犬が排泄しにくい設計、環境になっている、などの問題が指摘されている。

また、補助犬専用のトイレは頻繁に使用されるものではないため、一部の施設では保安上、常に施錠せざるを得ず、ユーザーが使用したいときにカギがかかっている施設や、警備員に声をかけなければ使えない施設、インターホンなどで使用許可を得なければいけない施設もある。

トイレの設備が準備されていても、視覚に障害がある盲導犬ユーザーの場合は、インターホンの場所がわからない、聴覚障害がある聴導犬ユーザーの場合は、音だけのやり取りとなるインターホンでは、コミュニケーションが取れないため、結局利用することができないといった問題もある。実際に利用するユーザーの視点が欠けているので「設置されているが実際には使えない設備」になっている例が散見される。

（３）犬の行動学的特性が考慮されていない

ここでは、特に補助犬トイレ内の設備の材質について考える。補助犬トイレが配置されていても、実際は以下のようなものになっている場合もある。

- ・不自然な床材（ステンレスや傾斜があるなど）で、犬が排泄を嫌がるような材質が使われている
- ・介助犬ユーザーが犬の排泄物を片づけやすいように高さのある台が置かれているが、上記と同じく素材（ステンレス等）の問題で犬が登りたがらない
- ・トイレ自体が手術室のような作りで音が反響するなど犬が苦手な環境になっている、などの場合があり、補助犬が排泄を嫌がる、できない、しない設備になってしまっている。

（４）実際には利用ニーズが高くない

日本では、盲導犬の場合はワンツーベルトの利用が普及しており、介助犬や聴導犬の場合もペットシート等を利用するため、多目的トイレで犬に排泄をさせることも多く、現在のような設備の補助犬専用トイレの必要性は、実際には当事者には限定的だという可能性がある。ユーザーや補助犬にとって、使い勝手の悪いトイレであれば利用することは控えてしまう。

４．補助犬の排泄に関する社会的誤解

補助犬の排泄方法について、特に盲導犬は、一般市民から「ワンツーベルトを使用するのは犬がかわいそう」という意見がきかれることがある。一般の人が見ると、犬にベルトをつけて、直接ビニールで排泄物をキャッチする方法は見慣れていないため、「犬の自然な行動に反する」「動物愛護ではない」とみられてしまう。

しかし実際には

- ・ワンツーベルトを使用した排泄は訓練された行動である
- ・適切にトレーニングされていて、犬に苦痛を与えるものではない
- ・多くの盲導犬が問題なく適応している、という実態がある。

国内で盲導犬を育成している A 訓練事業者にて訓練士にワンツーベルトの訓練方法を聞いた。訓練方法については図 61 の通り。

図 61 の方法は、犬の行動学における順化の手順となる。また、子犬の頃から楽しく教えており、順化の手順を正しく利用しているため、犬がベルトをつけて排泄する行動に関しては、何ら問題もストレスもないと考えられる。また、訓練士も、犬の個性やユーザーの生活をマッチングしてペアを組んでいくため、犬に負担をかけるような排泄訓練は行われていないことが分かった。

今回の A 協会へのインタビューを通して、ワンツーベルトを使うことで犬もユーザーも必要な時に必要な場所で排泄ができる、現在の日本の環境に合ったシステムが構築されていると考えられる。

５．今後の補助犬トイレ整備の方向性

バリアフリートイレの活用は、ユーザーにもわかりやすく、使いやすいが、社会的な認知が低く、問題になっていることが分かった。無理に補助犬のためだけにトイレを作るより、バリアフリートイレの数やアクセス方法を増やし、補助犬同伴の障害者が使用することを表示すること一つの案となる。



図 61 ワンツーパーベルトの訓練方法

3.2 補助犬トイレ整備方針の検討（案）

1. 整備の背景と目的

身体障害者補助犬（盲導犬・介助犬・聴導犬）は、身体障害者補助犬法に基づき公共施設等への同伴が認められている。本整備の目的は、補助犬ユーザーが周囲に気兼ねなく、安全・衛生的に排泄管理を行うことができる環境を整えることで、障害者の社会参加と施設利用の利便性を向上させることにある。

補助犬ユーザーにとって、外出時の困難のひとつに「補助犬の排泄」がある。犬は命ある生き物なので、排泄もするし、食事も必要である。更に、個体ごとにタイミング、回数、頻度等、それぞれ違うので、ユーザーは合同訓練時にその個体の行動管理・衛生管理に関する教育をしっかりと受けることで、社会参加時のユーザーとしての管理責任を果たすことができる。各ユーザーは、個々のパートナーである補助犬の体調に合わせて、1日のスケジュールを管理しており、排泄物等の処理をする際には、障害に応じた使いやすい道具や手法を工夫している。よって、社会参加時にむやみに汚したりすることではなく、排泄後の処理も自らできるようになり、認定試験時にはその点も確認され、合格して初めて社会参加の権利を得ることができる。そういう意味では、保護者としての要素も強く、幼児連れの外出時の授乳室やおむつ換えと同様に、社会の中に必要な空間と言える。

社会に安心して利用できる補助犬の排泄環境が準備されていることは、補助犬ユーザーの社会参加の促進につながる。しかしながら、2.2.3の補助犬が排泄する場所に関する認知度では、「わからない」42.8%、「多目的トイレ」16.3%であった。また、2.2.2ではバリアフリートイレ（多機能・多目的含む）の利用は6割超だったことから、まずは、補助犬ユーザーと補助犬、補助犬の排泄に対する社会の理解も必要不可欠となると考えられる。

2. 整備の基本理念：正しい理解と「当たり前」の受け入れ

本整備において最も重要なのは、コストをかけて設備を整えることではなく、施設や一般市民が補助犬の排泄について正しく理解し、「当たり前」に受け入れる」という姿勢を具体化することである。

- 選択肢としての整備：補助犬専用トイレは「選択肢の一つ」であり、補助犬にここでの排泄を強制するものではない。バリアフリートイレや屋外の適切な場所等、ユーザーが状況に応じて最適な場所を選択できる環境が必要である。
- 「歓迎」の意思表示：立派な専用設備がなくても、「補助犬ユーザーを歓迎している」という施設の意味が伝わるのが重要である。その施設側の理解の姿勢こそが、共生社会への第一歩となる。例：駐車場の片隅に看板を立て、排泄物処理用のごみ箱を用意する等

3. 受け入れ側が検討できる具体的な選択肢

施設規模や予算に応じ、以下の「段階的な環境整備」を検討することが望ましい。

(1) 基本的な対応（即時実施可能な配慮）

- バリアフリートイレの活用：室内での排泄（ペットシート利用等）に対応できるよう、十分なスペースのあるバリアフリートイレを案内する。入口に補助犬ステッカー等の掲示があることで、周囲が認識しやすくなり、安心して使用が可能になる。
- 敷地内の既存スペースの提供：屋外の植え込みや、駐車場等の排水溝近くのアスファルト敷きなど、清掃が容易で雨が降り込まない、人目が気になりにくい場所（簡単な囲いがある等）を「排泄可能なエリア」として案内する。こうした既存設備の活用だけでも、ユーザーにとっては大きな安心材料となる。



写真 46：ステッカー貼付の例 / 横浜役所



写真 47：練馬区役所敷地内・屋外

(2) 発展的な整備（補助犬専用トイレの設置）

基本的な対応に加え、さらに利便性を高めるための「専用トイレ」を整備する。

補助犬の排泄方法については以下の通り。

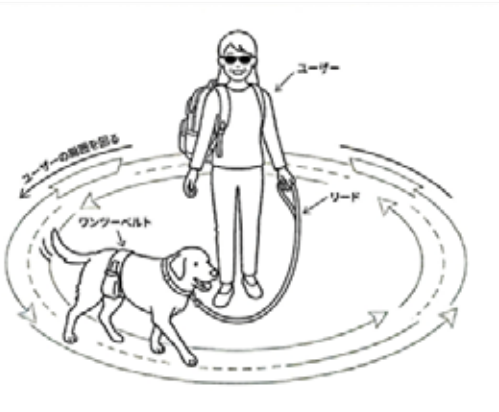
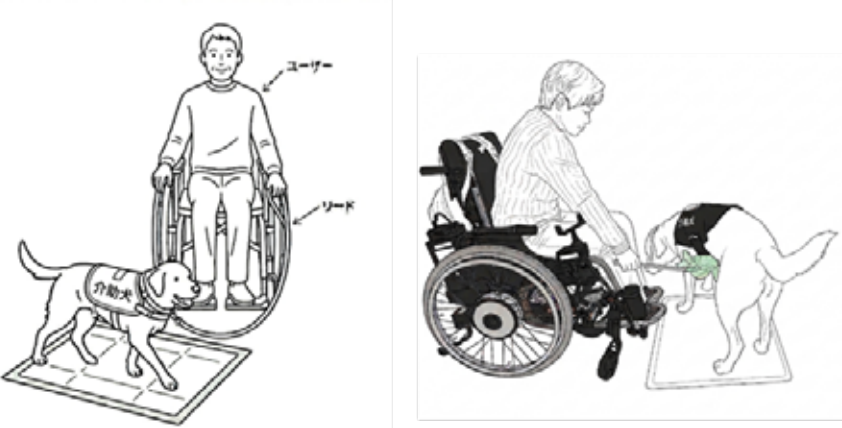
盲導犬	 排泄物を回収しやすくするためにワンツーベルトを使用した排泄方法を行うユーザーが多い。盲導犬はユーザーを中心に周囲を旋回して排泄をする。
介助犬	 個々の障害に合わせて、ペットシートや排泄物キャッチャーを利用する。
聴導犬	 屋外では土のある植え込みなどを利用する。聴導犬の排泄後は水をかけるなどの処理を行う。屋内でペットシートを使用して排泄させることもある。

図 62 補助犬の排泄方法

- 動線とスペース：車椅子使用者が容易にアクセスでき、旋回可能なスペースに加えて、犬が排泄行動をとる際に十分動けるスペースを確保する。
- 犬に優しい床材：清掃がしやすく犬が滑りにくく、安心して足を踏み出せる素材（人工芝やコンクリート（防汚コート済み）、屋外用防滑シート（防水）等）を選定する。ステンレスや大きな隙間のあるグレーチングは、犬が恐怖心や怪我のリスクを感じるため推奨しない。



写真 48 人工芝のある補助犬トイレの例：京王プラザホテル

- 付帯設備：手洗い、排泄物が捨てられるゴミ箱（防臭タイプのオムツ用ゴミ箱が望ましい・足踏み式は車椅子使用者が使えないため不可）、リードフック、身支度の際に両手を空けられる荷物置き場（カウンター等）、清掃用シャワーを設置する。



写真 49 手洗いがある補助犬トイレの例：横浜市役所



写真 50：清掃用シャワーがある補助犬トイレの例：左 / さいたま新都心駅 右 / 熊本空港

4. 障害特性に応じたアクセシビリティ

- 視覚障害（盲導犬）：設備配置を案内する音声案内（音声ガイド）や点字案内
- 肢体不自由（介助犬）：車椅子から操作しやすい高さのスイッチ、自動ドア、近接した動線レイアウト
- 聴覚障害（聴導犬）：インターホン等の連絡手段において、音声のみに頼らない視覚的情報（液晶パネル、フラッシュライト等）の導入や ICT の活用

5. ソフト面の運用

- ユーザーに対する適切な案内：補助犬は「補助犬専用トイレ」のみを利用するのではなく、その他にも排泄可能な場所（バリアフリートイレや屋外の適切な場所等）があり、ユーザーは状況に応じてそれを選択して使う。ユーザーにとって利便性が良い場所を自分で選べるように、ユーザーのニーズを聞いて、適切な案内を行う。
- 他の利用者に対する理解促進：バリアフリートイレを補助犬ユーザーも自身や補助犬の排泄のために利用することがある、という正しい理解を啓発することで、トラブルを防ぐことができる。そのための、補助犬マークの掲示は有効である。また、補助犬はペットとは違うという啓発も有効であり、施設の警備や清掃スタッフなどへの教育も重要となる。

6. 合理的配慮の提供

補助犬ユーザーは、日頃から補助犬の行動管理・衛生管理を行っており、排泄物の処理を自らの責任で行っている。そのため、施設側が懸念するような「むやみに施設を汚す」といった事態は起こりにくい。しかしながら、補助犬は命ある生き物でもあるので、体調不良等による排泄の失敗もある。その際も片付け等はユーザーが責任をもって行うが、ユーザーの求めに応じて必要なサポートを提供する。

7. 結論：共生社会の実現に向けて

補助犬専用トイレの整備は、単なる設備の追加ではなく、誰もが気兼ねなく活動できる「共生社会」を具体化する取り組みである。しかし、特に既存施設には補助犬専用トイレがない場合が多く、多機能トイレや車椅子使用者用トイレが都市生活における補助犬の排泄場所として大きな助けとなっている現状がある。一方、トイレの外で待っていた車椅子使用者から厳しい非難を浴びることもあり、そうした経験が当事者の多機能トイレや車椅子使用者用トイレの利用を委縮させる要因のひとつとなっている。

車椅子使用者も含めた社会全体に対し、補助犬もトイレを使うのだという当たり前の理解が広がる必要がある。そのためには、多機能トイレや車椅子使用者用トイレの扉に補助犬のステッカーを貼ることは有効だと考えられる。

また、それらが無い施設においては、「無いから排泄できない」ではなく、屋外スペースなどほかの選択肢を提供するなど、まずはできることから始める姿勢が重要である。社会全体でそうした風土を醸成していくことが、補助犬ユーザーと補助犬の活動範囲を広げることにつながる。

さらに、設置計画の段階で、当事者である補助犬ユーザーに「どのような施設が利用しやすいか」、「どのような場所に設置することが望ましいか」などの意見を聞き、計画に反映することで、よりよい補助犬の排泄環境が実現できる。

こうした「当たり前の受け入れ」の地道な積み重ねが、真のインクルーシブな施設運営を実現する原動力となる。

<参考>

本報告書をもとに、（３）補助犬専用トイレ整備方針の検討について厚生労働省の担当部局へヒアリングを実施した結果、本整備方針に対する異論はない、との回答あり。

ーおわりにー

本報告書は、「身体障害者補助犬のトイレ」の整備の方向性を検討するための基礎資料をまとめることを目的として実施したアンケート調査やインタビュー調査結果等をまとめたものである。国内外訓練事業者、補助犬使用者（ユーザー）、一般市民を対象としたアンケート調査及びインタビュー調査を通じて、さまざまな実態をまとめることができたが、今後の課題として、より精査された資料としていくためにも、「バリアフリートイレ」の利用者である車椅子使用者等への意識調査を実施し、本事業で実施した一般市民を対象とした調査結果と比較分析する必要性があると考えている。

最後に、特定非営利活動法人日本補助犬情報センター様他、WG委員の皆様で調査等を実施いただきましたことに感謝申し上げる次第である。

参考資料 1 第 1 回WG 議事概要

【実施概要】

- 日 時：2025 年 9 月 2 日（火）10:00 ～ 12:30
 - 場 所：エコモ財団会議室およびオンライン
 - 参加者：委員：川内委員（対面）、入交委員、日野委員、吉田委員（オンライン）
事務局：橋爪、竹島（対面）、馳川（オンライン） 以上、7 名
 - 配布資料：議事次第、委員名簿、事業概要、補助犬トイレ設置事例、基礎調査内容
 - 議事内容：1. 委員紹介、2. 事業概要、3. 補助犬トイレ設置事例、4. 基礎調査内容、5. その他
1. 委員紹介の上、本ワーキングでは主査等は設けない旨報告。
2. 事業概要
- ・ 目的：身体障害者補助犬法に基づき国内で活躍する補助犬の排せつ環境の現状を調査し、施設管理者とユーザー双方にとって利用しやすい環境整備の方針を検討すること。
- 事業計画：
- ・ 事例収集：国内外の補助犬トイレの事例をインターネット等で収集し、必要に応じて現地視察も行う。
 - ・ アンケート・インタビュー調査：補助犬ユーザー、訓練事業者、一般人、厚生労働省、国土交通省、設計者などを対象に調査を実施する。
 - ・ 整備方針の検討：事例収集と調査結果をもとに、補助犬の排せつ環境の方針を検討する。
 - ・ スケジュール：全 3 回のワーキングを経て、2025 年 3 月までに一定の方針を定めることを目指す。
 - ・ 「補助犬トイレ」の定義：「補助犬トイレ」という言葉は補助犬専用のトイレを指す場合があるため、多機能トイレや屋外の排せつ場所も含めたより広範な意味合いで「補助犬のトイレに関する基礎調査」に名称を変更する。
3. 補助犬トイレ設置事例
- ◎ 事例収集と課題
- 空港の事例：福岡、羽田、那覇などの空港では、ステンレス製の台や大きなグレーチングが設置されている。これらは清掃のしやすさを重視した設計だが、犬が利用をためらうため、排せつのしやすさとのバランスが課題となっている。特に、那覇空港の砂場は野良猫のトイレとして使われている実態がある。
- その他の事例：東京芸術劇場では人工芝、京王プラザホテルでは広々とした空間と人工芝が好事例として挙げられた。これらの施設は、衛生面と犬の使いやすさを両立させている。また、東京スカイツリーの補助犬トイレは特別な施設を設置したわけではなく、もともとあるスペースを補助犬に限って排泄 OK と案内している。屋外を希望するユーザーにはそちらを、屋内を希望するユーザーには多目的を案内するようにしている。そのような運用でも十分可能。
- さいたま新都心駅の事例：ここに設置された汚物流しは、手の不自由な方への配慮としてレバーハンドルが長く設計されている。しかし、盲導犬ユーザーからは、台が使いにくいとの不満があり、設計意図が利用者へ伝わっていない。
- ◎ 排せつ物の処理と課題
- 補助犬の排せつ物の処理方法について。
- 汚物流し：動物病院では犬の排せつ物を流すことが一般的だが、自治体の条例によっては処理方法が異なり、流して良いかどうかは地域による。メーカー側は、詰まりのリスクから人間の排せつ物以外の処理には慎重な姿勢を示す可能性もあり、日野さんに確認いただいている。（確認結果：メーカーとしては非推奨）
- 処理方法の多様性：補助犬ユーザーは排せつ物を持ち帰ることが多いが、汚物流しや多機能トイレに流す場合もある。一部の盲導犬ユーザーにとっては、汚物流しを扱うのが難しい（視覚に障害があるため、どこに流したら良いのかわからない）ため、持ち帰る方が楽だと感じる人が多い。
- 海外との違い：海外では犬が屋外で排せつする習慣が一般的。日本の高い公衆衛生観念とは異なるため、事例を参考にしつつ、日本の文化に合わせた対応を考える必要がある。
- トレーニング：訓練事業者間で排泄のトレーニング方法が異なるため、把握が必要。
- 事例調査における調査項目について
- ・ 追加の項目：台の面積と下の床面積、犬の目の高さまでの腰壁など犬の視点からの環境配慮、床洗い用の吐水口、設計者の排泄処理想定、床材の項目に砂利、土、草、手洗い・シャワーの利用者（人間用か犬用か）を明記

アクセス経路の屋根の有無、屋内の空調の有無、ユーザーの使用頻度

- ・限られた施設数であるので、施設を対象としたアンケート調査を実施してはどうか。（掲載許諾も取る）
- ・調査で得られた事例や情報は、公開を前提としているため、施設の所有者から事前に許諾を得る必要がある。

4. 基礎調査内容

◎ 補助犬ユーザーへのインタビュー調査について

- ・「理想のトイレ」という抽象的な質問ではなく、今回のパイロット版で出てきた具体的な項目（専用トイレの要否、必要な設備、広さなど）を提示して聞くことで、回答をまとめやすくする
- ・インタビューの実施：9月から11月にかけて、盲導犬および介助犬、聴導犬ユーザーに対するインタビューを実施し、排泄つに関する具体的な要望や課題を聴取する。

◎ 一般へのアンケート調査（WEB）について

- ・排泄後始末の選択肢が詳細すぎる可能性あり。複数回答も検討
- ・アンケートの設問数（費用との関係で15問以内が望ましい）や、居住都道府県の偏り（関東集中）をどう扱うか
- ・「良い人バイアス」に留意し、「良くないと思う」といった強い表現だけでなく「不安がある」などの選択肢も検討
- ・「犬を飼ったことがあるか」という質問を追加
- ・アンケート調査：一般市民を対象としたWebアンケートを実施し、補助犬に対する認識や、多目的トイレおよび専用トイレの利用に関する意見を収集する。（マクロミル）

9月いっぱい、アンケートのたたき台の修正意見等を集める。

5. その他

- ・12月に第2回ワーキンググループを開催し、調査の進捗状況を確認する。

参考資料 2 国内外の補助犬訓練事業者のアンケート調査票（日本語／英語）

私は帝京科学大学で人と動物の関係学を教えている山本真理子です。公益財団法人交通エコロジー・モビリティ財団（日本）から依頼を受けて、諸外国の補助犬トイレに関連する事項について現状調査をしています。この調査は日本の補助犬トイレのあり方を検討するためのものです。つきましては、貴団体の補助犬のトイレトレーニング方法について教えていただきたく、調査依頼のご連絡をさせていただきました。5 分程度の簡単なアンケートです。調査は任意であり、個人情報収集いたしません。ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

実施者 帝京科学大学アニマルサイエンス学科 准教授 山本真理子

連絡先 yamamoto-mariko@ntu.ac.jp

1. 貴団体では、どのような種類の補助犬を育てていますか。（複数回答可）

☐ 盲導犬

☐ 肢体不自由者のための介助犬

☐ 聴導犬

2. 貴団体では、補助犬がどのような環境（地面の上等）で排泄できるようトレーニングをしていますか？（複数回答可）

☐ 芝生

☐ コンクリート／アスファルト

☐ 土

☐ 砂利

☐ ウッドチップ

☐ 人工芝

☐ トイレシート

☐ ワンツ－ベルト

☐ その他（ ）

3. 貴団体では、空港等の補助犬トイレのような犬用トイレで補助犬が排泄できるよう特別なトレーニングをしていますか。

☐ はい

☐ いいえ

4. 空港の補助犬トイレについて、どのような意見を持っていますか。自由にご記入ください。

（ ）

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。

Survey on Toilet Facilities for Assistance Dogs

My name is Mariko Yamamoto, Ph.D., and I am an Associate Professor in the Department of Animal Sciences at Teikyo University of Science, Japan, where I teach and conduct research in Human–Animal Interaction.

I am conducting this survey on the current status of toilet facilities for assistance dogs worldwide on behalf of the Foundation for Promoting Personal Mobility and Ecological Transportation (Japan). The results of this survey will be used to help develop such facilities in Japan.

The questionnaire will take approximately 5 minutes to complete. Participation is voluntary, and no personal information will be collected. We appreciate your cooperation.

Mariko Yamamoto, Ph.D.

Associate Professor

Department of Animal Science

Teikyo University of Science

Contact: yamamoto-mariko@ntu.ac.jp

1. What types of assistance dogs does your organization train? (Multiple answers allowed)

- ☐ Guide dogs
- ☐ Mobility service dogs
- ☐ Hearing dogs
- ☐ Service dogs for people with psychiatric disabilities
- ☐ Service dogs for people with autism
- ☐ Diabetes alert dogs
- ☐ Seizure alert/response dogs
- ☐ Other medical alert dogs
- ☐ Other (_____)

2. What types of ground surfaces does your organization train assistance dogs to relieve themselves on? (Multiple answers allowed)

- ☐ Grass
- ☐ Concrete/Asphalt
- ☐ Soil/Dirt
- ☐ Gravel
- ☐ Wood chips/Bark
- ☐ Artificial turf/grass
- ☐ Potty pads
- ☐ Waste-collecting harness/toilet harness (see images)
- ☐ Other (_____)



. Does your organization provide special training for assistance dogs to relieve themselves in designated toilet facilities, such as Animal Relief Areas at airports?

- ☐ Yes
- ☐ No

4. What are your thoughts on Animal Relief Areas at airports? Please feel free to share your thoughts.
()

5. Please indicate the region where your training organization is located.

- ☐ North America
- ☐ South America
- ☐ Asia
- ☐ Oceania
- ☐ Europe
- ☐ Africa

Thank you for your cooperation.

参考資料3 インタビュー調査

インタビューガイド

1. インタビュー前の準備

1) インタビュー日時

研究者は、研究同意書にて同意し、日程調査連絡票を返送した研究参加者に対し、研究参加者の都合の良い日時を事前に確認し決定する。

2) インタビュー形式

Zoomを用いオンラインにて半構造化インタビューを実施する。インタビューの際にはZoom録画機能またはUDトークを用いインタビュー内容を記録する。

3) インタビューに必要な物品と資料の準備

1 研究同意説明書

2 すでに研究参加者からいただいている同意書

3 PC、Zoom URL または UD トーク（記録用）

4 インタビューガイド、筆記用具

2. インタビュー内容

導入

1) 挨拶・自己紹介

本日はお忙しい中、お時間いただきましてありがとうございます。

私は「所属」の「氏名」と申します。本日は研究課題「補助犬ユーザーに対する補助犬の排泄方法に関するインタビュー調査」についてインタビュー調査を行わせていただきます。よろしくお願いいたします。

2) 面接の目的、内容の説明

まず、本研究の趣旨について、事前にお渡ししている資料（研究同意説明書）はご覧いただいていますでしょうか。何かご不明な点がございませんでしょうか。（不明な点があれば説明する。）この面接は30分程度を予定しております。〇〇さんにお話しいただきたい内容は〇〇さんの補助犬の排泄方法とその困りごとについてです。一部補助犬を同伴している際のご自身の排泄に関する困りごと質問に含まれることがあります。インタビューの中で補助犬の排泄管理等に関する困りごとを思い出すことで、心理的不安などが生じる可能性があります。言いたくないことは拒否することができます。インタビュー途中で休むをしていただくことや、万が一体調が悪い場合にはインタビューを中止することも可能です。それにより何ら不利益を被ることはありません。また、このインタビュー後にも同意を撤回することもできます。その際は、インタビュー後1週間以内に研究協力同意撤回書をeメールに添付してお送りください。

3) 研究協力の同意確認

本研究に関する説明は以上です。何かご質問はありますか。研究協力への同意の意思に変わりはありませんか。インタビュー内容は正確に分析するために、Zoomの録画機能（またはUDトーク）を用い記録させていただきたいのですがよろしいでしょうか。（記録を希望されない場合：インタビュー中に主要となる内容を記述させていただきます。）

<質問項目>

では面接に移らせていただきます。

Q1. 補助犬使用者の概要：氏名、年齢、性別、障害の種類、補助犬ユーザー歴、補助犬の頭数

Q2. 現在の補助犬の概要：名前、年制、性別

Q3. 補助犬使用者の外出の概要：外出時の移動手段

Q4. 補助犬の排泄について：

①排泄について、いつ、どのような訓練を受けたか？

②補助犬の排泄の際、なにか道具を使うか？工夫していることは何か？

③現在の外出の状況：外出頻度、補助犬との外出の頻度、補助犬との外出先

④よく使う、外出先の排泄場所（補助犬専用ではない）はどのようなところ（種類）か？補助犬ユーザー自身の排泄場所との兼ね合いはあるか？

⑤④の場所で排泄をさせるにあたり困ることは何か？それをどのように解決したか？

⑥④の場所で排泄をさせるにあたり改善の希望は何か？

- ⑦よく使う、外出先の「補助犬専用トイレ」はあるか？
- ⑧⑦の場所で排泄をさせるにあたり困ることはあるか？それをどのように解決したか？
- ⑨⑦の場所で排泄をさせるにあたり改善の希望は何か？
- ⑩理想の補助犬専用トイレとは？
- ⑪社会に対して、補助犬のトイレ（全般）に関して知ってほしいこと・理解してほしいことは？

参考資料4 アンケート調査票（WEB 調査）

回答者へ実際に配信した調査画面を示す。以下はパソコン表示画面であり、スマホ回答者の場合は画面が多少異なる。

「補助犬の排せつに関する意識調査」へのご協力をお願い

この調査は、公益財団法人交通エコロジー・モビリティ財団の委託事業で、特定非営利活動法人日本補助犬情報センターが実施しています。

【アンケートの目的】

補助犬および補助犬ユーザーが利用しやすく、施設が管理しやすい「補助犬の排せつ環境」を調査しています。そこで今回、「補助犬の排せつ環境整備」の方針検討に向けて、アンケートを実施します。皆さまの補助犬に関する認知度や意識を把握することで、より良い環境整備に向けた検討を進めます。回答の正誤は一切問いません。皆さまの率直なご意見をお聞かせください。ご協力をお願いいたします。

【必ず事前にお読みください】

- ・設問数は15問で、標準的な回答時間は5～8分程度です。
- ・本アンケートへの回答は任意です。参加しないことや、途中で回答をやめることもでき、それらによる不利益はありません。
- ・回答内容による不利益もありません（回答送信後に取り消すことはできません）。
- ・回答することにより、心理的・身体的な危険性が生じることはありません。
- ・個人が特定される情報を入力する欄はありません。
- ・調査会社から提供される情報から、研究者が個人を特定することはできません。
- ・回答結果は厳重に管理し、他の方に漏れることはありません。
- ・回答結果は、個人が特定されない形で統計的に処理します。
- ・統計的に処理したデータは、「補助犬の排せつ環境整備方針」やトイレのご提案、学会等の発表に使用します。
- ・収集したデータを、目的外に使用することはありません。
- ・収集したデータは、研究終了後10年間保存の上、物理的に破棄します。

【このアンケートに関する責任者・お問い合わせ先】

研究責任者：吉田文（大阪保健医療大学、特定非営利活動法人 日本補助犬情報センター）

問い合わせ先：特定非営利活動法人 日本補助犬情報センター：info★jsdrc.jp

※メールをお送りいただく場合は、アドレスの★を半角の@に変えてください。

以上をご了承いただける場合は、下記の「同意する」にチェックの上、「回答する」ボタンをクリックしてアンケートにお進みください。

☐ 同意する

回答をやめる

回答する

Q1. 「補助犬」についてお尋ねします。

あなたは、「補助犬」および「身体障害者補助犬法」について、どの程度知っていますか？
名称や内容（どういうものか）に関して、あなたの認知度に最も近いものをそれぞれひとつ、お選びください。

*

	名称も内容も知っている	名称のみ知っている	名称も内容も知らない
「補助犬」について	☐	☐	☐
「身体障害者補助犬法」について	☐	☐	☐

Q2. あなたは、「補助犬」にはどんな種類があると思いますか？
あなたが「補助犬」だと思う犬の種類をすべてお選びください。

※正誤は問いません。

*（複数選択）

- ☐ 盲導犬
- ☐ セラピー犬
- ☐ 聴導犬
- ☐ 嗅覚犬
- ☐ 介助犬
- ☐ 災害救助犬
- ☐ 警察犬
- ☐ メンタルサポート犬
- ☐ どれも知らない・わからない



Q3. 上記にお示した画像について、以下の質問にお答えください。

あなたは、このマークを実際に見たことがありますか？
あてはまるものをひとつ、お選びください。

*

- ☐ 実際に見たことがある
- ☐ 実際に見たことはない
- ☐ 覚えていない

Q4. あなたは、「補助犬ユーザー（補助犬を連れた人）」を実際に見たことがありますか？
 あてはまるものをひとつ、お選びください。
 ※「補助犬」とは、盲導犬、介助犬、聴導犬の3種類の総称で、「身体障害者補助犬法」で定められています。

*

- ☐ ある（直近1年以内）
☐ ある（1年よりも前）
☐ ない・覚えていない



Q5.
 上記のマークは、「ほじょ犬マーク」といいます。
 「ほじょ犬・補助犬」とは、盲導犬、介助犬、聴導犬の総称です。

【ほじょ犬マークの有無】と【補助犬ユーザーが利用できる施設】の関係について、あなたの理解に最も近いものをひとつ、お選びください。

※正誤は問いません。

*

- ☐ 「ほじょ犬マーク」があれば、利用できる
☐ 「ほじょ犬マーク」がなくても、利用できる
☐ わからない

Q6.
 ここからは、「補助犬の排せつ」についてお尋ねします。

「補助犬」の外出先での排せつに関する以下の3つの情報について、あなたのお考えに最も近いものをそれぞれひとつ、お選びください。

※正誤は問いません。

*

	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない	わからない
補助犬は、補助犬ユーザーの指示や管理のもと、補助犬の体調に合わせて排せつするよう訓練されている	☐	☐	☐	☐	☐
補助犬の排せつ物は、補助犬ユーザーが責任を持って片づけている	☐	☐	☐	☐	☐
補助犬は、排せつを我慢させられている	☐	☐	☐	☐	☐

Q7.

あなたは、「補助犬」がどのような場所で排せつしていると思いますか？

あなたが思う場所をすべて、お選びください。

※正誤は問いません。

※※選択肢の「多目的トイレ」とは、車椅子用トイレに、乳幼児用のベッドやオストメイト（人口肛門などを付けた人）用の流しなどを設置したトイレのことです。「多機能トイレ」や「バリアフリートイレ」とも言います。

*（複数選択）

- ☐ 施設側が指定するスペース
- ☐ 道路・歩道
- ☐ 公園
- ☐ 一般トイレ
- ☐ 多目的トイレ（※※）
- ☐ 補助犬専用トイレ
- ☐ その他
- ☐ わからない

Q8.

あなたは、「補助犬」が排せつする際に「多目的トイレ」を使ってもよいと思いますか？

あなたのお考えに最も近いものをひとつ、お選びください。

※「多目的トイレ」とは、車椅子用トイレに、乳幼児用のベッドやオスト（人口肛門などを付けた人）用の流しなどを設置したトイレのことです。「多機能トイレ」や「バリアフリートイレ」とも言います。

*

- ☐ よいと思う
- ☐ どちらかといえばよいと思う
- ☐ どちらかといえばよくないと思う
- ☐ よくないと思う

Q9.

前問にて、「補助犬」が「多目的トイレ」を排せつに利用することについて、「どちらかといえば」も含めて「よくないと思う」と回答された方にお聞きます。

そのように思う理由として、あてはまるものをすべてお選びください。

* (複数選択)

- ☐ 人間用のトイレを犬が使うのはおかしい
- ☐ 犬の排せつ物で汚れそう
- ☐ 補助犬ユーザー自身が車椅子を使っていなければ、一般トイレを使うべき
- ☐ 混雑する・待ち時間が長くなる
- ☐ ニオイが気になる
- ☐ 犬アレルギーが心配
- ☐ 設備が壊れそう
- ☐ 他の利用者とトラブルになりそう
- ☐ ルールや運用がわからないので不安
- ☐ その他
- ☐ 特に理由はない

Q10. あなたは、「補助犬専用のトイレ」を設置することについて、どう思いますか。 あなたのお考えに最も近いものをひとつ、お選びください。

*

- ☐ 「専用のトイレ」がある方がよいと思う
- ☐ どちらかといえば、「専用のトイレ」がある方がよいと思う
- ☐ どちらかといえば「専用のトイレ」は無い方がよいと思う
- ☐ 「専用のトイレ」は無い方がよいと思う

Q11.

前問にて、「補助犬専用のトイレ」が「どちらかといえば」も含めて「ある方がよいと思う」と回答した方にお聞きます。

その理由としてあてはまるものをすべてお選びください。

* (複数選択)

- ☐ 「専用のトイレ」がある方が、補助犬が排せつしやすい
- ☐ 「専用のトイレ」があれば、補助犬ユーザーが補助犬が排せつできる場所を探す手間が省ける
- ☐ 補助犬にその辺に排せつされたら困る
- ☐ 施設の衛生管理がしやすくなる
- ☐ 周囲の利用者への配慮になる
- ☐ トラブルの予防・ルールの明確化につながる
- ☐ 多様な人へ配慮をしていると感じる
- ☐ その他
- ☐ 特に理由はない

Q12.

前問にて、「補助犬専用のトイレ」が「どちらかといえば」も含めて「無い方がよいと思う」と回答した方にお聞きします。

その理由としてあてはまるものをすべてお選びください。

＊（複数選択）

- ☐ ペットの犬と同じように、補助犬も道端などで排せつすればよい
- ☐ 設置や維持管理にコストがかかりそう
- ☐ 設置スペースの確保が難しそう
- ☐ 利用対象者が限られるので、その他大勢の人にメリットが少ない
- ☐ 衛生面やニオイが不安
- ☐ 悪用やマナー違反が不安
- ☐ その他
- ☐ 特に理由はない

Q13.

あなたと「犬」の関係性や状況、認識等についてお尋ねします。

以下の3つの項目について、「はい」か「いいえ」をそれぞれお選びください。

＊

	はい	いいえ
現在犬を飼っている、または過去に飼ったことがある	☐	☐
犬（動物）へのアレルギーがある	☐	☐
犬は好きなほうだ	☐	☐

Q14.

このアンケートに関するご感想やご意見などございましたら、ご自由にご記入ください。

※補助犬についてお知りになりたい方は、ぜひ下記資料をご覧ください。

■資料名「ほじょ犬・もっと知ってBOOK：2019年版（厚生労働省）」

【資料をお読みいただくには】

- ・スマホ回答の方は、画面をピンチアウト（画面を2本の指で拡大する操作）してください。
- ・パソコン回答の方は、画面表示を拡大するか、QRコードをスマホ等で読み取ってください。



ご意見・ご要望

アンケートで提示した資料は以下のとおりである。

※実際の調査票では上記リンクを掲載できなかったため、資料へ遷移するQRコードを作成し、画像と共に提示した。

■資料名：ほじょ犬・もっと知ってBOOK：2019年版（厚生労働省）

<https://www.mhlw.go.jp/content/000489424.pdf>

Q15. 最後に、あなたご自身についてお尋ねします。

あなたのご職業として、最も近いものをひとつ、お選びください。

※複数のお仕事をされている方は、主なほうをお選びください。

*

- ☐ 会社員・派遣社員・パートなど（飲食業）
- ☐ 会社員・派遣社員・パートなど（対面サービス業）
- ☐ 会社員・派遣社員・パートなど（その他）
- ☐ 公務員（教職員除く）
- ☐ 教職員
- ☐ 団体職員
- ☐ 研究職
- ☐ 医療関係者
- ☐ 士業（公認会計士・弁護士・税理士・司法書士など）
- ☐ 個人事業主（飲食業）
- ☐ 個人事業主（対面サービス業）
- ☐ 個人事業主（その他）
- ☐ フリーランス（自由業）
- ☐ 会社経営者、役員（飲食業）
- ☐ 会社経営者、役員（対面サービス業）
- ☐ 会社経営者、役員（その他）
- ☐ 専業主婦・主夫
- ☐ 学生
- ☐ 無職
- ☐ その他

Q. 都道府県

選択してください

送信

アンケートは以上です。
ご協力ありがとうございました。

参考資料 5 国内外主要空港の補助犬トイレ実態調査対象空港一覧（132 空港）

	地域	国	空港名
1	アジア	日本	東京国際空港(羽田空港)
2	アジア	日本	関西国際空港
3	アジア	日本	成田国際空港
4	アジア	日本	那覇空港
5	アジア	日本	福岡空港
6	アジア	日本	大阪国際空港
7	北米	アメリカ	キーウエスト国際空港
8	北米	アメリカ	パナマシティ・ベイ郡国際空港(ノースウェストフロリダビーチ国際空港)
9	北米	アメリカ	グアム国際空港(Antonio B. Won Pat Int'l)
10	北米	アメリカ	ロサンゼルス国際空港
11	北米	アメリカ	ポート・コロンバス国際空港
12	北米	アメリカ	メンフィス国際空港
13	北米	アメリカ	サンフランシスコ国際空港
14	北米	アメリカ	フォートローダーデール・ハリウッド国際空港
15	北米	アメリカ	ベリンガム国際空港
16	北米	アメリカ	スポケーン国際空港(Geiger Field)
17	北米	アメリカ	リッチモンド国際空港
18	北米	アメリカ	バーミングハム＝シャトルズワース国際空港
19	北米	アメリカ	ジュノー国際空港
20	北米	アメリカ	フェニックス・スカイハーバー国際空港
21	北米	アメリカ	ツーソン国際空港
22	北米	アメリカ	オークランド国際空港
23	北米	アメリカ	オンタリオ国際空港
24	北米	アメリカ	サクラメント国際空港
25	北米	アメリカ	サンディエゴ国際空港
26	北米	アメリカ	ノーマン・Y・ミネタ・サンノゼ国際空港
27	北米	アメリカ	デンバー国際空港
28	北米	アメリカ	トゥウィード・ニューヘイブン空港
29	北米	アメリカ	デイトナビーチ国際空港
30	北米	アメリカ	サウスウエストフロリダ国際空港
31	北米	アメリカ	ジャクソンビル国際空港
32	北米	アメリカ	メルボルン国際空港
33	北米	アメリカ	マイアミ国際空港
34	北米	アメリカ	オーランド国際空港
35	北米	アメリカ	オーランド・サンフォード国際空港
36	北米	アメリカ	サラソタ・ブレイデントン国際空港
37	北米	アメリカ	セントピーターズバーグ・クリアウォーター国際空港
38	北米	アメリカ	タンパ国際空港
39	北米	アメリカ	パームビーチ国際空港
40	北米	アメリカ	ハーツフィールド・ジャクソン・アトランタ国際空港
41	北米	アメリカ	ダニエル・K・イノウエ国際空港 / ホノルル空港
42	北米	アメリカ	オヘア国際空港
43	北米	アメリカ	ミッドウェー国際空港
44	北米	アメリカ	フォートウェイン国際空港
45	北米	アメリカ	インディアナポリス国際空港
46	北米	アメリカ	デモイン国際空港
47	北米	アメリカ	シンシナティ・ノーザンケンタッキー国際空港
48	北米	アメリカ	ルイビル国際空港(Standiford Field)
49	北米	アメリカ	ルイ・アームストロング・ニューオーリンズ国際空港
50	北米	アメリカ	バンゴー国際空港
51	北米	アメリカ	ボルチモア・ワシントン国際空港
52	北米	アメリカ	ジェネラル・エドワード・ローレンス・ローガン国際空港
53	北米	アメリカ	ジェラルド・R・フォード国際空港
54	北米	アメリカ	ミネアポリス・セントポール国際空港
55	北米	アメリカ	ロチェスター国際空港
56	北米	アメリカ	ジャクソン・エヴァース国際空港
57	北米	アメリカ	カンザスシティ国際空港
58	北米	アメリカ	ランバート・セントルイス国際空港
59	北米	アメリカ	ピリングス・ローガン国際空港
60	北米	アメリカ	ミズーラ国際空港

	地域	国	空港名
61	北米	アメリカ	マッカラン国際空港
62	北米	アメリカ	リノ・タホ国際空港
63	北米	アメリカ	ニューアーク国際空港
64	北米	アメリカ	アルバカーキ国際空港
65	北米	アメリカ	バッファロー・ナイアガラ国際空港
66	北米	アメリカ	ジョン・F・ケネディ国際空港
67	北米	アメリカ	グレーター・ロチェスター国際空港
68	北米	アメリカ	シラキュース・ハンコック国際空港
69	北米	アメリカ	ウィルミントン国際空港
70	北米	アメリカ	グランドフォークス国際空港
71	北米	アメリカ	クリーブランド・ホプキンス国際空港
72	北米	アメリカ	タルサ国際空港
73	北米	アメリカ	フィラデルフィア国際空港
74	北米	アメリカ	ビッツバーグ国際空港
75	北米	アメリカ	チャールストン国際空港 / チャールストン空軍基地
76	北米	アメリカ	グリーンビル・スパータンバーグ国際空港
77	北米	アメリカ	マートルビーチ国際空港
78	北米	アメリカ	ナッシュビル国際空港(Berry Field)
79	北米	アメリカ	オースチン・バーグストロム国際空港
80	北米	アメリカ	ブラウンズビル・サウスパドレイアイランド国際空港
81	北米	アメリカ	ダラス・フォートワース国際空港
82	北米	アメリカ	エルパソ国際空港
83	北米	アメリカ	ラレド国際空港
84	北米	アメリカ	ラボック・プレストン・スミス国際空港
85	北米	アメリカ	マッカレン・ミラー国際空港
86	北米	アメリカ	サンアントニオ国際空港
87	北米	アメリカ	ソルトレイクシティ国際空港
88	北米	アメリカ	ワシントン・ダレス国際空港
89	北米	アメリカ	ノーフォーク国際空港
90	北米	アメリカ	シアトル・タコマ国際空港
91	北米	アメリカ	ジェネラル・ミッチェル国際空港
92	北米	アメリカ	プンタゴルダ空港
93	北米	カナダ	ケベック・ジャン・ルサージュ国際空港
94	北米	カナダ	ロンドン国際空港
95	北米	カナダ	オタワ・マクドナルド・カルティエ国際空港
96	北米	カナダ	ハミルトン・ジョン・C・マンロ国際空港
97	北米	カナダ	サンダーベイ国際空港
98	北米	カナダ	トロント・ピアソン国際空港
99	北米	カナダ	モントリオール・ミラベル国際空港
100	北米	カナダ	モントリオール・ピエール・エリオット・トルドー国際空港
101	北米	カナダ	ハリファックス・ロバート・L・スタンフィールド国際空港
102	北米	カナダ	フレデリクトン国際空港
103	北米	カナダ	モンクトン国際空港
104	北米	カナダ	ウィニペグ・ジェームス・アームストロング・リチャードソン国際空港
105	北米	カナダ	ケロウナ国際空港
106	北米	カナダ	バンクーバー国際空港
107	北米	カナダ	ビクトリア国際空港
108	北米	カナダ	レジャイナ国際空港
109	北米	カナダ	サスカトゥーン・ジョン・G・ディーフェンバカー国際空港
110	北米	カナダ	カルガリー国際空港
111	北米	カナダ	エドモントン国際空港
112	北米	カナダ	セントジョンズ国際空港
113	北米	プエルトリコ	ルイス・ムニョス・マリノ国際空港
114	欧州	イギリス	ロンドン・ヒースロー空港
115	欧州	イギリス	ベルファスト国際空港
116	欧州	イギリス	マンチェスター空港
117	欧州	イギリス	エディンバラ空港
118	欧州	アイルランド	ダブリン空港
119	欧州	イタリア	ポローニャ・ボルゴ・パニゴーレ空港
120	欧州	フィンランド	ヘルシンキ・ヴァンター国際空港

	地域	国	空港名
121	欧州	フィンランド	イヴァロ国際空港
122	欧州	フィンランド	オウル空港
123	欧州	ベルギー	アントワープ国際空港
124	欧州	デンマーク	コペンハーゲン空港
125	欧州	ラトビア	リガ国際空港
126	オセアニア	オーストラリア	シドニー国際空港
127	オセアニア	オーストラリア	アデレード空港
128	オセアニア	オーストラリア	ブリスベン空港
129	オセアニア	オーストラリア	パース空港
130	オセアニア	トルコ	イスタンブール・アタテュルク国際空港
131	中南米	コロンビア	エル・ドラド国際空港
132	アフリカ	南アフリカ共和国	ランセリア国際空港

この「身体障害者補助犬のトイレに関する基礎調査報告書」については、下記のことにご承知ください。

1. 雑誌、記事などの出版物、及び学会、その他の会合で内容を発表する場合は、「本誌」によることを明らかにしてください。
2. 無断掲載及び複製をお断りいたします。

身体障害者補助犬のトイレに関する基礎調査報告書

2026 年 3 月 発行

発行者：公益財団法人交通エコロジー・モビリティ財団

理事長 若 林 陽 介

〒112-0004 東京都文京区後楽1丁目4番14号 後楽森ビル10階

電話：03-5844-6291（代表）FAX：03-5844-6294（共通）

URL：<https://www.ecomo.or.jp/>

※調査内容等については、以下にお問い合わせください。

特定非営利活動法人 日本補助犬情報センター

E-mail：info@jsdrc.jp

URL：<https://www.jsdrc.jp/>